

脱兎は木組みの街で何 を想う

ライスonライス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

春から高校二年生になる少年、白波託兔。

父親に勧められ木組みと石畳の街で一人暮らしをすることになって一年。彼はこの街の喫茶店、ラビットハウスの常連客である。そこでの様々な出会いは彼に何を与えるのか。

——追記——

(2021/12/28)

『街の喫茶店』加筆修正

お久しぶりです。また少しずつ更新していきます。

目次

第一話 街の喫茶店 ————— 1

第二話 特技と技術と才能と ————— 29

第三話 帰り道 ————— 43

第四話 気まぐれな悪戯兎 ————— 52

第五話 そう言う因果もあるものだ

64

第六話 鮮やかなパンだっついていいじやな

い ————— 79

第七話 甘味と兎 ————— 95

第八話 兎が苦手な君にお野菜を

111

第九話 ハーブと芸術の融合 ————— 125

第十話 はじめてのおとまり ————— 139

第十一話 野菜は無くとも背は伸びる

160

第十二話 占いは水玉模様 ————— 171

第十三話 運命と図書館はこの街に

185

第十四話 球が返せても点は取り返せな

い ————— 201

第十五話 楽園を求めてモヤシを齧る

217

第十六話 兎の休日 ————— 231

第十七話 開店、妹喫茶 ————— 243

第十八話 最高の笑顔を貴方に ————— 255

277 第十九話 穏やかな陽に誘われて

第一話 街の喫茶店

扉を開けるとカランコロんと、ドアベルの軽快な音が響いた。

周囲を見渡せば、年季の入った家具と暖かな照明が彼を迎えた。

鼻腔をくすぐる芳醇なコーヒー豆の香りと、カウンターにこさえられたサイフォンを見ればここが喫茶店だということはすぐに理解できるだろう。

心地の良い雰囲気店内に足を踏み入れると、可愛らしい店員さんが彼を出迎えてくれた。

「いらつしやいませ……つてタクトさんでしたか。空いてる席にどうぞ」

水色のストレートのロングヘアとバツ印の髪留めが特徴の女の子だ。

頭には白い毛玉のようなものが鎮座している。

言われなければこの毛玉がアングラウサギという品種のウサギであることはわかるまい。

かく言うこの店の常連であるタクトも初めてこのウサギを見た時は、驚愕し思わず当時のマスターに、毛玉が溜まってますよと指摘してしまった経験がある。

あの時のマスターの困惑した表情とホコリ呼ばわりされたウサギの体当たりは一年

経つ今でも忘れられない。

「ああ。お疲れ、チノ。ティツピーも、相変わらずもふもふしてるな」

そんなような出来事を経てようやくタクトに小動物だと認識された毛玉はこの喫茶店のマスコットであり、名をティツピーと言う。

タクトがすれ違いざまに、チノと呼ぶ少女の頭に乗っているティツピーを撫でると、気持ち良さそうに目を細める。

ただでさえ自身の毛に埋まってしまう顔だが、こうして目を細めてしまうと最早どこが顔なのかもわからない。

などと考えているとティツピーから敵意と抗議の意が籠った視線を感じたため、タクトはそそくさとカウンター席に腰を下ろした。

「タクトさんはいつも通りでいいですか?」

「ああ。頼む」

タクトの注文を受け取ったチノはカウンターに入ると、慣れた手つきでコーヒーマルを回し豆を砕いていく。

コーヒーマルを淹れる時は大抵インスタントの粉末に湯を注ぐだけのタクトからすると、よく分からない機器を巧みに扱う彼女は関心を抱くには十分だった。

「……あの」

しばらくコーヒー豆を挽くチノを観察していたタクトだったが、不意にチノが声をかけてきた。

「どうした？」

「……じつと見られているとやりづらいのですが」

どうやらタクトの視線が気になるらしい。

別に射止めようとして見ている訳でもないのに、気にする必要はないのだが。

「お構いなく」

「……」

それでもやはり気になるようで若干そわそわしている様子のバリスタ少女。

このまま眺めているのもいいかとも思ったタクトだったが、いやらしい目で見てるなどと変態のレッテルを貼られるのも困るので観察をやめ、改めて店内に目を向けてみた。

落ち着いた雰囲気、壁や備品を見ても古さを感じる店。

と言つてもそこに貧乏臭さやおんぼろさはなく、どことなく安心感を覚える佇まいである。

今はどうやらタクト以外に客は居ないようだ。

タクトが初めてこの店に訪れた時も今と同じく閑古鳥が鳴いていたことを思い出し、

小さく笑った。

当時はあまりに人が居ないので、入る店を間違えたかと身構えたものだ。

その数分後には自分の考えが間違えて、本物のコーヒーを味わえる喫茶店を疑ってしまつたことに猛省したのは良い思い出である。

しばらくしてコーヒーを入れ終わったチノがタクトにカップを差し出してきた。

「お待たせしました。うちのオリジナルブレンドです」

「ありがとうございます」

タクトは受け取つたコーヒーを一口啜つた。

コーヒー豆の豊かな香りが口いっぱいに広がり、程よい苦味が彼の体を満たしていく。

なんと表現しようにも旨いという言葉しか出てこないタクトは自身の語彙力の低さを呪つた。

コーヒーカップを口から離すと、思わずほつ、と心地良さからため息が出てしまう。

「……うん。やつぱりここのブレンドは美味い。コーヒー分らない俺でもわかる」

「ありがとうございます。でも、タクトさん味はちゃんと見分けられるじゃないですか。練習すれば立派なバリスタになれるですよ？」

タクトのお世辞にも気の利いた褒め方とは言えない言葉を聞いてチノはくすりと笑

う。

タクトは確かに味の違いを感じるができるが、ただそれだけである。

どう言った味のコーヒーが何という種類の豆を使ったコーヒーかというのは愚か、旨いコーヒーの淹れ方もわからない。

ただ自分の舌に合うから旨い。プロが淹れるから繊細な味を出せるということしかわからない。

「私だって最初からコーヒーを淹れられた訳じゃないですから」

無論、タクトもそれについては理解しているし、何事も練習すれば上達することは知っている。

ただ、タクトは自分で淹れたコーヒーと誰かが淹れたコーヒーとでは味わいが違うと思っており、だからこそ足繁くこの喫茶店に通うのだ。

故に今のタクトにはバリスタになる気は無い。

だからタクトは、チノの言葉に対してこのように返すことしか出来ない。

「そういうものか？」

「そういうものです」

タクトはどこか自慢げに話すチノに相槌を打ち、再びコーヒーを口に含む。

これが旨い。

「それにしてもこの店は相変わらずだな。まあ静かで居心地が良いのはいいんだけど」
店内には他に客がいないため、人の話し声はなく、聞こえてくるのは街の生活音とレコードから流れるクラシック音楽ばかりである。

「おじいちゃん的には隠れ家的喫茶店というコンセプトだったらしいのですが……現在
の主な収入源は父が夜にやってるバーなのでなんとも言えませんね」

チノには祖父がいる。

彼は他でもないこの喫茶店を開業した初代マスターであり、タクトがこの店に通う
きっかけとなったコーヒーを入れた、白い立派な髭が特徴的な優しいおじいさんだ。

と言っても彼は去年のうちに亡くなってしまったため、現在は彼の息子、つまりチノ
の父親が店を継いでいる。

「隠れ家的……まあ確かにそんな雰囲気はするか。それにマスターはロマン主義者だっ
たからな」

「ほほう！ タクトは分かかって——」

「——いえ、どうしようもなくお客が少なかったことの言い訳だと思えます」

「な、なんてこと言うんじゃないよチノ！」

タクトのチノの祖父に対する想像をチノは無慈悲にもバツサリと切り捨てた。

天国のマスターからも抗議の声が上がり、まるですぐ側に本人がいるかのような幻聴

が聞こえ——

「わしを勝手に殺すんじや……いや死んでいるのは本当だが……ええい！ とにかく無視するでなあああい!!」

失敬。幻聴ではなかった。実際に彼の渋い声が店内に響いた。

声の発生源はチノの頭で憤る白い毛玉ことティッピー。

可愛らしくモフモフした生物から深みのあるダンディズムを感じさせる声が発せられるのはシユールな光景である。

一発芸として宴会の席で同様の腹話術を披露すればそれなりにウケるのではないだろうか。

先程チノの祖父は亡くなったと説明したがそれは嘘ではない。

タクトも実際に彼の訃報を聞き、非常にショックを受けた経緯がある。

仮にマスターの死が嘘であったとしたら彼が趣味の悪い冗談を演じていたことになるが、可愛い孫娘や常連に対してそのような態度を取ることはありえない。

受け入れ難い事実だが彼は確かに亡くなったのだ。

しかし彼は現にティッピーの身体を借り、チノの頭上で全身を使つて怒りを表している。

こうなった原因は不明らしいが、本人曰く天国から門前払いを喰らい、ティッピーに

憑依しているとの事だ。

ちなみにチノはこのことを家族以外には秘密にしているらしいが、去年からの常連客であるタクトには一発でバレてしまった。

頑なに自分の腹話術だと主張し、頑張つて口を開けずに話そうとしていた彼女の姿はタクトの脳裏に深く刻まれている。

「まあまあ。少なくとも俺はこの店の雰囲気はいいと思つてますよ」

このままティッピーを怒らせておくのも忍びないのでフォローを入れると、すっかり機嫌が直つたのかマスターは穏やかな表情に戻つた。

ちよろい。

「タクト……お前さんは良い奴じゃのう。どうじゃ?? このままラビットハウスの従業員にならんか?」

ラビットハウス、それがこの店の名前である。

たまにウサギカフェと勘違いしてウサギを愛でようとやってきてウサギが居ないとに落胆し、折角来たのだからとコーヒーを飲み、そのまま常連になる客が居る。

恒久的な顧客を得るのに、この店名が役立っているのはあまり知られていない。

それはさておき、折角初代マスターのお墨付きをいただき、従業員として誘われたが、タクトはラビットハウスを初めとして、バリスタとして働く気は無かつた。

タクトは誰かが淹れたコーヒーを飲むのが好きなのだ。

だからこそタクトは少し笑って答えた。

「気持ち嬉しいですけど遠慮しときます。俺は今のままがいいので」

「残念じゃのう……」

マスターは心底残念そうにため息をつく。

ウサギがため息をつくのもなかなか新鮮な光景である。

とは言え、従業員として誘われる程度にはマスターから認められているということなので、そこは素直に嬉しい。

「まあ、今のバイトがクビになったら考えてみますよ」

そう言つてタクトが再度コーヒーに口をつけた時、来客を知らせる鐘が店内に響いた。

「いらつしやいませ」

チノの接客をスルーしたその客は店内のカウンター、テーブルの下など文字通り隅々を見て回っている。

何かを探しているのだろうか。

「あれ……?!」

タクトはコーヒーを啜りながら横目でその客を観察する。

ミルクココアのような淡いブロンドヘアと桜の髪飾りが特徴的な女の子だ。

この街ではあまり見ない雰囲気少女だが、旅行者か越してきたばかりの生徒さんだろうか。

彼女は慌ただしく店内を見回して一言。

「う、ウサギが居ない……!?」

どうやら彼女はラビットハウスという店名からウサギカフェのような物を想像していたらしい。

なるほど、先程からの不審行動はウサギを探していたのだろう。

しかし探せども探せどもウサギらしいウサギが見つからず、自分が入った喫茶店は決してウサギカフェではなかったのだと気づいてしまったようだ。

悲しい現実打ちひしがれた彼女は糸が切れたようにフラフラと一つの席に座った。

それを確認したチノが彼女の席に水を運びにカウンターから出ていく。

「あの……お水です」

チノが水を少女の席のテーブルに置くと、少女はチノの頭で訝しげにしているティツピーに注目する。

「モジャモジャ……」

「これですか？ これはティツピーです。一応ウサギです」

まあ中身は違うのだが。

「ウサギ?!?」

それでも真実を知らない少女にはただのウサギにしか見えない。

店内を隈無く探すほどにウサギを愛しているらしい彼女は当然目を輝かせた。

「あの……(注)注文は?!?」

予想外の食い付きにチノは若干引いているようだが、店員としての責務を果たさんと努めている。

「じゃあそのウサギさん!」

「……非売品です」

ティップー非売品宣言を受けた少女は大きくうなだれた。

と思ったらすぐに立ち直りチノに進言した。

なんとも忙しい娘さんである。

「じ、じゃあせめて……せめてモフモフさせて!」

「……コーヒー一杯で一回です」

「じゃあ三杯!」

三杯も飲めるのだろうか。

タクトもラビットハウスのコーヒーは好ましく思っているので、よく店に足を運ぶ

が、一日に三杯も頼むことはない。

あまり水分を摂りすぎると水腹になってしまふし、割と痛い出費である。

少女がカフェイン中毒にならないことを祈りながらタクトはコーヒーを啜るのだった。

###

「お待ちせしました」

注文を受けたチノはこれまた見事な手際で三杯のコーヒーを入れ、少女の目の前に並べる。

一見どれも同じコーヒーのように見えるが、全て違う豆を使っており、味わいも香りも僅かにだが違う。

とは言え、飲み慣れていなければ味を見分けることは難しいだろう。

「じゃあコーヒー三杯頼んだから三回触る権利を手に入れたよ！」

「冷める前に飲んでください」

「ああ！　そ、そうだね！　じゃあいただきます！」

少女はチノに言われるままコーヒーに手を伸ばしてカップを次々と口元に運んでい

く。

まずは鼻を近づけて匂いを確認しているようだ。

目を閉じ、香りを味わうようにゆっくりと呼吸をする少女を見て、タクトは目を見開いた。

——まずは豆の香りを楽しみ。

「この上品な香り……これがブルーマウンテンだね……」

——続けて一口。

まさか……。

「この酸味……これがキリマンジャロ」

——余韻を楽しむように息を吐き。

まさかこの少女……。

「そしてこの安心する味……」

——全ての味を見分ける。

この少女、もしかすると……。

「これはインスタントの——」

「それはうちのオリジナルブレンドです」

もしかすると非常に面白い娘なのではないだろうか。

「——あれ?」

雰囲気だけで言えばコーヒーを嗜む姿はなかなかどうして様になっていて、一見するとプロのコーヒーマスターのようなようである。

しかし——

「最初から全部違います。一杯目からコロンビアとブルーマウンテンです」

その上でコーヒーマスターの品種を当てようとして、物の見事に全て外すという光景はタクトからすると非常に興味深いものだった。

「……うん、どれも美味しいよ! ウサギさんをモフモフしてもいいかな?」

「……いいですよ」

チノは少し納得がいったなさそうな様子でティップパイを少女に渡した。オリジナルブレンドを事もあろうかインスタントと間違われたことが不服なのだろうか。

一方で少女は満面の笑みでチノからティップパイを受け取ると勢いよくモフモフしました。

なんという愛だろうか。

些か極端な愛情表現ではあるが。

「えへへもふもふ気持ちいい……あ、いけないヨダレが……」

「のおおおお!!」

少女の口元から白糸の如く垂れるヨダレから逃れようとティツピーが暴れる。

「あれ?? 今なんか聞こえなかった?」

「気のせいです」

少し無理があるのでは。

明らかにティツピーが叫んでいたのだが、チノはサラツと流す。

「そう?? それにしても本当にこの感触、癖になるな」

特に気にすることもなく、モフモフを再開する少女を見てタクトはそれでいいのかと疑問を抱くが、当の少女は幸せそうな表情でティツピーを愛で続ける。ティツピーは鬱陶しそうにしているが。

「ええい! いい加減に手を離せ小娘が!」

「ええ!?! なんかこの子にダンディな声で拒絶された!?!」

ついに我慢の限界に来たティツピーが叫び声と共に少女の腕の中から飛び出さんと
もがく。

彼女もこれは流石に驚いたようで目を丸くしている。

「えつとそれは……」

対してティツピーが奇天烈な喋るウサギだとバレたくないらしいチノは困ったように口ごもる。

トレイで口元を隠し、数秒悩んだ後に出した答えは……

「……あの人の声です」

「おい」

タクトに全てを委ねることだった。

濡れ衣を着せられ、タクトは抗議の声を上げる。

身に覚えのない言動を押し付けられてはたまったものではない。

呆れ顔で席から立ち上がったタクトを少女は不思議そうに見つめる。

「どちら様?」

「互いにな」

それもそうだろう。

タクトとこのとても面白い少女は今日出会ったばかりである。

名前どころか顔もわからないのだ。

そのような相手を前にウサギのアテレコをするなど、それではまるでタクトが面白い奴みたいになってしまうではないか。

「とりあえずコーヒーを全部飲んでください」

やれやれといった顔をしているが、この状況を作り出した主犯であることをチノは理解しているのだろうか。

###

折角なので自己紹介でもしよう、との事でタクトが席を移動し、一つのテーブルを三人で囲む形で座る。

目の前にはタクトのものと合わせて四つのコーヒーカップ。

なかなか壮観である。

「それで、君は??」

タクトは自分の分のコーヒーカップを片手に少女の話を聞こうと耳を傾ける。

「私、春からこの街の学校に通うことになったんだけどね、下宿先を探しているうちに迷子になっちゃって……」

女の子は三杯のコーヒーを交互に啜りながら困り顔を浮かべる。

「下宿先?」

「そうそう。それで休憩するついでに道を聞こうと思っていたんだけど……香風さん家って知ってる?? この近くだと思うんだけど……」

「香風か……チノ?」

香風という苗字に思い当たる節があるタクトはチノに視線を送る。

チノも頷いて。

「はい。香風はうちです」

「ええ!?!」

この喫茶店が香風家だということを少女に説明すると、少女は信じられないといった様子だ。

「すごい! これはもう偶然を通り越して運命だよ!」

チノの手を取って満面に喜色を湛える少女。

普段は落ち着いた振る舞いのバリスタ少女だが、唐突なスキンシップに少し驚いているようだ。

「確かにすごい偶然だが、これから共に暮らすなら互いに名前くらいは知っておいた方が良いんじゃないか?」

彼女達が新たな友情を育もうとする姿は非常に尊いのだが、このままだと話が進まない気がしたので、タクトは興奮する少女を宥めて自己紹介を促す。

「あ! そうだね! 私はココアだよ!」

「私はチノです。ここのマスターの孫です。よろしくお願いします。ココアさん」

「うん! これからよろしくね! チノちゃん!」

「はい」

笑顔で挨拶を交わす二人にタクトは心が暖かくなるのを感じた。

タクトはコーヒーを飲もうとカップを口につけようとしたが、違和感を覚えて容器の中を覗く。

既に中身が無かったようだ。

名残惜しさを抑えつつカップをテーブルに置いたところで、ココアと名乗った少女がこちらに興味を示したようで、声をかけてきた。

「とこころであなたは？」

そういえば、人に自己紹介するように誘導しておいてタクト自身はまだ名乗っていないかった。

これは失礼、と軽く謝罪してからタクトは名を告げた。

「俺は白波託兎、ただの客だ。よろしくな。ココア、だったか？」

「うん！ よろしくねタクト君！」

タクトが名乗れば、ココアは人懐っこい笑顔で手を差し伸べてきた。

突然の出来事に、それが握手を求めるものだど気付くのに少し遅れてしまった。

ハツとしたタクトがゆっくりと、白くて綺麗な手を握ろうとして腕を伸ばすと、こちらが触れる前に両手で右手を包まれた。

少しひんやりしていて柔らかい感触が右手を伝わる。

「わあ！ タクト君の手つてがっしりしてるね！」
なんだろう。

この癒し力全開の生物は。

気を抜けばこちらが浄化されて消滅してしまいそうだ。

「仕事柄、重たいものを運んだりするからか？」

「仕事？」

「この街でバイトをしているんだ。一人暮らしたと何かと入り用になるからな」

どうにか正気を保ちつつタクトがそう説明すると、ココアは納得したように頷いた。

「そうなんだ。私もね、高校の方針で下宿させて頂く代わりにそのお家でご奉仕するよ
うに言われるんだ」

「それはつまりラビットハウスで働くということか」

「そういうこと！」

やる気は十分だと言わんばかりにココアは胸を張って見せる。

おもしろ……頼もしいバイトが増えてタクトは今後のラビットハウスでの一杯が少し楽しみになった。

しかしラビットハウスの正従業員のチノ曰く、

「と言っても家事は私一人でも大丈夫ですし、お店の方も十分人手は足りていますので、何

もしなくて結構です」

とのことらしく、早速解雇リストラの危機である。

人件費削減のために店員を減らさざるを得ないラビットハウスの経営状況に、タクト目頭が熱くなった。

「いきなりいらぬ子宣言されちゃった……」

「まあドンマイ」

「うん……でもとりあえず挨拶はしたいんだけど、マスターさんはどこ?」

それを聞いたチノの表情は複雑そうだった。

それもそうだろう。

私の祖父は天寿を全うした後にはウサギになりました。ちやうど貴女が撫でまくっていた白い毛玉がそうです、と正直に暴露する訳にもいかない。

「祖父は去年……」

ココアは祖父について言葉にしかねているチノを見て、ハツとしたような表情を浮かべた。

「そつか……今はチノちゃん一人で切り盛りしてるんだね……」

「いえ……父もいますし、バイトの子も一人——」

チノが話し終えないうちにココアが慈愛に満ちた表情でチノを抱擁する。

「私のことを姉だと思って何でも言ってみて！」

「どうやらココアは、チノは祖父が亡くなり、天涯孤独の身になってしまったと勘違いしているようだ。」

「いや、チノは孤独でないにしろ、ココアの予想が完全に間違っている訳でもないのだが。」

「突然の出来事にチノは目を丸くしていたが、しばらくしてココアがチノに向き直った。」

「……だからお姉ちゃんって呼んで??」

「……じゃあ、ココアさん」

「お姉ちゃんって呼んで！」

「ココアさん」

「お姉ちゃんって呼んで！」

「ココアさ——」

「——お姉ちゃん！」

「某RPGのような無限ループを解決すべく動いたのはタクトだった。」

「あくまでも親切心から、このやり取りが永遠に続き、抜け出せなくなるのを防ぐための行動だったのだが。」

チノの後ろにしゃがみこんで裏声を使ったところ、その場の時が止まった。

そして最初に動いたのはチノだった。

「じゃあココアさん、早速働いて下さい」

「うん！ 分かった！」

「それでは更衣室に案内するのでついてきてください」

そのまま何事も無かったかのように二人は動き出し、店の奥へ消えていった。

その場に残ったのはしゃがんだままのタクトと、彼の頭に移ったティツピーだけだった。

静かになった店内でタクトは呟いた。

「マスター」

「何じゃ」

「何が駄目だったと思いますか？」

「全部……かのう」

「そうですか」

ああ、今日も世界は静かだ。

###

タクトがカウンター席に座って一人寂しくティッピーをモフっていると店の奥からチノとココア、それから紫のツインテールが特徴的な少女がやってきた。

三人共ラビットハウスの制服を着ているが、こうして三人並ぶと少し姉妹のようだとタクトは思った。

「お、なんだ。タクト来てたのか」

ツインテールの少女がフレンドリーに話しかけてきたので、タクトも軽く手を挙げて応えた。

この少女は春休みからラビットハウスで働いているバイトで、名前はリゼという。

なんでも、彼女の父親がこの店の現マスターと親しいらしく、便宜を図ってもらったとの事だ。

所謂コネ採用というものだが、決して父親の友人の店だからといって適当な仕事をしていることも無く、彼女自身も真面目な性格で真剣に業務をこなしており、数少ない常連客からは高い評価を得ている。

タクトも彼女の働きっぷりを好ましく思っており、歳も同じという共通点もあるためよく話し相手になってもらっている。

「ああ、少し前からな。リゼこそ居たのか」

「私も少し前に来て着替えていたんだが、更衣室に知らない気配が近づいてきたから隠れていたんだ」

少し前、というタクト達が話していた辺りだろうか。

正面の扉が開かなかつたという事はおそらく裏口から店に入ったのだろう。

気を使わなくても客入りは少ないのだから堂々と入ってくれば良いのにとタクトは思ったが、手元に居たティッピーに睨まれたのでさり気なく目を逸らす。

それにしても、客を気にして裏から出入りするのも、着替えに時間がかかるのもタクトには理解出来たが、一つだけ疑問が残っていた。

「隠れる必要はあったのか？」

リゼが更衣室に居ながらにして室外の気配を察知できることはこの際置いておくとして、知らない存在に対してそこまで警戒する必要はあるのだろうか。

仮に着替えの最中に部屋に近づかれたとしても、そこが女子更衣室である限り入ってくるのは少なくとも同性の人間のはずだ。多少の羞恥は覚えるだろうが、襲われることは多分ないだろう。

これが盗撮や覗き目的の助平野郎が相手なら、その行動は正しいが、店内に居る純人間の男性はタクトだけだ。

もしそのケースを想定しての行動だった場合、タクトはリゼのタクトに対する評価を

再確認した後で、リゼと全力でお話ししなければならない。

「て、敵の素性がわからない以上身を隠すのは当然だ！」

恥じらいながら問いに答えるリゼを見るに、どうやらタクトの懸念事は杞憂だったらしい。

大方、いつもの癖で早とちりしたりリゼが暴走したのだろう。

タクトとしては変態扱いをされてなくて一安心である。

全く人騒がせな話だ。

「いやー私もびっくりしたよ。クローゼットを開けたらいきなり脅されたんだもん。最初、泥棒さんかと思ったよ」

「し、仕方ないだろ！ 私の父は軍人で、幼い頃から色々仕込まれているんだから……ああ！ でも私はいたって普通の女子高生だからな！」

普通の女子高生が果たしてモデルガンとコンバットナイフを携帯するのだろうか。

「ふっう……っ？」

「タクト。言いたい事があれば聞くぞ」

相手に銃を突きつけながら問うのなら、言い遣したい事ではないだろうか。

タクトは向けられた銃口を前に肩を竦め、話題を変えるようにココアに話しかけた。

「ところでココアはもう制服を着ているのか」

「そうだよ！ どうかな？」

ココアは嬉しそうにその場でぐるりと一回転して見せる。

それに合わせてスカートがフワリと浮き上がり、胸元のリボンが可愛らしく揺れる。制服のカラーリングも、彼女のイメージにピッタリな暖色であり、とても似合っている。

「ああ似合ってるな」

「本当!? ありがとう!」

タクトの言葉にココアは満面の笑みを浮かべる。

あまりにも幸せそうな彼女の表情につられてタクトの頬も自然と緩む。

「よし、じゃあ早速ココアの初仕事だ。行くぞ!」

「了解です! サー!」

「いい返事だ! ついてこい!」

早くも仲良くなったらしいリゼとココアを、タクトは温かい気持ち見送った。

店の奥に三人が消える直前でリゼが振り返った。

「あ、タクトも手伝え!」

「俺は客なんだが」

「どうせ暇だろ?」

「否定はしないが……」

「よし決まりだな！ 行くぞ！」

本人の了承を得ずに先頭を切るリゼを見てタクトは笑った。

「全く客使いの荒い店員さんだ……」

そして、そう言いつつも付いて行くあたり自分もノリが良いのだと彼は苦笑いするのだった。

第二話 特技と技術と才能と

リゼに連れられてココアとタクトがやってきたのはラビットハウスの倉庫だった。

部屋を見回してみると営業で使うような雑貨や、ガラクタとも呼べるようなよく分からない物が保管されていた。

リゼは中身が詰まった麻袋の積まれている箇所を指差す。

「じゃあこのコーヒー豆の入った袋をキッチンまで運ぶぞ」

「う、うん！」

ココアがそれらのうち大きめの袋を運ぼうとしたところ、持ち上げるのがやつとのようだった。

「お、重い……！」

「その袋はココアにはちよつと辛いだろ。それは俺が持つ」

ココアの苦戦している様子を見たタクトは彼女から袋を受け取り肩に担いだ。

「ありがとうタクト君……これは普通の女の子にはちよつときついよ……」

「だろうな」

タクトがため息をつくココアの反対の方に目を向けると、そこには軽々と大きい麻袋

を担ぐリゼがいた。

その視線に気づいた彼女は慌てて袋を地面に置いた。

「あ、ああそうだな！ 確かに重いな！ こ、これは普通の女の子には無理だな！」

必死に普通を取り繕う彼女を他所にココアは小さめの袋を持ち上げた。それでもやはり彼女は辛そうな顔をしている。

「うう……こつちの小さいのでも重いよ……！ 一つ持つのがやつとだよ……」

「まあ……普通は、そうだな」

再びタクトがリゼに視線を向けると、彼女はココアと同じ大きさの袋を両肩に担いでいた。その数は全部で四つ。

再度袋を落とすリゼにタクトは慈悲深い視線を送った。

「……普通っていいな」

「う、うるさい！」

三人は無事にコーヒー豆をキッチンに運び終え、戻るとカウンターではチノがカップを拭いていた。

「あ、皆さんおかえりなさい」

「コーヒー豆運んどいたぞ」

「ありがとうございます」

カウンター席に腰掛けるココアにタクトはお疲れさんと声をかける。

「ふう……チノちゃんはいつもあの袋運んでるの?？」

「いえ、いつもは父やリゼさんが運んでくれていきますので私が倉庫に行くことはほとんどありません」

「そうなの?？ リゼちゃんも女の子なのにすごいね!」

「え!?! わ、私は大して力になれないぞ?？」

ココアから尊敬の眼差しを受け、リゼは狼狽えながら自身の活躍を否定した。

タクトはそれを面白げに見つめる。

「そんなことないですよリゼさん。いつも一度にたくさん——」

「わあああ!! 私は普通の女の子だから少しづつしか運べないぞ! そ、それにタクトがよく手伝ってくれるからなんの問題もない!」

チノの悪意のない励ましにリゼはあくまでも普通と言い張るようだ。

「そうなの?？ タクト君?？」

「暇な時は今日みたいに手伝うことはある。と言ってもコーヒーについてはほとんど分からないから力仕事だけな」

タクトはカウンター席に座りながらココアの問いに答える。

「タクト、手伝ってくれてありがとな。何か奢るぞ?」

「じゃあいつものやつをもう一杯」

「はいよ。チノ、オリジナルブレンドを頼む」

「わかりました」

チノはタクトの注文を受け、コーヒー豆を挽き始めた。

「お、おお……!」

その横でココアが目を輝かせて三人のやり取りを見ていた。

「なんか今のかっこいい!」

「そうか?」

チノが出来上がったコーヒーをタクトの目の前に置いた。

タクトは礼を言っただけで飲み始める。

「うん! 常連さんがいつもの……って言ったら商品が出てくるんだよ! ロマンだ

よ! いいなー」

「ははは、じゃあココアも早くできるようにまずはこのメニューを覚えなきゃな」

リゼは興奮気味のココアにメニュー表を手渡す。

ココアはそれに目を通していく。

「コーヒーの種類が多くて難しいね」

「そうか?? 私は一目で暗記したぞ?」

「すごい!」

「訓練してるからな。チノなんて香りだけでコーヒーの銘柄当てられるんだぞ?」

「私より大人っぽい!」

褒められたチノは恥ずかしそうにしながらタクトの隣の席に座った。

「まだ砂糖とミルクは必須だけだな」

「う……」

「あはは、なんか今日一番安心した! タクト君もなんか特技とかあるの??」

話を振られたタクトはカップを置いて考えた。

「特技か……そうだな……考えたことなかったな」

「タクトはあれだろ?? 力が強い」

「それだとリゼと被——」

「あ??」

「特技というより特徴だろ」

タクトは何かを言おうとしたがリゼの発した威圧に屈して言葉を変える。

「タクトさんは味覚がしっかりしてるじゃないですか」

「そうか??」

「はい。この前うちのオリジナルブレンドの配合が変わったの当てたじゃないですか」
チノの言葉にリゼは目を見開いた。

「私も言われるまで気付かなかったのに……」

「あれはいつも飲んでたやつよりも少し酸味が控えめでコクがあったからもしかしたら、って思っただけさ」

「本当にうちの従業員になってくれないかのう……」

チノの頭の上のティップピーの眩きを聞いてタクトは苦笑いをした。彼は今のところバリスタを目指す気は無いのだ。

ココアはタクト達の話聞き羨ましそうにする。

「みんなすごいなあ……私も何かあったらなー。あれ?? チノちゃん、それは宿題??」
彼女はチノの手元のノートを覗き込んだ。

「はい。春休みの宿題です。空いた時間にこっそりやってます」

「へー……あ、その問題の答えは二二八でその隣は三六七だよ」

数学の問題をものの数秒で解いて見せたココア。

その光景にタクトとリゼは驚きを隠せなかった。

「……ココア、四三〇円のブレンドコーヒを二九杯頼んだらいくらだ??」

「え?? 一万二四七〇円だよ??」

「……合つて……るな」

リゼが出した問題を即答したココアはカウンターに頬杖をついた。

「あーあ、私も何か特技欲しいなー」

自分の特技に無自覚なココアを眺めながら、タクトは人は見かけによらないと小さく笑った。

タクトがコーヒーに口をつけたと同時にドアベルの音が来客を知らせた。

「あー！ いらつしやいませー！」

ココアは女性客に話しかけ、二言三言言葉を交わす。

「へえ、ちゃんと接客出来てるじゃないか」

「はい。心配は無いみたいです」

どうやら先輩従業員からの評価は上々のようだ。

接客を終えたココアがカウンターに戻ってきた。

「やったー！ 私、ちゃんと注文取れたよ！ キリマンジャロ！ お願いします！」

「おー」

「偉い、偉いです」

満面の笑顔で報告するココアに対して先輩方の反応は少しばかりドライだった。

「そういえばチノちゃん。この店の名前はラビットハウスでしょ？　ウサ耳着けないの??」

唐突なココアの提案にチノは呆れ顔を浮かべた。

「ウサ耳なんて着けたら違う店になってしまいます」

「えー、リゼちゃんとかウサ耳すごい似合いそうじゃない??」

「そんなもん着けるか！　でも……」

ウサ耳、そういうのもあるのか。とタクトが一人で納得しているといきなりリゼが赤面して騒ぎ出した。

「う、うわあああ!!　ろ、露出が高すぎだ!!」

「う、うさ耳の話だよ!?!」

リゼの様子を見てタクトは想像した。バニースーツを着用し、ウサ耳バンドを着けた三人の姿を。

「確かに、リゼとココアはともかくチノからは謎の犯罪臭が……」

「お前は何を想像してるんだ!!」

「タクトさん……不潔です……」

リゼとチノの冷やかな視線を受けながらタクトは空になったカップに口をつける。

「じゃあ教官！　なんでラビットハウスなのでありますか！　サーー!」

「……そりゃあ、ティツピーがこの店のマスコットだからだろ??」

リゼにそう言われて改めてティツピーを見てみる。一応アンゴラウサギという品種ではあるが初見でウサギとは分からないだろう。

「んー、でもティツピーはウサギっぽくないよ? モフモフだし」

ウサギのトレードマークといえばピンと伸びた耳だがティツピーの耳は毛に埋もれてしまっている。

「じゃあココアだったらなんて店名にするんだ??」

「ズバリ! モフモフ喫茶!」

「まんまだな……」

「いやそれは流石に……」

タクトがふとチノを見てみると目を輝かせていた。

「モフモフ喫茶……!」

「……気に入ったのか」

ラビットハウス存続の危機と孫の喜ぶ顔を天秤にかけてティツピーは複雑そうな顔を浮かべるのだった。

その後も数人の客が来るものの繁盛しているとは言えず、四人と一匹でまったりと過

ごした。

タクトがふとカウンターに目を向けるとリゼが何やらカップにミルクを注いでいた。

「あれ?? リゼちゃん、それは??」

「ラテアートだよ。カフェラテにミルクの泡で絵を描くんだ。ほら、こんな風に」

完成したラテアートを見ると、ハートがいくつも重なったような模様が描かれていた。

「ココアもタクトもその出来の良さに感嘆の声をあげた。

「どうだ?? やってみるか?」

「絵なら任せて! これでも金賞貰ったことあるんだ!」

「小学校低学年の部、とか言うのは無しな??」

「……」

「……まあいいや。手本としてはこんな感じだ」

そう言っつてリゼは新たにハート、花、猫のラテアートを作った。どれも作品としての完成度が高い。

「すごい! リゼちゃん絵上手なんだね!」

「そ、そうか??」

「うん! ねえ、もう一度やって!」

「し、しょうがないな！ 特別だぞ？ ちゃんと覚えろよ？ タクトもしつかり見とけよ??」

リゼはカフェラテをもう一杯入れた。そして深く深呼吸した。そして動き出す。

まず、器用な動きでカップにミルクを注ぐ。

さらに浮き上がったミルクの泡にエッチングを施していく。

「うおおおおお!!」

その手さばきは常人のそれを逸脱したもので、素人であるココアとタクトの目では捉えられなかった。

そして、リゼの動きが止まる。

「……………完成だ!」

完成したラテアートは戦車だった。細部まで忠実に再現されたそれは、小さなコーヒークップの中で大きな存在感を放っていた。

「これは……………」

「いやー全く上手くないって！ 私なんて!」

「上手いってレベルじゃあ……………というか人間業じゃないよ……………」

ココアにさりげなく普通じゃないと言われてもリゼは気付かなかった。

「よし！ 私もやってみるよ！」

「頑張れ」

ココアは真剣な表情でカフェラテにミルクを注ぎ始めた。そして数十秒後、ココアのラテアートが完成した。

「うう……なんかイメージと違う……」

「どれ??」

「見せてくれ」

リゼは彼女の作品を見る。

そこには口がズレて不機嫌そうになっているウサギがいた。

「……!」

「わ、笑われてる……!」

どうやらリゼにとってどストライクだったらしく、乙女チックな表情を両手で隠している。

それを笑われてると捉えたらしいココアはシヨックを受けた。

「もー……あ、そうだ！ チノちゃんとタクト君も描いてみて！」

「俺?もか?」

「私もですか?」

「うん！ はいカフエラテ！」

ココアはいつの間にか用意していたカフエラテを二人に渡す。それを受け取った二人は黙々とカップの中に絵を描き始める。

「どんなのができるか楽しみだね」

「あの二人の絵は確か……」

「できました」

先に仕上がったのはチノだった。

二人が彼女の持つカップを覗く。

「へ、これは！」

そこにはキュビズムに則って描かれた人の顔があった。様々な角度から観察された顔のパーツ全てが一つの平面に見事に収まっている。

「こつちもできた」

ココアとリゼがチノのカップに夢中になっていると、もう一つの作品が完成した。

「どんな感じ——!?!」

タクトの作品は、ミルクで描かれた縞模様の上に無数の斑点を散りばめられているというものだった。

チノとタクトは互いのカップを覗き合った。

「チノのそれはマスターか。かつこよく描けてるな」

「ありがとうございます。タクトさんのは春ですね。とても綺麗です」

「ああ。ありがとう」

「なんで分かり合っているんだ……」

二人は互いの作品を褒め合うが、どうやらリゼには分からなかったようだ。

「わーい！ 二人も仲間！」

一方これが抽象美術の一種だと気付かないココアは二人の手を取って喜んでいた。

「ち、違うぞココア……これは私達のと一緒にしちゃ……」

ココアに手を繋がれている二人は彼女がなぜ仲間と言うのか分からなかった。

第三話 帰り道

第一回ラテアート交流会の後、四人時々もう一匹と暫し雑談をしていたら日は既に傾きかけていた。

「あ、もうこんな時間！」

「本当ですね。そろそろお店を閉じましょう」

ラビットハウスは夜間はチノの父が経営するバーとなる。そのため夕方には店を閉じ、軽い掃除と片付けをするのだ。

「じゃ、俺もそろそろ帰るかな。夕飯の買い出しもしないといけないし」

「ええ!?! タクト君って料理するの!?!」

「なぜそんなに驚く……」

ココアはタクトの意外な一面に目を丸くする。

「だって、タクト君って料理と縁が無さそうな見た目してるもん！」

「……ココア、君が意外と失礼な奴だということは分かった」

タクトはため息をついて半目でココアを見つめる。

その様子を見てリゼは笑う。

「ははは！ 私も初めて知った時は驚いたよ。でも残念ながら料理しているらしい」「あんな……」

タクトは二人の失礼な物言いに再度ため息をついた。しかし、彼の見た目から料理をしている姿を想像するのは確かに難しいのだ。

彼はバイト柄からそこそこの筋肉がついている。多少ゴツゴツしている手に包丁を握る姿は想像に難い。

「そりゃ一人暮らしなんだから飯ぐらい作るさ」

「へえ、タクト君一人暮らししてるんだ」

「まあな。だから料理は必須なんだ。毎日店の弁当とかだったら食費がバカにならないからな……さて、俺はそろそろ行くか」

タクトは席から立ち上がり、伸びをする。そして、コーヒーの会計を済ませて店を出ようとするとりげに声をかけられた。

「タクト！ 途中まで同じ道だし一緒に帰らないか？」

「あぁいいぞ」

「じゃあちよつと着替えてくるから待っていてくれ」

そう言つて女子三人は店の奥へと消えていった。

店舗に残されたタクトがカウンターで転がるティップーを撫でてみると、店の奥の扉からダンディという言葉が良く似合う風貌の男性が入ってきた。

「やあタクト君。来ていたんだね」

「どうもタカヒロさん。お邪魔しています」

タクトにタカヒロと呼ばれた彼はチノの父親である。夜間のパーティタイムの準備に来たのだ。

「はは、邪魔と言うことはないよ。アキヒロとは古い付き合いがあるからね。その息子である君は息子同然だ。いつでも来てくれて構わないよ。それに、娘のチノとも良くやってくれてるようだしね」

「確かにのう。お前さんがこの店に通い始めてからチノが笑うことが多くなった気がするわい」

タカヒロの言葉に同意するマスター。体がウサギになったとしても孫であるチノを心配しているのだろう。

「ワシとしてはこのままこの店の従業員になつて欲しいんじゃないがの……そうすれば店にとつても、チノにとつても良いことになるじゃろうて」

「親父。無理強いは良くないぞ。タクト君にも事情というのがあるからね」

タカヒロはワイングラスを拭きながら自分の父親を諫める。

「……そうじゃな。すまんの、タクトよ」

「いえ。誘っていただいてありがとうございます。ですが俺は今の状態が、ラビットハウスのお客という立場が好きなのでそのお誘いは他の人にとっておいてください」

「ほっほっほ。お前さんのように味の違いがわかるような奴はそうそう見つからない」

「それに……」

タクトが何かを言いかけた時、奥の扉が開き女性陣が戻ってきた。

「悪い、待たせたなタクト」

「すみません。ココアさんがわがままを言うので」

「えー、チノちゃんのお手伝いをしようとしただけだよ！」

タクトは彼女達のやり取りを楽しそうに眺めながら言う。

「……今だって従業員に恵まれてるじゃないですか」

「……かもしれんな。あのココアとか言う娘もすっかり店に馴染んじまった。チノにとってはいいい友達になるかもしれないの」

そう言うマスターの声は心なしか嬉しそうに聞こえた。

「じゃあまた、タクト君。リゼ君もまたよろしく頼むよ」

「また来ます」

「はい！ チノとココアもまたな！」

リゼがラビットハウスの住民に手を振ると、彼女達も笑顔でそれに応える。

「お疲れ様でした」

「またね！ リゼちゃん！ タクト君！」

タクトとリゼは並んで歩く。

「なあタクト」

しばらく歩いたところでリゼがいきなりタクトに話しかけてきた。

「さっきタカヒロさんと何か話してたのか？」

「聞いてたのか」

「いや、なんかさっきお前が何か喋ってたみたいだったから気になっただけだ」

どうやらタクトがティッピーと話してたのを見られていたらしい。

「良くわかったな」

「相手の行動を把握するのは基本だろ?? それで何を話していたんだ??」

「見合い話」

「は!?!? み、みみ見合いってお前……チノとか!?!?」

「冗談だ」

「……殴つてもいいか？」

タクトは彼のお茶目な冗談に握り拳を作るリゼから少し距離をとった。

「……はあ……隠すようなことじゃないだろ?? 教えるよー」

「そうだな……簡単に言うとなスカウトされた」

「スカウト??」

「ああ。ラビットハウスの従業員にならないか、つてな」

そう言ったのはマスターだったが、ティッピーは喋らないことになっていたのでタカヒロの言葉ということにした。

「それでタクトはどうしたんだ??」

「誘われたのは嬉しかったが断った。俺は今のままがよかったからな」

「そうか……それは残念だな。お前が居れば仕事が楽になると思うんだけどな」

「力仕事は普通の女の子にはきついからな」

「……」

「無言で脇腹をどつくのはやめてくれ」

その後も二人で雑談しながら歩いていると一つの交差点に着いた。

「じゃあ俺はこっちだから」

「ああ。またなタクト」

タクトとりぜは互いに違う方向に向かって進んだ。街は夕陽でオレンジ色に染まっていた。

タクトはいつものスーパーで食材を買った。今日の彼の夕食はシチューだ。

外に出ると辺りは薄暗くなって遠くが薄らと赤くなる、俗に言う黄昏時と呼ばれるような時間になっていた。

「ちよ、ちよつとそこどきなさいよ！ 通れないじゃない！」

タクトが帰り道を歩いていると面白い状況に遭遇した。

ウエーブのかかった金髪の少女が涙目でフリーズしている。彼女の目線の先には野良ウサギが鎮座していた。

「うう………お願いしますといてください………じゃがいもあげますから………」

彼女はそう言って持っていた袋からじゃがいもを取り出し、ウサギの前に差し出した。

すると野良ウサギは少女に近づく。

「ひっ！」

タクトはその状況を面白そうに見物していたが、今にも泣き出しそうな少女を見て行動に移した。

「ほら、そんなところに居たら通行の邪魔になるぞ」

タクトは野良ウサギを撫でて持ち上げた。そのまま少女の方に振り返る。

「大丈夫か??」

「あ、ありがとうございます……」

「ウサギ抱くか??」

「い、いらないわ! は、早く遠くにやって!」

「そうか。じゃあ撫でるか?」

「愛で方の違いじゃないわよ!」

「そうか」

これ以上やると本当に泣かれかねないと判断したタクトはウサギを路地裏の方に逃がした。ウサギが見えなくなったのを確認して改めて少女に話しかける。

「はあ……とりあえず助けて頂いてありがとうございます……で、も! どうしてウサギを抱かせようとしたんですか!?!? 嫌がらせですか!?!?」

少女は鬼気迫る表情でタクトに迫った。

「いやウサギと触れ合いたいのかな、って」

「どこをどう見てそう思ったんですか!?!?」

「エサをあげようとしてたから」

「あれは賄賂よ！ 見逃してもらおうとしたの！」

「まあ落ち着いて。これあげるから」

そう言つてタクトはレジ袋から人参を取り出して目の前の少女に渡した。

「え?! あ、ありがとうございます……つて違う！ 私は至つて落ち着いてるわよ！」

見事なノリツツコミにタクトは関心して頷いた。

「それはそうと君はどうしてあんなことになつてたんだ?？」

「苦手なのよ！ ウサギが！ 悪い!?!」

不機嫌そうにウサギが苦手だと宣言する彼女にタクトは首を横に振つて言つた。

「誰にでも苦手なもの一つや二つあるさ。気にしなくていい」

「え……あ、ありがとう……」

「じゃ、俺はそろそろ行く。君も気をつけて」

「あ……」

タクトはそのまま自分の家に向かつて歩き出した。

金髪の少女はその後ろ姿を見てつぶやくのだった。

「人参、もらつちやつた……」

今日のタクトの夕飯はシチューである。人参はもう無い。

第四話 気まぐれな悪戯鬼

春休みというものは若者たちに癒しと安らぎを与える、言わば聖母のような存在である。しかし、どんなものにもいつかは終わりが来る。

「……」

そして彼は現在、自宅でノートとにらめっこをしていた。

「終わりが来ない……」

そう、宿題だ。春休みは高校生にとっても暖かい存在だが、それと同時に悪魔が潜むのである。タクトは春休みが始まる前にもらった問題集をつい数日前に発見したのだ。

「……」

今の時刻はちょうど学生が登校するころだ。休みであるにも関わらず、学校がある時の癖で早く起きてしまったのがタクトだ。朝食を済ませて特にやることもなかったの
で気まぐれに春休みの宿題をやり始めたのだ。

「……やっぱりめんどくさいな。やめるか」

宿題をやり始めて三十分、彼は解きかけの問題を閉じて立ち上がった。

私服に着替え、腕時計を着ける。

「……散歩にでも行くか」

ゲームや本を読むという手もあるが、なんとなく気が乗らなかつた。彼の行動理念は気まぐれなのだ。そうして宿題に手を出してみたが、残念ながら彼は決して勉強が好きということとはなかつた。

タクトがあてもなく街をぶらついていると後ろから声をかけられた。

「あー！ おーい！ タクト君！」

何事かと思つて後ろを振り返つてみると、そこには大きく手を振っているココアがいた。よく見ると彼女は高校の制服を着ている。

「ココアか。おはよう。学校か?！」

「おはよう！ そうだよ。タクト君は今日は学校じゃないの??！」

ココアはタクトの私服姿を見て首を傾げる。

「ああ。俺達の学校は明日からなんだ」

「そうなんだ。私はこれから入学式なの！」

彼女は嬉しそうにその場でぐるりと回った。

タクトはそれを見て微笑んだ。

「制服、似合ってるな」

「ありがとう！」

嬉しそうに笑う彼女の姿を見てタクトはいい暇つぶしを思いついた。

「そうだ、俺今暇だから少しついてっていいか？」

「うん！ いいよ！ じゃあ一緒に行こう！」

そう言つて先を歩くココアの後ろを歩きながらタクトはこう思った。ラビットハウスには随分と面白い新人が入つたな、と。

ココアと一緒に学校を目指して数分後、タクトは街の公園にたどり着いた。

「なかなか学校に着かないなあ……」

「迷つたのか??」

「大丈夫だよ！ つて、あー！」

ココアは公園でたむろしている野良ウサギに近寄つた。

彼女はウサギに目が釘付けになり、ウサギもまた彼女を見つめる。

「これが噂に聞く……野良ウサギ！」

そして、彼女はウサギを抱き寄せここぞとばかりに撫で始める。

タクトは穏やかな気持ちで彼女を見つめる。

「はわあ……モフモフ……気持ちいい……」

タクトは気持ち良さそうにウサギを愛でるココアを見ながら以前出会った金髪の少女のことを思い出した。ココアとは対照的にウサギからとにかく離れようとしていた彼女を想像してタクトは小さく笑った。

「モフモフ天国……あ！」

何かに気づいたココアはウサギを撫でる手を止めた。

タクトが彼女の視線を追うとその先には栗羊羹をウサギの前でゆらゆらさせている少女がいた。

和服が良く似合う黒髪の少女だ。

「おいでー、おいでー……食べないわね。うちの子は食べるのに……あら??」

ココアはいつの間にか彼女に近づいて栗羊羹を凝視していた。

少女はそれに気づいてココアに栗羊羹を差し出した。

「食べる??」

「いいの??」

「ええ」

「ありがとう！」

ココアは栗羊羹を受け取った。

ウサギじゃなくてココアが食いついたという状況にタクトは思わず笑ってしまった。

するとどうやら少女はタクトにも気づいたようだ。

「あら?? この子のお父さん?」

「年齢的には兄か??」

「そうなの??」

「タクト君って年上だったの??」

「そこからか」

タクトがココアに年上に思われてなかったことはきておき、とりあえず三人は公園のベンチに座ることにした。

「私はココアだよ!」

「俺は白波託兎、タクトでいい」

「ココアちゃんど、タクト君ね。私は宇治松千夜よ。よろしくね」

タクトが深みを感じる名前だと思っている横でココアは栗羊羹を美味しそうに頬張る。

「それにしてもこの栗羊羹凄く美味しいよ!」

「気に入ってくれた? ふふ、それ自信作なの」

「千夜は和菓子を作ってるのか」

タクトがそう聞くと千夜は嬉しそうに立ち上がった。

「ええ……それは幾千もの世を行く月……名付けて千夜月！ 栗を月に見立てた栗羊羹よー！」

「へえ、いい名前だな。なあココア」

「うん！ 意味はよくわからないけどかっこいい！」

「うふふ……私達、気が合いそうね！ それにココアちゃんの制服、私と同じ学校みたいね！」

「そうなの?? ……あ！ 忘れてた！」

ココアは何かを忘れていたようだったが、学校という言葉で思い出したらしい。

「入学式！ 遅れちゃう！ 千夜ちゃん、一緒に行こう！」

「え?? でも今日は——」

「じゃあねタクト君！ 私達は急ぐから！」

そう言ってココアは千夜の手を引つ張って走っていった。タクトはそんな彼女達に手を振った。

が、数分後。

「あれ!?! タクト君!?!」

「おかえり」

「ま……待って、ココアちゃん……」

彼女達は戻ってきた。

千夜は大分疲れているようで肩で息をしている。そして途切れ途切れに彼女は言った。

「はあ……はあ……あのね？……？ 私達の学校……入学式は明日なの……」

「え??」

ココアが信じられないことを聞いたという表情で千夜を見る。

ようやく落ち着いた千夜がもう一度言う。

「だからね？ 入学式は明日よ?」

彼女からその言葉が発せられたと同時にココアの顔がだんだん赤くなっていく。

「うわああああ!! 恥ずかしい!!」

ついには恥ずかしさでその場にしゃがみこんでしまった。

タクトはそんなココアをとても慈悲深い目で励ました。

「まあ、間違いは誰にでもあるさ。強く生きろ」

「やめて! そんな優しい声で励まさないで!」

千夜はそんなココアを見て小さく笑って言った。

「ふふ……面白い子。ココアちゃんが迷わないように皆で学校へ下見に行きましょう

?」

「うう……女神様……！」

その後なんとか落ち着いたココアはタクトと千夜に連れられて一つの学校にやってきた。

「はい。ここが私達が明日から通う学校よ」

「うわあ……！　ここが私の新しい学び舎かあ……」

何やら感動をしているココアだが、目の前の学校に違和感を覚えたタクトはこつそりと千夜に聞いた。

「……は？」

「あら?? 私だったら、間違えて卒業した中学校に来ちゃった」

間違えたのなら仕方がないとタクトは納得した。そして千夜とは気が合いそうだと改めて思った。

一方で事情を知らないココアは通うことのない学校に青春の思いを馳せるのだった。

その後ココア達と別れ、タクトは一度家に帰った。昼食を食べ、洗濯を済ませた彼はラビットハウスに足を運んだ。

「いらつしやいませ！　あ！　タクト君今日も来てくれたんだね！」

扉を開けるとココアがテーブルの掃除をしていた。どうやら高校に行けなかった代

わりに店番をしていたようだ。

「ああ。ところでココア、高校はどうだった？」

「……もう。わかってて聞くのはデリカシーがないよ」

タクトの問いにココアは頬を膨らませる。その様子を見てタクトは笑う。

「ふっ……いつものを頼む」

「笑わないで！ ……オリジナルブレンドだね。ちょっと待っててね」

二人がカウンターに向かおうとしたところでドアベルが鳴る。

「ただいま」

どうやらチノが中学校から帰ってきたようだ。

「チノちゃんおかえり！」

「おかえり、チノ」

「タクトさんも来てたんですか。ココアさんは高校はどうでしたか?」

チノの質問にココアはびくりと体を跳ねさせた。

「こ、この街って可愛い建物がたくさんあって素敵だよね！」

「そうですか？ 高校の方はどうでしたか?」

「まるで童話の中みたいだね！」

自分の醜態を晒したくないのか目を泳がせながら話をそらそうとするココア。

事情を知らないチノはタクトに話を振った。

「タクトさん、ココアさんはどうしたんですか?? 学年は違っても確か同じ学校ですよ?」

「え……?? 同じ……学校……??」

チノの言葉にココアはきよとんとした表情で聞き返した。

「はい。この前タクトさんからタクトさんの学校の女子の制服はセーラー服だと聞いてましたので、もしかしたら同じかと思ったのですが……違いましたか??」

タクトはチノの推理力に驚いた。それと同時に若干の冷や汗が流れるのを感じた。ココアが肩を震わせていた。

「ふ、ふふ、ふふふふ……」

「こ、ココアさん……??」

チノはココアの様子に怯えてタクトの後ろに隠れた。

「タ、ク、ト、く、ん?……??」

タクトはとてもいい笑顔で迫るココアに後ずさりしようとしたが、後ろにチノがいたためそれは叶わなかった。

「……俺はちゃんと教えたぞ?」

「お姉ちゃん、嘘は良くないと思うな……」

絶対零度よりも冷たい声でそう言うココアに向かってタクトは声を震わせながらもはつきりと言った。

「う、嘘じゃない。ちゃんと思い出し出してくれ。ほら、朝ココアと会った時……」

そう。彼は彼なりに教えていたのだ。今日は学校が無いと。

『俺達』の学校は明日から、つて……」

それを聞いたココアの顔はみるみる赤くなつていった。

「……え?? いや、だって……え??」

「まあ、途中から面白くなつて黙つてたのもあるけど」

「やっぱり!! ……もう!! タクト君の馬鹿!! 大馬鹿!!」

彼女は近くのテーブルに突つ伏してタクトを罵倒し始めた。既に先程までの覇気は失せている。

そんな彼女にタクトは恐る恐る声をかけた。

「ところで、俺の注文は……」

「知らないよ!! 自分で入れて!!」

客の注文を突っぱねて拗ねてしまった新人さんを見て、タクトは彼の後ろで唾然としているチノに話しかけた。

「……注文良いか??」

「……………」

「お姉ちゃんを慰めてやってくれないか……………」

「……………自分でやってください」

その後タクトは下校してきたリゼに協力してもらい、二人がかりで慰めてやつと口を利いてもらえた。

ココアだけは本気で怒らせてはいけないと胸に刻むと同時に、次はもう少し加減しようと思うタクトだった。

因みにタクトは結局宿題は諦めた。彼曰くやる気が起きなかった、とのこと。彼はどこまでも気まぐれで、冗談好きなのだ。

第五話 そう言う因果もあるものだ

ココアが入学式を間違えた翌日、つまり本当の登校日。タクトは朝からラビットハウスに来ていた。学生服を着て学校指定の鞆を持ち、店のドアを開ける。

「タクトさん、おはようございませす」

タクトが店に入るとチノが出迎えた。チノは既に中学校の制服に着替えている。

「おはよう、チノ。ココアは?」

「ココアさんはさつき起きたばかりで大慌てで準備中です。全く……自分からタクトさんと学校に行くって言っておいて……どうしようもないココアさんです」

チノがため息をつきながら言うように、タクトはココアと登校するためにラビットハウスに寄つたのだ。

それは昨日タクトが不貞腐れるココアをなだめていた時に言われたのだった。明日一緒に登校すれば許す、と。

「まあ元は俺がココアを怒らせたのが原因だし、大目に見てやつてくれ」

しばらくして二階からドタドタと音がして、ココアがやってきた。

「ご、ごめんね! チノちゃん! 遅れちゃった! あ、タクト君おはよう!」

「ああ。おはよう。寝癖凄いで」

「え??? 嘘??」

「冗談だ」

「もう! タクト君つたら!」

タクトは頬を膨らませて怒るココアを軽くなだめる。

チノはそんな二人のやり取りを見て呆れた顔で言う。

「あの……早くしないと遅刻しますよ……」

チノに急かされ、足早に出発した三人は途中まで一緒の道……かと思いきやラビットハウスを出てすぐの橋でチノと別れてしまった。

その後登校途中の千夜と合流し、三人で学校へ向かう。

「千夜ちゃん聞いてよ! タクト君つたらひどいんだよ! 私達と同じ学校だったのに入学式のこと黙ってたんだよ!」

ココアは恨めしそうな表情でタクトを睨みながら昨日の出来事を千夜に話す。

それを聞いた千夜は笑ってタクトを見る。

「ふふ……タクト君って意外とお茶目なのね」

「ふっ……そう言う千夜もなかなかいい性格してると思うが??」

タクトの言う通り、彼女は彼女でなかなか侮れないところがある。

「うふふふ……あなたとは仲良くなれそうね……」

「ふつ……奇遇だな。俺も同じことを思っていた……」

「ふ、二人共何か怖いよ……?」

類は友を呼ぶということだろうか。二人は互いに思うところがあるのか黒い笑みを浮かべ合う。

そんな二人を見てココアは言葉にし難い恐怖を感じたのだった。

「それにしてもタクト君がまさか同じ学校だったなんて驚きだわ。学年も上だし……タクト先輩って呼んだ方がいいのかしら?」

「私もそう呼んだ方がいい?かな?」

千夜とココアの質問にタクトは笑って首を横に振る。

「いや、適当に呼んでくれて構わない。学年なんて所詮飾りみたいなものだしな」

「じゃあ今まで通りタクト君って呼ぶね!」

「私も。改めてよろしくね??」 タクト君

「ああ。こちらこそよろしく」

その後、三人は中学校と間違えることもなく無事に学校に到着した。ココアは昨日見た学校と違うことを気にしていたが、特に問題はなかった。

入学式を無事に終え、二年生は式の片付けをした後、タクトのクラスではホームルームがあつた。と言つても先生から軽く新学期の挨拶があつたくらいですぐに終わった。

この日は入学式とホームルームだけで学校は終わりになるので、タクトが帰る用意をしていると同じクラスの女子が話しかけてきた。

「白波君、廊下で一年生の子達が呼んでるよ」

タクトが廊下の方を見るとココアと千夜がこちらに手を振っていた。

そのことをタクトに伝えた女子はニヤニヤしながら聞いてきた。すると周りの生徒が同調して騒ぎ始めた。

「なにになに?? 白波君の彼女??」

「えー! 白波君彼女いるの!?!」

「キヤー! しかも二人よ!」

「白波君つて意外とプレイボーイ!?!」

「きつと他にもいるわ!」

タクトが通うこの学校はつい最近共学になったばかりで元は女子校だったのだ。それ故に女子の比率はかなり高く、特にタクトのクラスは男子が彼のみである。そのためだろうか、タクトは意外にも学校内で話題になっている。というよりも男子という存在

自体が珍しいのだ。

「ただの友人だ。それ以上ではないさ」

「でもさつき先輩じゃなくて、タクト君って呼んでたわよ！」

「キヤー！ やっぱりそういうことなのかしら！」

友人だと説明しても効力がないと理解したタクトは少し考えてから笑顔で言った。

「ふっ……まあでも……もし二人が彼女だったら幸せかもな」

「キヤーー！」

タクトは再び騒ぎ始めるクラスメイトを軽くあしらいつつココア達と合流した。

「わざわざ来てくれたのか。ありがとな」

彼がそう話しかけると二人は恥ずかしそうに若干頬を赤らめていた。

「あ……うん……一緒に帰ろうと思って……」

「……タクト君って……意外と大胆なのね……」

「なんのことだ?？」

タクトは千夜に言われた言葉に首を傾げ、騒がしい教室を後にした。

その後ろをココアと千夜の二人は恥ずかしそうについて行くのだった。

「それにしてもタクト君モテモテだったねー。私びっくりしたよ」

少し早い帰り道、ココアが先程の出来事について述べる。

それに対してタクトは笑って言う。

「そんな大層なものじゃないさ。男子が少ないから話の種になっているだけだ。それよりも、二人は新しい学校はどうだ?」

「そうだ! 聞いてよタクト君! 私達同じクラスになったんだよ! ね! 千夜ちゃん!」

「ふふ……ココアちゃん、学校でも迷子になってびっくりしちゃった」

「それは言わない約束だよ!」

笑顔でココアの秘密を暴露するあたり千夜は本当にいい性格をしている。

それを聞いたタクトは少し考えて言った。

「……日が昇り、ひらひら感う、桜かな」

「私で一句詠まないで!?!」

「季語も入ってて綺麗だわ」

「ココアの髪飾りと桜をかけてみた」

「意外と凝ってる!?!」

「いやそれほども」

「褒めてないよ!!」

「ふむ……漫才で食つてくのもありか……」

「私も!?!」

タクトのボケにツツコミをかますココア。

二人の漫才に笑つていた千夜はあることに気づいた。

「あら?!? 何かいい匂いがするわ」

彼女の言葉を聞いて二人も鼻を動かす。

「本当だな。小麦を焼いた時の匂いだな」

「きつとパン屋さんの匂いだよ! あ! ほら!」

ココアが指さす方を見てみると確かにパン屋があつた。

三人はパン屋に近づいて店先のガラスショーケースを覗いてみる。そこには様々な種類のパンが陳列されていた。

それらを目の前にしてココアは目を輝かせた。

「可愛い!」

「パンが?」

ココアのパンに対する感想に疑問の声を上げる千夜。

するとココアは懐かしむように言った。

「うん! 実家がパン屋さんでよく作つてたんだ! また作りたいな……」

「お手製?? 凄い!」

タクトと千夜はココアの意外な一面に驚く。

「パンを見てると私のパン魂が高ぶってくるんだ!」

「わかるわ。私も和菓子を見てるとアイデアが溢れてくるの!」

「そう言えば前に和菓子作ってるって言ってたな」

「ええ。でも、何より好きなのは……できた和菓子に名前をつけること……!」

「かつこいい……!」

同じ職人で通ずるところがあるのか互いに手を取り合う二人をタクトは納得するよ
うに眺めるのだった。タクトがふと腕時計を見ると彼のバイトの時間が迫っていた。

「二人共、悪い。俺今日バイトがあるから先に行く」

「あれ?? タクト君今日はラビットハウスに来ないの??」

「ああ。今日は学校が早く終わるってバイト先に言ってるんだ」

今日は稼ぎ時だとタクトは笑う。

「そうなんだ。じゃあまたねタクト君!」

「さようなら。タクト君。今度うちのお店にも来てね?」

「ああ。機会があつたら寄らせてもらうかな。じゃ、ココア、千夜。また明日」

タクトは手を振る二人を背に駆け足でバイト先に向かった。

タクトが向かった先は木組みの街のとある工事現場だった。目の前では新しい木組みの建物が建設中だった。男達が声を上げて作業をしている。

タクトはその中で敵つい顔つきをしてハチマキを着けた大柄の初老の男性に話しかけた。

「すみません力武さん。少し学校が長引いてしましまして……」

「おお！ アキヒロの坊主じゃねえか！ 待つてたぞ！ お前さんの分の仕事はちゃんと残してあるから安心しろよ！ ガハハ！」

力武はドスの効いた声で言う。

タクトはそれに笑顔で応えた。

「ありがとうございます。少し着替えてきます」

「おう！」

タクトは人目につかないところで作業着に着替えて早速仕事を始めた。

彼の主な仕事は資材を運んだり、足場に乗って作業をしている人間に道具を届けることだ。タクト自身が直接建築に携わることではなく、専ら建築のサポートをしている。

そうこうして一時間が経過した頃、力武の指示で休憩になった。彼の差し入れで全員に缶コーヒーが配られた。

タクトが木材に腰掛けて休んでいると力武がやってきた。

「よう坊主！ お疲れさん！」

「力武さんこそお疲れ様です」

力武はタクトの隣に腰掛けると自分の分の缶コーヒーを開けて飲み始めた。

タクトは彼に話しかける。

「差し入れありがとうございます。もう少しでこの建物も完成しますね」

「おうよ！ この街にまた一つ俺達の手がけた物が建つ。これほど嬉しいことはないぜ！」

嬉しそうに語る力武を見てタクトも笑う。

「本当に嬉しそうですね」

「ガハハ！ 当たり前よ！ それもこれもあいつらと坊主のおかげだぜ！」

力武はそれぞれに休憩している男達を見てそう言った。

「いえ……俺は資材を運んだり、低所で片付けをするくらいなので……」

「謙遜するなよ！ お前さんは十分にやってくれてるだろ。それに、たまに差し入れ持ってきてくれるじゃねえか！ あれ仲間内で結構評判良いんだぜ！ もちろん俺もな！ この前のチーズをベーコンで包んだやつなんて酒が欲しくなったぞ！」

タクトはたまに差し入れとして様々な料理を作って持ってくる。最初はつい興が

乗って作りすぎてしまった握り飯を差し入れとして仕事仲間に振舞ったのだが、そこそこ評判が良かったので今では気まぐれに作っているのだ。

「はは、あれは気まぐれに作った創作料理を味見していただいでるだけですよ。それに皆さんには住む場所を提供していただいたご恩がありますし」

タクトの住んでいる家は彼らが建てたのだ。タクトの父親が彼らに依頼して建ててもらったらしい。その際、建築費用を大きく割り引いてもらったとタクトは聞かされている。

タクトがそう言うと、力武は笑いながらタクトの背中を叩く。

そこそこ強かったのかタクトは少し顔をしかめた。

「そんなこと気にすんなって！ それを言うなら、お前さんの親父さんには昔命を助けてもらったんだ！ なんだったら豪邸を建ててやっても足りねえくらいだぜ」

そう言って力武は自分の服をまくって腹をタクトに見せる。綺麗に六つに割れた腹筋の脇には大きな傷跡がある。まるで刃物で刺されたような傷跡が。

服を戻すと力武はポツリと話し始めた。

「八年くらい前だったか……俺はあの時、遅くまで酒を飲んですつかり出来上がっていた。家に帰ろうとした時にはもう周りは真っ暗になっていた。そんな中、路地を歩いていたら前から誰かが歩いてきたんだ。そいつとすれ違おうとしたら急に腹に激痛が

走った。俺はその場に倒れてな、どんどん意識が遠のいていくのが嫌でもわかった。その時はもう俺は死ぬんだと思っただぜ……」

そこまで話して力武は缶コーヒを一飲んだ。

タクトは力武の話を息を呑んで聞く。

「……それで俺が次に目覚めた場所は病院のベッドの上だった。その時は何がなんだかわかんなかったが、病院の先生がある人を連れてきたんだ。そして、先生はこう言った。この人の応急処置がなかったらあなたはこの世には居なかった、と」

「……その応急処置をした人が——」

タクトがそう言うのと力武は頷いた。

「そうだ。お前さんの親父さん、アキヒロだった」

「……」

「俺はアキヒロを見た瞬間泣いたよ……大の大人が声を出してな。今思い出すと赤っ恥もいところだぜ」

力武は小さく笑った。

「それで俺はアキヒロに聞いたんだ。この借りはどう返せばいいか、つてな。そしたらアキヒロの奴はなんて言ったと思う?？」

「……なんて言ったんですか?」

タクトが恐る恐るそう聞くと力武は笑って答えた。

「俺と飲み友達になつてくれ、つて言つたんだ。他に金とかあるだろ?? ……でもあいつはそれ以外は言わなかつた」

「……親父らしいですね」

「……ああ。あいつは本当に変わった奴だよ。俺が金を払おうとしたらアキヒロは決まつてこう言つた。自分に払うくらいなら奴の友人が経営してるバーで使つてやつてくれ、つてな。後にも先にもあんな凄い人には出会つたことなかつたな」

力武はそこまで話して立ち上がった。

それに続いてタクトも立ち上がる。

「……それで犯人はどうなつたんですか?」

力武はため息を吐いて答えた。

「……結局見つからなかつた。多分まだ捕まつてないだろうよ」

「犯人の特徴とかは……」

「ガハハ! なんだ坊主、探偵ごっこか?? ……特徴はわからん。あの時は暗闇だった上に突然なことだつたからな。顔も見えなかつたぞ。ただ、奴は俺を刺した時妙なことを言つてた気がするな」

「妙なこと??」

気になったタクトは聞いてみた。

「ああ。確か……やつと見つけた、とか言っていたな。俺は誰かの恨みを買うことな
ぎしてないと思うんだがな」

「……人違いでしょうか？」

「ガハハ！ 馬鹿言うなよ。人違いで刺されるなんてことがあつてたまるか！ どうせ
親父狩りかなんかにか決まつてる！ ……さてと、そろそろ仕事再開するぞ！」

力武がそう言うのと他の男達も立ち上がつて気合いを入れる。皆それぞれの持ち場に
つき、作業を始めた。

力武も仕事に向かおうとするが、タクトはそれを呼び止めた。

「すみません、最後に親父の友人が経営してるバーの名前を教えてください」
「なんだ？ 坊主、酒飲むのは成人してからにしろよ？」

力武の言葉にタクトは笑つて首を横に振った。

「違いますよ。立ち寄る機会があつたら挨拶しておきたいんです」

「なんだそう言うことか。それなら教えるぜ。いいか?? 店の名前は——」

バイトが終わり、帰路についたタクトは先程の話を思い出していた。

「……もしかしたら世界は意外と狭いのかもな」

自分の父親が昔救った友人が今の自分の雇用主であり、父親とその友人達が語り合った場所が今では自分とその友人達との憩いの場になっている。そんな奇妙な繋がりには世界中探してもなかなか無いだろう。

——ラビットハウスという喫茶店はつくづく面白い場所だとタクトは小さく笑った。

第六話 鮮やかなパンだっというじゃない

入学式のあつた週の休日……のほんの数日前。タクトはいつものように学校帰りにラビットハウスに寄った。

そしていつも通りラビットハウスのオリジナルブレンドを啜りながらリゼ達と話している、ココアがふとこんなことを口にした。

「ねえ、ラビットハウスは看板メニユーとかないの??」

「看板メニユー??」

突拍子もないココアの言葉にリゼは首を傾げる。

「そう、看板メニユー! コーヒー以外にも何かあればもつとお客さん来るんじゃないかな?」

「コーヒー以外って……うちはフードも出してますよ?」

「そうじゃなくて……そのお店の目玉商品と言えよこれ! みたいのってあるでしょ??」

ラビットハウスでもそう言う感じにするの!」

つまりココアはコーヒー以外に売りにできるようなメニユーが欲しいと言っているのだ。話題になるようなメニユーがあれば確かに集客力はあるだろう。

「へえ、面白そうだな！」

「でも、どんな商品を出すんですか？」

「チノちゃん。大きいオーブンとかある?」

「ありますよ。おじいちゃんが調子に乗って買った奴が」

チノがそう言うのとティツピーが恥ずかしそうに頬を染める。

果たしていくらしたのか、そんな野暮なことはタクトには聞けなかった。

「……それで、何をするのですか？」

チノに聞かれてココアは嬉しそうに笑う。まるで妹に頼られて喜ぶ姉のように。

「ふふふ……よく聞いてくれたね、チノちゃん。実は——」

「ココアの実家がパン屋で、パンを作りたくなったらしい」

「もー!! なんでタクト君が言っちゃうかな!?!」

タクトにセリフを奪われココアは頬を膨らませて抗議するが、タクトは素知らぬ顔でコーヒーを啜る。

「パンか……いいいな！」

「いいですね。焼きたてのパンって美味しそうです」

「でしょ! じゃあ今度の休みの日に皆で看板メニュー開発しない?? タクト君も!」

急に話題に上がりタクトは少し驚いた。

「俺もか??」

「当たり前だよ! 友達なんだから!」

「そうだな。それに常連客の意見も欲しいしな」

「一緒にやりましょう? タクトさん」

彼女達の誘いにタクトは若干のこそばゆさを感じながら首を縦に振った。

ということがあり、休日。タクトはパンに入れる材料をスーパーで購入してからラビットハウスに向かった。

店の扉を開けると既にこの日のメンバーが集まっていた。

「あ! タクト君!」

いつものラビットハウスの従業員に加え千夜も来ている。全員既にエプロンを着用しており、いつでも厨房に入れるようだった。

「悪いな。少し遅かったか??」

「ううん、千夜ちゃんがさっき来て今紹介したとこだよ!」

タクトが千夜の方を見てみるともう仲良くなったのかりぜやチノと話していたようだ。

「それじゃあタクト君も来たし、パン作りを始めよう!」

ココアの号令で全員で厨房に移動する。

厨房には既に小麦粉や麵棒などのパン作りに必要な道具が用意されていた。

「タクトのエプロン姿って新鮮だな」

「そうですね。私も初めて見ました。不思議な感じです」

リゼとチノはタクトが着けている黒のワンシヨルダーエプロンを物珍しそうに見る。これは彼が家から持ってきたマイエプロンだ。彼曰く右肩が動かしやすく、気に入っている、とのこと。

「そうか?? その辺に売ってるエプロンだと思うが……」

「エプロンについて言ってる訳じゃないと思うのだけど……」

タクトのボケなのかよくわからない発言に千夜は反応に困ったようにつぶやいた。

「それよりも俺はココアが本当にパンを作れるのが意外だと思ったが」

「あー確かに」

「えへへ……それほどでもないよ……」

「褒められてないと思います……」

こちらではココアがチノにつっこまれていた。

褒められたと勘違いして照れていたココアだったが、麵棒を持つと目の色が変わった。

「皆！ パン作りをなめちゃいけないよ！ 少しのミスが完成度を左右する、戦いなんだから！」

「お、おお……！ ココアが珍しく燃えている……！ このオーラ……まるで歴戦の戦士だ……！」

その様子を見ていたりゼと千夜も感化されたのか、気合いを入れる。厨房の気温が若干上がった気がした。

「よし！ 今日はお前に教官を任せました！ よろしく頼む」

「サー！ イエッサー！」

「私も仲間に……！」

それにしてもこの三人ノリノリである。

そんな彼女達を見てチノは鬱陶しそうにつぶやく。

「暑苦しいです……」

「俺とチノはこつちで頑張ろうか」

タクトはチノが熱中症にならないように隣りに避難させた。

「それじゃあ、各自パンに入りたいもの提出！」

ココア、千夜、チノは自分の持ってきた食材を自信満々に調理台に並べていく。

「私は焼きそばパンならぬ焼きうどんパンを作ってみるよ！」

「私は自家製の小豆と梅と海苔を持ってきたわ」

「冷蔵庫にイクラと鮭、それから納豆とごま昆布がありました」

彼女達が出したのはパンの材料と言うよりもおかずに近いラインナップだった。

「なあタクト……これってパン作りだよな……?!」

イチゴジャムとマーマレードを両手に持ったりゼはこいつらは一体何を作るのか、とでも言いたげな顔をしている。

材料を出し終わった彼女達は最後にタクトを見る。心配するような面持ちで。

「俺はこれを持ってきた」

そう言つて彼が取り出したものは、バナナ、板チョコ、牛乳など割と普通の食材だった。

それらを見た他の四人は安堵のため息をつく。

「なんだ、お前にしては随分と普通——」

「ああ、それからこれも」

彼が取り出したものを見て硬直する四人。

「なんか……」

「凄く鮮やかな緑で……」

「ゴツゴツしてますね……」

「な、なあタクト……それって……」

タクトが最後に取り出したもの……それは、

「ああ。ゴーヤだ」

「なんで!?!」

ゴーヤだった。熱帯アジア原産のウリ科の植物で、果肉は強烈な苦味があることから別名ニガウリとも呼ばれる野菜界の異端児、ゴーヤだ。日本の暖かい地域では豆腐などと一緒に炒めて食されることがある、あのゴーヤだ。

「いや、今夜はゴーヤチャンプルーにしようと思つて」

「なんで今出したの!?!」

「まるごとゴーヤパン……語呂がいいよな」

「まるごと入れる気なの!?!」

「……」

「冗談つて言わないんですか!?!」

「……冗談か?!」

「なんで疑問系なんだ!?!」

「ふっ……冗談だ」

タクトは満足した顔でゴーヤを袋にしまうと、少し考えてから言った。

「……少しだけやってみようか」

「お願いだからやめて!?!」

他の四人から懇願されて渋々ゴーヤをしまうタクトだった。

「はあ……なんかもう色々と疲れたけど、気を取り直してやるよ！　まずは強力粉とド

ライイーストを混ぜて……」

ココアがボールに強力粉を入れる。

「ドライイーストって確か、パンをふっくらさせるんですよ？」

「そうそう！　よく知ってるねチノちゃん！　偉い偉い！　乾燥した酵母菌なんだよ」

「こうぼきん……?!?　攻歩菌……」

ココアに頭を撫でられ気持ちよさそうにするチノだったが、酵母菌という言葉聞いて何やら震える。

「そ、そんな危険な物入れるくらいならパサパサのパンで我慢します!」

どうやら菌と聞いて危ない物だと思ったようだ。

「はい、ドライイースト」

「あぁ……」

そんな事情を知らないココアはさっさと強力粉にドライイーストを入れる。

そしてそこに水を加え、こねていく。

タクト達もココアと同じように材料を混ぜ、生地をこねていく。徐々に生地に弾力がついてきて力が必要になってくる。

「ふう……パンをこねるのって凄く体力を使うんですね……」

チノが言うようにパンをこねるのはなかなか大変な作業だ。最も、彼女はティツピーを頭に乗せつつの作業だが。

「私も……腕がもう動かない……」

千夜が疲れたように腕を回す。彼女は元々の体力が低いようで、チノより疲れているようだ。

ココアは流石パン屋の娘といったところか、疲れている様子を見せない。

「結構、力があるよな。リゼは……大丈夫だな」

「な、なぜ決めつけた？」

力作業に慣れているタクトはともかく、リゼもパン作り初心者のはずだが一切の疲れを見せない。これが普通の女の子が為せる業なのかは定かではない。

「千夜、大丈夫？か？ ゴーヤあるぞ？」

「うーん……ゴーヤはいらないかな……」

「そうか。きつかったら無理するなよ？」

「ありがとうタクト君」

タクトが千夜を気かけると、千夜は何かを決意して腕をまくる。

「……」ここで折れたら武士の恥ぜよ！ 生きてる訳にはいかんきん！」

千夜に幕末に活躍しているような偉人が憑依したところでココアが手を止めた。

「そろそろいいかな??」モチモチしてて凄く可愛いでしょう！」

生地を我が子のように撫でながらそう言う彼女からはパンに対する愛が溢れていた。

「それじゃあ生地を丸めて、そのまま一時間くらい寝かすよ！」

一時間後、酵母菌の働きにより生地が膨らんだ。

チノは一時間前の倍近くまで大きくなった。パン生地を見て驚いている。

「大きくなってます……！」

「すごいでしょ！ じゃあ次はこれを好きな形にしていこうよ！」

ココアの指示でパン生地を分割し、それぞれ思い思いの形に仕上げていく。

「チノちゃんはどんな形にしたの?！」

「おじいちゃんです。小さい頃から遊んでもらったので……」

祖父想いの孫にチノの頭の上のティップーは嬉しそうに照れる。

例え外見がウサギになったとしても中身はチノの祖父なのだ。

「おじいちゃんっ子なのね」

「コーヒーを入れる姿は尊敬していました」

タクトも生前のマスターのコーヒー入れは何度も見て、味わってきた。

故に、彼もまたマスターのことを尊敬していた。

生地 of 成形も終わり、後は焼くだけになった。

各々が作ったパンをクッキングシートを引いたトレーに並べる。それを十分に暖まったオーブンに入れて、

「では、これからおじいちゃんを焼きます」
焼く。

チノの無意識な火葬宣言にティツピーが慌てていた以外には何も問題はなかった。

パンが焼き上がるまで時間があるのでタクトは持ってきた材料で何かを作ろうと考
えた。

「チノ、コンロと鍋借りてもいいか?」

「いいですよ。何か作るんですか?」

「ああ。ちよつとな」

タクトはチノに教えられた場所からいくつかの調理道具を取り出した。

リゼが不安げな顔でタクトに聞く。

「まさかゴーヤを使うのか……?」

「それはそれで魅力的だが、今回は使わない」

「今回は、つてなんだ」

タクトは少し残念そうな顔をしながら使う食材を並べていく。

リゼが何かを言っているようだが気にしない。

「バナナと板チョコと牛乳……チョコバナナですか?」

「惜しい。見てればわかると思う」

タクトはチノの質問に答えつつ、バナナを包丁で輪切りにする。

ついでにここで板チョコも細かく刻んでおく。

バナナを鍋に移し、砂糖と牛乳を少しずつ加えながら木ベラで潰していく。

少し緩めのペースト状になったところでそれを弱火にかける。

ある程度鍋が温まったら刻んでおいたチョコを加えて溶かしていく。

「後は焦げないように混ぜながら煮詰めるだけだ」

「いい香り!」

「本当ねー」

甘い香りに誘われてココアと千夜が鍋を覗きに来た。

「タクト君って本当に料理ができたんだね! 凄い! 千夜ちゃんもそう思うよね??」

「そ、そうね……」

「……ココアは無意識に喧嘩を売るのが得意だな」

これがわざとではないので困る、とタクトは呆れ気味にため息をつく。

そんな二人の様子を見て千夜は苦笑いをする。

するとどうやらチノはタクトが何を作っているか気づいたようだ。

「あ、わかりました。ジャムですな?」

「正解。チョコバナナジャムだ。パンにはもってこいだろう」

「へえ、ジャムってバナナでも作れるのか」

「まあ、厳密に言えばジャムと言うよりはピーナツバターに近いな」

しばらくして鍋の表面に小さな気泡が出来てきたところで火を止める。

そして最後に粗熱を取ればチョコバナナジャムの完成である。

それと同時にパンも焼き上がったらしくオーブンからチーンと景気のいい音がした。

「こつちもできたよ!」

ココアがオーブンからトレーを取り出すと、小麦の焼ける香ばしい香りが厨房を包み

込んだ。

「いい香りね〜」

「美味しそうです」

「これは良さそうだな！」

「じゃあ、早速食べてみよう！」

タクト達はいただきますの声と共に焼きたてのパンにかじりついた。その瞬間、フワフワとした食感と小麦の旨みが口いっぱい広がる。

「美味しい！」

「ふかふかです」

「これなら看板メニューに出来そうだね！」

確かにこの出来栄なら店に置いても文句なしだろう。

「この焼きうどんパン！」

「この梅干しパン」

「この焦げたおじいちゃん」

趣向は若干、と言うよりかなり偏るだろうが恐らく問題ない。

「どれも微妙に食欲をそそらないな……」

どうやらリゼには合いそうにないらしい。

「俺の作ったジャムはなかなかパンに合うな」

「ちよつと貰っていいか??」

「ああいいぞ。皆も食べてみるか？」

タクトがチョコバナナジャムの入った鍋を調理台の真ん中に置くと、四人はそれぞれパンに塗って食べる。

「これは……」

「バナナの上品な甘さとビターチョコレートのほろ苦い風味がよく合うわ」

「美味しいです」

「これも看板メニューに出来そう！ 凄いよタクト君！」

それぞれがジャムの感想を述べていき、最終的にはラビットハウスのメニュー候補に挙げられた。

タクトは予想以上の反応に照れるように頬をかいた。

「よーしー！ 私も負けてられないよー！ ということまでティツピーパンも作ってみたんだ！ これも食べてみて！」

ココアが取り出したのはティツピーを形取ったパンだった。

チノがそのうちの一つを手を取った。

「モチモチしてる……」

「えへへ……美味しく出来るといいんだけど……」

そして一斉にティツピーパンにかじりついた。

「あー！」

「これは……」

「中身はリゼちゃんが持つてきたイチゴジャムを使つてみたよ！ 美味しいね！」

「あ、ああ。でも……」

イチゴジャムとパンの相性は今更言うまでもないだろう。しかし、一つだけ問題があつた。

「なんかエグいな……」

かじりついた箇所からだけでなく、ティッピーパンの目や口と言つた場所から赤いイチゴジャムが溢れてくる。

その見た目はなんとも言い難い物がある。

結局主な看板メニユーは特に決まらなかつたがラビットハウスの新メニユーとしてココアの焼いたパンと、タクトがレシピを残したチョコバナナジャムが加わつた。

余談だが、タクトは自分の家の小さいオーブンでゴーヤパンを作つてみたらしい。

彼曰く見た目は鮮やかだったが流石にゴーヤをまるごとというのは良くなかつた、とのこと。

第七話 甘味と兎

ラビットハウスの看板メニュー開発の後日、天気も良く、バイトも休みであるタクト達は街を歩いていていた。

「千夜ちゃんの話だとこの辺だと思うんだけど……」

「また迷ったのか?？」

「……タクト君って結構失礼だよな?？」

「そうか?？」

ココアからジト目で見られながらタクトがこの木組みの街を歩いているのには訳がある。

先日のパン作りでお世話になったお礼に、と千夜が働いている喫茶店に招待されたのだ。

なので、こうしてラビットハウスの顔ぶれと共にその喫茶店を目指しているという訳だ。

「なんて名前の喫茶店なんですか?？」

「確か……甘兎、だったかな?？」

「甘兎とな?!?!」

甘兎という言葉聞いた途端チノが、と言うより彼女の頭の上のティツピーが声を上げる。

彼の中身はチノの祖父だ。彼の生前にラビットハウスと千夜の喫茶店とで何かあったのだろうか。

「チノちゃん知ってるの?!」

「おじいちゃん時代の時代に張り合っていたお店だと聞きます」

どうやらラビットハウスのライバル店だったらしい。どうりで先程からティツピーが何やら険しい表情をしている訳だ、とタクトは頷く。

間も無くして一つの甘味処と思われる店に着いた。

「ここじゃないか? 看板だけやたら渋いな」

リゼの言う通り店の外観は周囲の建物に合うような西欧チックな佇まいだが、店に掲げられた木製の看板だけは歴史を感じさせるような体裁である。

「……おれ、うさぎ、あまい?!」

どうやらココアは看板の文字を左から読んだようだ。その上庵と俺の文字が混同したらしく、謎のスイートラビット宣言をした。

「……甘兎庵な」

リゼの訂正が果たしてココアの耳に入ったのかはさておき、一行は甘兎庵のドアをくぐった。

「あら?! 皆、いらっしやい」

店に入ると着物姿の千夜が四人を出迎えた。

「あ! その服、お店の制服だったんだ! 初めて会った時もその格好だったよね」

「ああ、言われてみれば」

「あの時はお仕事でお得意様に羊羹を配った帰りだったの」

それであの時羊羹を持っていたのかとタクトは納得した。

「そうだったんだ! あの羊羹美味しくて三本もいけちやったよ」

「三本まるごと食ったのか!?!」

「そう言えば栗羊羹のカロリーはどのくらいなんだろうな」

「……」

タクトのつぶやきを聞いた瞬間にココアは笑顔のまま硬直した。なんとも奇妙な光景である。

「一般的な羊羹自体がカロリーの塊のようなもので、そこに栗が——わかった。この話はやめるからそんな目で見ないでくれ」

栗羊羹について推察するタクトにココアはやめてくれと懇願せんばかりの視線を送

る。

「……タクトってなかなか容赦ないよな」

「ふふ、うちの栗羊羹はカロリーと糖質を抑えているから大丈夫よ？」

「本当……?!」

「ええ」

「そっか！ なら大丈夫だね！」

「変わり身早いな！」

「あー！ ウサギだ！」

早くも立ち直ったココアは店の中央の小さなテーブルに座っている王冠を被った黒いウサギの置き物に目をつけた。

「看板ウサギのあんこよ」

「本物なのか?!」

「もちろん」

訂正、どうやら置き物ではなく本物のウサギのようだ。

皆で近づいても微動だにしない。

「置き物かと思っただぞ」

「あんこは余程のことがないと動かないのよね」

千夜がそう言った矢先に、あんこがチノを——チノの頭の上のティツピーを目掛けて飛びついた。

「チノちゃん?!?」

それに驚いたチノは倒れそうになったが、タクトが支えたので無事だった。

「大丈夫か?!?」

「は、はい。びつくりしました」

「のわあああああ!?!?」

チノは無事だったがティツピーはあんこにロックオンされてしまったようだ。

「縄張り意識が働いたのか?!?」

「いえ、あれは一目惚れしちやっただのね」

「一目惚れ?!?」

チノが千夜にそう聞き返すと彼女は手でハートを作る。

「あの子恥ずかしがり屋君だと思ってたのに、あれは本気ね」

「あれ?!? ティツピーって雄じゃないの?!?」

「ティツピーは雌ですよ。中身は違いますが……」

衝撃の事実が発覚した。どうやらティツピーは雌だったらしい。

タクトは彼、改め彼女の中身を知っているので余計に驚いた。

「助けてくれえええ!!」

ウサギになつてウサギに恋愛対象として追いかけられるのはどういう気分なのだろうか。タクトはあんこから逃げるティツピーを見ながら今度聞いてみようと思ふのだった。

四人は千夜に案内されたテーブルに腰を下ろした。

すると、千夜が店の奥からお盆を持つてやつてきた。お盆には人数分の茶碗が見える。

「この前ココアちゃんのラテアートを見て抹茶でもやつてみたの」

彼女がタクト達に出した抹茶には見事な大和絵が描かれていた。

「北斎様に憧れていて……」

「浮世絵?」

「それと、はい」

続いて彼女が出した抹茶には川柳がしたためられていた。

——ココアちゃん、どうして今日は、おさげやきん。

本日のココアの髪型はおさげだ。恐らくキノとおそろいにしたかつたのだろう。

「この前のタクト君の詠んだ俳句を聞いてから芭蕉様にも憧れていて……」

「ああ、入学式の日のやつか」

「ええ。タクト君、あの一句は見事だったわ!」

千夜はタクトに向かって親指を立てた。

リゼとチノは何のことかわからないという顔をしていたが、ココアはなんとも言えない表情を浮かべていた。

「後、お品書きよ」

渡されたお品書きを見たチノとリゼは頭にはてなマークを浮かべている。

「煌めく三宝珠、雪原の赤宝石、海に写る月と星々……なんだこの漫画の必殺技みたいなメニユーは……」

しかし、タクトとココアだけは違ったようだ。

「わー! 抹茶パフェもいいし、クリームあんみつも白玉も捨てがたいなあ!」

「いちご大福と三色団子……どちらにするか迷うな」

「なぜわかる!?!」

どうやら二人にはこれらのメニユーがちやんと読めるらしい。

「千夜さんとココアさん、タクトさんは感性が似ているのでしょうか?」

「ふっ……チノは冗談を言うのがうまいな」

「やっぱりタクト君って失礼だよね!?!」

「冗談言うのがうまいのはタクト君でしょ！」

「つつこむところそこか!?!」

目の前で漫才を繰り広げる四人を見てチノは呆れたように言った。

「注文しましょう……」

「そうだった！ それじゃあ私は、黄金の鯨スペシャルで！」

「俺は雪原の赤宝石を」

「私は……よくわからないけど、海に写る月と星々で」

「花の都三つ子の宝石で」

「はい、じゃあちよつと待っててね」

千夜は注文を受け店の奥へと消えていった。

その後ろ姿を見ながらココアがつぶやく。

「和服っておしとやかかって感じがするよね」

ふとりゼの方を見てみるとぼんやりと千夜が向かった先を見つめていた。

もしかしたら着物が気になっているのかもしれない。

「着てみたいんですか？」

「あ、いや！ そういう訳じゃ……」

「良いじゃん！ リゼちゃんなら似合うよ！」

「そ、そうかな……?!」

リゼは目に見えて照れている。

そこで、タクトは想像してみた。着物を着て、振り返りながら肩をはだけさせるリゼの姿を。

「……かなり艶っぽいな」

「艶っぽいって……ば、ばばば、馬鹿!! お前は本当に何を想像したんだ?!」

「すまない、俺が悪かった。だからその手を離してくれ」

顔を赤くしたりゼに首を掴まれて前後に揺すられながら、タクトは何か既視感があるなど思いつつ意識が薄れていくのを感じ取った。

しかし救世主は現れた。

「お待ちどうさま……あら?! リゼちゃんは新しいツツコミの練習中?」

「ち、違うー!」

「げほっ……助かった、千夜」

タクトは咳き込みながらも一命を取り留めた。

心なしかココアとチノからの視線が冷たい気がしたが、彼の心はダイヤのように硬いのでなんの問題もない。ハンマーで叩いたら割れるということはない。絶対にない。

「はい、リゼちゃんは海に映る月と星々ね」

「へえ、白玉栗ぜんざいだったのか」

「チノちゃんは花の都三つ子の宝石ね」

「あんみつにお団子が刺さってます!」

「タクト君は雪原の赤宝石ね」

「結局いちご大福にしたんだね!」

「ああ」

「ココアちゃんは黄金の鮭スペシャルね」

「おお……!」

ココアが頼んだ物は一番インパクトがあつた。

あんみつに白玉と抹茶ソフトを乗せたい焼きを鮭に見立てたパフェのような物だつた。

「たい焼きが鮭って無理がないか?」

「遠目に見ればそれっぽいからセーフだ」

「ふふ、さあ召し上がれ」

タクト達はいいただきますの一声と共に自分の頼んだ物を口に運んだ。

「ん……! 美味しい!」

「このお団子、桜の風味が……!」

「大福も小豆の甘さがイチゴの爽やかさとよく合うな」

それぞれがあまりの美味しさに驚いている。リゼに至っては黙々とぜんざいを口に放り込んでいる。

「あんこは栗羊羹ね」

いつの間にか定位置に戻っているあんこは千夜に栗羊羹を与えられたが、それには手をつけずこちらを見ている。

「ん?? どうしたの??」

「こつちのを食べたいのでしょうか?」

「しようがないなー、ちよつとだけだよ?? その代わり、後でモフモフさせてね??」

ココアがあんこの方にスプーンを向けるが、彼は本体に真つ直ぐ飛び込んできた。

「本体まっしぐら!?!」

「あらあら」

千夜があんこを抱き抱え元の位置に戻した。

ココアは何事も無かったかのようにパフエの続きを食べ始め、満足そうな顔をする。

「それにしてもこのぜんざい本当に美味しいな」

「うちもこのくらいやらないとダメですね……」

チノは目の前のあんみつを食べながらむむむと唸る。

すると千夜が手を合わせて提案してきた。

「それならラビットハウスさんとコラボなんてどうかしら？　コーヒーあんみつとか！」

それを聞いてココアは目を輝かせた。

「いいね！　タオルやトートバッグなんてどうかな？」

「私はマグカップが欲しいです」

タクトは料理じゃないのかと心の中でツツコミを入れるが、すぐにバッグやマグカップは実用性があるので案外悪くないかもしれないという思考に移っていた。

彼は一人暮らしなのでそういう物への執着はあるのだ。

出された物を食べ終え、千夜も入れ五人で談笑していると不意にココアがチノにこんなことを言った。

「そう言えばチノちゃんはあるこには触らないの?？」

チノは残念そうな表情であんこを見つめている。

「チノはティッピー以外の動物が懐かないらしいんだ」

その話を聞いてタクトは頷き、立ち上がった。

彼は中央の小さなテーブルに近づき、あんこを抱き抱え戻ってきた。

「大丈夫だ」

そしてそれをチノに差し出し笑って頷く。

「……」

チノは恐る恐る手を伸ばす。ゆっくり、ゆっくりとあんこに近づきそして、

「……！」

指先があんこの耳に触れる。ぴくりと揺れるそれにチノは驚くが、今度はあんこの背中を撫でてみる。

タクトの腕の中のアんこはチノに触られても逃げることは無く、されるがままになっている。

そんな彼を見てチノは意を決してタクトからあんこを受け取ると、ぎゅつと優しく抱きしめる。

「凄い！ もうこんなに仲良く……！」

そして、チノはぼんとあんこを頭の上に乗せる。彼女は満足そうだ。

「頭に乗つけないと気が済まないのか!?!」

人のアイデンティティにツツコミを入れるのは野暮というものだろう。

「良かったな、チノ」

「は、はい！ 私、触れました！」

嬉しそうに笑うチノを見てタクトも微笑む。

「た、タクト君にチノちゃん取られる……!」

周りから見れば兄妹だと言われても何の違和感もないその光景にココアは言い知れぬ焦燥感に駆られていた。

しばらく話に夢中になっていたが、窓から外を見てみると空が赤みがかっていた。

「じゃあそろそろお暇するか」

「皆さん、また来てくださいね」

帰る用意をして立ち上がるとココアがふと言った。

「私の下宿先がラビットハウスじゃなくて千夜ちゃんの家だったら、ここでお手伝いさせて貰っていたのかな?」

すると千夜は笑顔でココアの手を取る。

「今からでも来てくれていいのよ? 従業員は常時募集中だもの」

「それいいな」

「同じ喫茶店だからすぐ慣れますね」

「どうやらリゼとチノはココアの転職に反対意見はないようだ。」

「じゃあ早速荷物をまとめて来てね! 部屋は空けておくから」

「誰か止めてよ!」

タクトはあくまでも客の立場なのでとりあえず黙っておくことにした。

「千夜ちゃんまたね！」

「ごちそうさまでした」

「またな！」

「ごちそうさま、またな」

店を出た四人は見送りに出てきた千夜に手を振る。

彼女もそれに応える。

そして帰り道。

ココアがしみじみと呟いた。

「昔はあのお店とライバルだったんだね」

「今はそんなこと関係ないですけどね」

昔は競い合っていた二つが時が経ち、いさかきも無くなるというのはよくある話である。

タクトは自分と父親とを当てはめてみて小さく笑った。

「ん?? どうしたんだ?? タクト」

「……いや、なんでも無い。時間というのは偉大だと思ったただけだ」

「ははは、なんだそれ」

そう。時間というのは偉大だ。どんなものでも時間が経てば自然と馴染んでしまうのだ。

例えば、チノの頭に乗っているウサギが白い毛玉ではなく王冠を被った黒いウサギだったとしても、慣れてしまえば些細な違いなのだ。

タクト以外がこのことに気づくのはチノとココアがラビットハウスに帰った時のことだった。

第八話 兎が苦手な君にお野菜を

新学期が始まってから何日かが経ち、ココアもラビットハウスでの仕事に慣れてきたようだ。

この日は、と言うよりもいつも通り閑古鳥が鳴くこの店では常連客を交えたコーヒーブレイクが取られていた。

「……美味しい」

「本当だねー。私もチノちゃんが入れてくれたコーヒーを飲んでから癖になっちゃった」

タクトがコーヒーを啜って一言、ココアもそれに同調した。

「……ココアさんは味の違いがわからないじゃないですか。それじゃあただのカフェイン中毒ですよ。それと仕事してください」

どうやら言葉に綾があったようだ。コーヒーブレイクを取っているのはココアだけだったらしい。見るとチノはカウンターでカップを拭き、リゼは店内を軽く掃除している。

一方で自主休憩を取っているココアは手に持っているコーヒーカップを眺めていた。

「そう言えばラビットハウスのカップってシンプルだよね」

確かに彼女が言うようにこの店のコーヒーカップはほとんどが無地である。

ラビットハウスはコーヒーは拘っているが容器はそうでもないらしい。

「シンプルイズベストです」

「もつといろんな物があつたらきつと皆楽しいよ??」 そうだ！ 今度皆でカップを見に行こうよ！ この前面白いカップを見つけたんだ！」

「へえ、どんな??」

リゼがそう聞くとココアは嬉しそうに答える。

「えつとね……ロウソクが立っててなんかいい匂いがするの」

どうやらアロマキャンドル用のカップのことを言っているようだ。

保登家ではキャンドルホルダーで飲み物を飲む慣わしでもあるのだろうか。

「キャンドルホルダーでコーヒーというのもなかなか乙だな」

「お前は何を言っているんだ」

「どうやら違ったらしい。」

ということがあり学校があつた日の放課後、タクト達は一旦ラビットハウスに集まってからカップを見に行くことにした。

そして彼らがやって来たのは陶器を専門に扱っている店だった。

「わー！ 可愛いカップがいっぱい！」

「あんまりはしゃぐなよ」

店に入るなりココアは子犬のようにはしゃぎだした。

それをリゼが咎めるがそのほんの数秒後、つまづいたココアが店の棚に頭突きをかました。

衝撃で棚の上から写真立てが落ちてくる。

それをチノがキャッチし、倒れそうになるココアをリゼが抱きとめる。

そしてココアが一番近い位置に居たタクトはというと、彼女は予想を裏切らないな、と関心しながら携帯の写真機能でその光景を収めていた。

「よし」

「よしじゃない」

「よしじゃないです」

二人はなにやら不満があるらしいがタクトはとりあえずスルーした。

「えへへ……ごめんね……あー！」

少し赤くなつた額を撫でながらココアは二人に謝罪をするが、彼女の意識はすぐにチノの持っている写真立てへと向けられた。

写真の中にはカップの中からひよこつと顔を出すウサギが収められていた。

「可愛いね！　うちもティツピーでやれば注目度アップだよ！」

「そんな大きなカップあるわけ……」

「ありました」

「あつた!?!」

チノが両手で抱えるようにして持つてきたのは、ティツピーがちょうど収まりそうなくらい大きいカップだった。

実用と言うよりはインテリア色が強いそのカップに早速ティツピーを入れてみた。

「なんか……」

「違いますね……」

「……」

「タクト、無言で割り箸を構えるのはやめろ」

茶碗のようなデザインのカップに入る真っ白でモフモフなティツピー、どこからどう見ても大盛りの白米にしか見えなかった。

白米を放置し、改めてラビットハウスの新しいカップを探していると、ココアが一つのカップに目をつけた。

「あ！　これなんか良いかも……」

彼女が手を伸ばしてそれに触れようとする、誰かの手と重なった。

「あ……」

「その……」

互いに恥ずかしそうに見つめ合う。

それは偶然の出会いだった。が運命においては必然だったのかもしれない、と言うようなナレーションが入りそうな光景をチノ達は遠目に見ていた。

「このシチュエーション漫画で見たとあります」

「よく恋愛に発展するよな」

「確か百合展開、って言うんですよね」

思い出すようにチノが言う。

純粹な心を持つチノの口から出たその言葉にリゼは凍りついた。

「……一応聞くけど、どこで知ったんだ？」

「この前タクトさんが教えてくれました」

「タクト、後でココアも交えてお話ししような？」

店から出ようとするタクトの肩を掴み、笑顔でリゼはそう言った。

嗚呼哀れ、タクトの冒険はここで終わってしまうようだ。

「り、リゼ先輩!?!? ど、どうしてここに……?!?」

ココアと手を重ね合った、金髪の少女がこちらの存在に気づいたようだ。

「あれ、シャロじゃん。バイト先の喫茶店で使うカップを買いに来たんだよ」

リゼも相手のことを知っているらしく、相手の名前を言う。

「知り合いですか？」

「ああ。学校の後輩のシャロだよ。ココア達と同年」

「え?? リゼちゃんって年上だったの??」

「今更!?!」

どうやら同年だと思っていたらしい。

そんなココアを尻目にシャロと呼ばれた金髪の少女はタクトをじつと見つめる。

「それとあなたもどこかで会ったような……」

「俺か?」

シャロはしばらくタクトを観察してから思い出したように声を上げた。

「……あー! 思い出したわ! あの時の!」

「……すまないがどうも思い出せない」

「私は忘れないわよ! あなたの嫌がらせを!」

彼女は恨めしそうにタクトを睨む。

タクトはそんな彼女をなだめて鞆から何かを取り出して彼女に渡した。

「まあまあ落ち着いて。今日はナスをあげよう」

「あ、ありがとう……って、あなた絶対に覚えてるでしょ!?!」

「とういかなんでナスを携帯してるんだ!?!」

「やるな、二人共」

流石は同じ学校に通うだけのことがある。見事なツツコミを繰り出した二人にタクトは称賛の声を贈った。

「ところでタクトさんはシャロさんといつ知り合っただんですか?」

「そう言えばそうだよ。二人は学年も学校も違うよね?」

チノとココアは不思議と言った様子で二人に尋ねる。

「そ、それは暴漢から——」

「ウサギにカツアゲされているところを助けたんだ」

「私の時と同じ?!?!」

「せめて最後まで言わせて?!」

どうやらリゼとの出会いもタクトと似たような状況だったらしい。

同じことを繰り返すとは、ひよつとしてギャグでやっているのだろうか。だとすれば素晴らしい芸人魂だ、とタクトは感心する。

一方でシャロは慌てるように近くににあったカップを手に取る。

「ほ、ほら。このティーカップとかどう??」

「話を誤魔化そうとしますね」

「ち、違うの! ほら見て、この広くて浅い形。香りがよく広がるの」

彼女が取ったカップをチノは近くで見つめる。

「へえ、カップによって色々違うんですね」

「こつちのカップは持ち手の触り心地が工夫されているのよ」

ココアは差し出されたカップの持ち手を指で撫でてみる。

「あ、本当だ! 気持ちいい!」

「でも、うちの喫茶店はコーヒーターがメインだからカップもコーヒーター用じゃないとな」

リゼの言う通り、シャロが紹介したそれらは全てコーヒーターではなく紅茶のカップだった。残念ながらラビットハウスでは紅茶は取り扱っていない。

「そうなんですか???!」 リゼ先輩のバイト先行ってみたかったのに……」

彼女は残念そうに言う。

もしかしてコーヒーターが苦手なのだろうか。

「コーヒーターが苦手なの??」

「苦手と言うか……カフェインを摂りすぎると異常なテンションになるらしいの……自分じゃよくわからないんだけど……」

コーヒー酔いというものだろうか。それなら仕方がない、とタクトは頷いて鞆の中から何かを取り出してシヤロに渡した。

「それは残念だな。飲むか？」

「ありがとう……って、これ缶コーヒーじゃないのよ！」

「安心してくれ。ミルクと砂糖のまろやか仕立てだ」

「なんだ、なら安心……って、違うわよ！ カフェインがダメなの！」

「そう言えば最近ノンカフェインというのものもあるよな」

「今言ってもこれはインカフェインのままよ!!」

「うまいな」

「うまくない!!」

「まあ、落ち着いて。タマネギをあげよう」

「なんで持つてるの!?!」

なんとキレのあるツツコミの数々だろうか。もしかしたら彼女は先天的なツツコミ属性があるのかもしれない。

腕を組んで頷くタクトを見ながらシヤロはため息をついた。

「はあ……あなたを見てると知り合いのことを思い出すわ……」

「まあ……あれだ。飲めなくてもいいから遊びに来なよ」

「は、はい！」

シヤロは嬉しそうに頷いた。

ラビットハウスは懐の深い店である。どんな人でも気兼ねなく訪れることが出来るのがこの店の最大の長所だろう。

その後もゆったりとカップを見ていたが、やがてココアが本題を逸れマイマグカップを探し始めていた。

「チノちゃん、これお揃いのマグカップだよ！ 買おうよ！」

「私物を買いに来た訳じゃないですよ……」

ペアのマグカップの前で話しているチノとココアを、リゼはなにやら羨ましそうに眺めていた。

さらにその光景をシヤロが心配そうに見つめている。

そこでタクトはシヤロに話しかけた。手にペアのマグカップを持って。

「シヤロ。リゼとこれを買ってやったらどうだ？」

「え？ でも……」

戸惑うシヤロにタクトは優しく微笑みかけた。

「大丈夫だ。リゼなら一緒に買ってくれる」

「そう……かな?」

「ああ」

するとシヤロは少し考えて笑った。

「……ありがとう。言ってみるわ」

彼女はタクトから二つのマグカップを受け取ってリゼに持っていった。

リゼは喜んでシヤロからカップの片方を受け取る。どうやら購入するようだ。

シヤロは自分のマグカップを見てなにやら顔を赤らめていたが、実はタクトが渡したのは恋人用だったらしい。タクトもリゼもそのことには気づいていない。

「それにしてもシヤロちゃんってお嬢様って感じがするよね! カップを持っている格好も凄いい合ってるし!」

「お嬢様!?!」

唐突にココアがそう言い出す。

「そうですね。シヤロさんやリゼさんの制服の学校は秀才とお嬢様が多いと聞きますし」

「ああ。シヤロは立ち振る舞いからも気品が溢れているからな」

「え、ええ!?!」

それにチノとりゼも便乗する。

確かに彼女達が言うように、シャロからは何故かお嬢様というオーラの的な何かを感じる。

「きつと、凄い豪邸に住んでるんだよ！」

「メイドさんとかもたくさん居そうです」

「多分銃のコレクションもいっぱいあるんだろうな」

「え、あの……」

最後のリゼの発言はともかく、三人のシャロに対するイメージはお嬢様ということで定着したらしい。

対してシャロは目を泳がせて明らかに困惑している。

タクトはそんな彼女を見て何かを察した。そして腕時計を見て言う。

「そろそろ夕飯の買い出しに行かないといけないから俺は行くぞ」

「そうですね。私達もそろそろお店に戻らないとですね」

「コーヒーカップはまた今度ゆつくり見ようね！」

「だな」

「ほっ……」

チノ達がシャロの話題から外れたことで、彼女は安堵のため息をつく。

その後、リゼとシャロのマグカップの会計を済まし店の外に出た。

「それじゃあ、私達は店に戻るよ」

「またねタクト君！ シャロちゃんも、また今度ラビットハウスに来てね！」

「お疲れ様でした」

タクトとシャロはこちららに向かつて手を振る彼女達に伝えて、陶器の店を後にした。

タクトが歩き出し、シャロもその後ろをついていく。どうやら途中まで同じ道らしい。

互いに無言のまま歩いていると一つの分岐路に着いた。

「じゃ、俺はこっちの道だから」

タクトはそう言って一つの道に向かつて歩き出す。

「ま、待って！ 買い物はいいの?? スーパーはこっちよ??」

シャロは店のある方向と違う店に進もうとする彼を呼び止めた。

タクトは足を止めて振り返る。

「?俺の家はこっちなんだ」

「でも、さつき買い出しがあるって……」

おずおずとそう聞くシャロにタクトは小さく笑って答えた。

「ふっ……考えてみたら昨日済ませたばかりだった。俺とすることがうっかりしてた」

「そ、そうなの……?？」

「ああ。じゃ、またな」

「あ……」

シヤロには彼の言葉の真意はわからなかった。

しかし、夕焼けに照らされたタクトの後ろ姿を見てこう言わずには居られなかった。

「……ありがとう」

その声がタクトに届いたのかは誰にもわからなかったが、シヤロはなんとなく彼が笑ったように思えた。

第九話 ハーブと芸術の融合

いつもより早めにバイトが終わったタクトはいつものスーパーで買い物をして自宅に帰る途中だった。

レジ袋を片手にいつも通りの道を歩き、一つの喫茶店の横を通り過ぎようとするとき、覚えのある服装の四人を見つけた。

彼が通う喫茶店の制服が三つと、最近立ち寄った甘味処の和風な制服が一つ。そのうちの一人の頭の上には白くて大きい毛玉。何やら喫茶店の植木に隠れて店内を偵察しているようだ。

タクトは友人達の奇怪な様子に声をかけまいか悩み、答えを出した。

タクトは白昼堂々と覗きをする四人をスルーして喫茶店の扉を開けた。

店内に足を運ぶと店員が笑顔で彼を出迎え――

「いらっしゃいませー！」

――随分と大きなウサギがスカート丈の短いメイド服を着て笑顔で彼を出迎えた。

「……」

金髪のくせつ毛が特徴的なロップイヤーのそのウサギはタクトの姿を確認するとし

ばし硬直する。

タクトは無言で懐から携帯電話を取り出し、構える。

パシヤリという音で彼女は動き出した。

「なんで居るのよ!?! つて言うか、なに撮ってるのよ!?!」

「いや、つい。前者については……」

タクトは携帯電話をしまいつつ、店の窓の外に顔を向ける。

それに続いて彼女もそちらに目を向ける。

そこには先程の四人と一匹が植木から顔を覗かせていた。

「本当になんで居るの!?!」

「ここはハーブティーがメインの喫茶店よ?。ハーブには色々な効果があるのよ」

外で覗き見をしていたココア達も店内に招き入れ、事情を聞く。

どうやらこの喫茶店——フルール・ド・ラパンのチラシを見た千夜が、シヤロがいか
がわしい店で働いている、と勘違いをしてその調査に来たらしい。ココア、リゼ、チノ
はそれに付いてきただけだという。

「全く……勘違いも程々にしなさいよね」

「それにしても素敵な制服ね!」

「話を聞きなさいよ！」

ため息をつきながら言うシャロと彼女の制服を見て微笑む千夜。

タクトは仲がいい二人を見て気になっていたことを聞いてみた。

「この前シャロが言つてた知り合いというのは千夜のことだったのか」

「そうよ。言つてなかった？かしら？」

「シャロちゃんとは幼馴染なの」

道理で仲が良い訳だ、と納得がいったようにタクトは頷いた。

「それにしてもシャロちゃんそのウサ耳本当に可愛いね！」

「て、店長の趣味よ……」

シャロはココアに褒められて恥ずかしそうにウサ耳を隠そうとする。

タクトは真剣な面持ちでシャロを見つめて言った。

「是非とも店長さんと語り合いたい」

「……タクトって意外とこういうのが好きなのね」

「ああ」

「いつそ清々しいわね」

シャロから軽蔑とも驚きともとれるような目で見られながらも、タクトは曇りなき眼で頷いた。

白いブラウスに黒いベスト、それに加えて白いエプロンという、一見メイド服を彷彿させる組み合わせの服装。もはやこれだけでも相当なステータスとなりうるが、そのスカート丈は短め。しかも、その上でこの店ではカチューシャの代わりにウサ耳を着けるという芸当をやつて見せている。さらに言えばこのウサ耳、ロップイヤーなのだ。左右に垂れるように耳が生えている、ロップイヤーなのだ。再度言おう。ロップイヤーなのだ。一般的にウサ耳と言えば二つの長い耳が天に向かつて伸びているものを思い浮かべるだろう。もちろん、それも悪くは無い。むしろそうだったとしても誰がそれを否定しようか。いや、しない。しかしこの店ではその常識をぶち破り、愛らしくふわりと垂れたウサ耳を採用しているのだ。ロップイヤーとスカート丈の短いメイド服。双方の融合により生まれるのは、もはや幻想を超えた美だ。芸術と言っても過言ではないそれを作り上げるのは至難の業であろう。これだけの偉業をやつてのける人物は世界広しと言えどもフルールの店長だけだろう。

歴史に名を残すべき人物に一度会つてみたいとタクトは言った。

普段は無愛想な彼は世間一般的に言う萌えというものには無関心だと思われがちだが、むしろ人一倍こういう物に対して鼻が利くのだ。

「なんとというか……お前キャラ崩壊してるぞ……」

引き気味にリゼが彼に告げる。

よく見ればその場の女性陣のタクトに対する視線は絶対零度を大きく下回るものになっていった。

どうやら半分以上声に出てしまっていたらしい。

タクトは周りを一瞥して深呼吸をした。

「……で、店長はどこだ??」

「ブレないわね!」

その後なんとかその場を収め、タクト達はシャロに案内された席についた。

「せっかくだからお茶してつてもいいかな??」

「しようがないわね。はいメニュー」

タクトは渡されたメニューを眺めてみると、彼にとって馴染みのある名前のハーブティーを見つけた。

「ハイビスカスティーか……」

「タクト知ってるのか??」

意外なものを見たようにリゼが聞いてきた。

「ああ。昔母さんが親父にこれを入れてやってたんだ。肉体疲労に効く、つてな」

「確かにそれは体の疲れを回復する効果があるわね。タクトはそれにするの??」

「ああ、頼む。バイト終わりでも多少疲れてるしな」

「そう言えばタクト君はどこでバイトしてるの?」

「シャロがタクトの注文を受けるとココアが興味津々という様子で聞いてくる。」

「私もタクトと会ってしばらく経つけど聞いたことないな」

「私もです」

それに同調してリゼやチノ達もタクトの方を向く。

「ああ、そう言えば言っただけじゃなかったか。俺はこの街の力武さんって言う大工さんの下で働かせてもらってる」

「ほほう。力武と? な?」

チノの頭の上のティツピーが渋い声で呟いた。

「チノちゃん知ってるの?」

「確か、昔おじいちゃんが喫茶店を始めた時に内装の工事をしてくれた方が力武という大工さんだったとは聞いています」

「俺の雇用主は多分その息子さんだろうな」

なんとも不思議な縁があるものだ、とタクトは笑う。

「なるほど? な……確かにタクトは力仕事に向いてそうだな」

「大変じゃない? んですか? 大工さんってなんか厳しい人が多いイメージがあります」

し」

チノの質問にタクトは小さく笑って首を横に振った。

「力武さんは確かに見た目は少し厳ついが、優しい人だ。力仕事だから楽ではないのも事実だが、俺の住む場所を提供してくれた恩もある。不満は無い」

タクトがはつきりとそう言うと、ココアがなにやら目を輝かせていた。

「今の言葉なんかかっこいいね！ できるバイトさん、つて感じ！ 私も負けてられな
いよ！ ……という訳でシャロちゃん、私はダンディライオンにするよ！」

「……一応聞くけど、どうして?？」

「これを飲めばライオンみたいに強くなれるんだよね！」

得意満面に言う彼女を呆れ顔で見つめるシャロを誰が責められようか。

確かにダンディライオンという言葉の響きはなんとも雄々しいが、その実はタンポポ
のことである。

「……私がそれぞれに合ったハーブティーを選んであげる。とりあえずココアはリラッ
クス効果のあるリンデンフラワーがいいわね」

「へえ！」

これでも飲んで落ち着けということだろうか。

「千夜はローズマリー。肩こりに効くの」

「助かるわ〜」

甘兎庵の仕事で疲れが溜まつてるのだろう。決して年齢から来るようなものではない。

「チノちゃんは甘い香りで飲みやすいカモミールはどう??」

「子供じゃないです……あ、タクトさん笑いましたね!」

「気のせいだ」

「むー……」

普段はコーヒーには砂糖とミルクが必須なのを思い出して小さく笑ったタクトだったが、どうやらチノはお気に召さなかったようだ。

「リゼ先輩は最近眠れないと言っていましたから、ラベンダーがおすすめてす!」

「なるほどな」

リゼの眠れないというのは大方、単純に夜更かししていることではなからうか。

「あ、ティツピーには腰痛と老眼防止になるものをお願いします」

「ティツピーってそんな老けてるのか!?!」

その通り。祖父想いの孫に恥ずかしそうに頬を染めるその毛玉は実際に老けている。それを知る者は数少ない。

しばらくしてシャロがそれぞれのハーブティーを持つてきた。

お湯を注げば赤色に、レモンを入れれば青色が赤色に変わる魔法のようなハーブティーの様子にココア達は夢中だ。

「面白いわねー」

「見た目だけでなく味もいいな」

タクトは自分の赤色のハーブティーを飲む。酸味の利いた爽やかな風味が鼻孔を通り抜ける。

「あの……ハーブを使ったクツキーを焼いてみたのですが、よかつたらどうぞ」
「へえ、シャロが作ったのか。どれ……」

リゼはシャロの持つてきたクツキーを一つ齧ってみる。

「おー！ 美味しいな！」

「本当ですか！ 良かった……」

リゼに褒められてシャロは恥ずかしそうに顔を染める。

ハーブティーの色変よりもこつちの方が見ていて面白いとタクトは微笑む。

「私もいただきます！ ……あれ??? このクツキー甘くない？」

同じように一つ齧ってみたココアだったが、不思議そうに首を傾げる。

「そんなことないわよ？ ね?? タクト君」

「ああ。ちゃんと味がある」

千夜とタクトもクツキーを頬張るが、特に甘くないということはなかった。するとシャロが不敵に笑った。

「ふふふ……それはギムネマ・シルベスタを飲んだからよ！」

「え!?!」

気づくとココアはいつの間にかハーブティーをおかわりしていた。

それが原因なのだろうか。

「ギムネマとは、砂糖を壊す者の意味。それを飲むと一時的に甘みを感じなくなるのよ！」

「そ、そんな効能が……!」

なにやら片手を髪の毛のところにやる、いわゆるお嬢様ポーズを取りながら言う彼女はどことなく自慢げだった。

「なるほど。糖分の吸収を抑えられると言うことはダイエットにも良さそうだな」

「そうなの。シャロちゃんはダイエットでよく飲んでいたのよ」

「言うな馬鹿——!」

タクトと千夜によってあっけなく秘密がバレてしまったシャロには先程までの優雅さと余裕は微塵も残されてなかった。

なんとも哀れである。

ハーブティーも飲み終え、五人は一息つく。

「たくさん飲んじやったわ〜」

「お腹の中で花が咲きそうだよ」

シヤロが食器を片付けようとするとき、チノが申し出る。

「ごちそうさまでした。なにか手伝えることがあれば言ってください」

「ありがとう。チノちゃんは年下なのにしっかりしてるわね。妹に欲しいくらい」
シヤロがチノの頭を撫でると彼女は気持ち良さそうに目を細める。

その様子を見たココアは涙目で立ち上がった。

「チノちゃんは私の妹だよ!」

「……何言ってるの?」

「妹じゃないです」

「はう……!」

チノに無慈悲に突き放されたココアはそのままテーブルに突っ伏してしまった。

「……ココアはほつといて三人はリラックスできました?」

「確かにリラックスできたけど……」

「なんだか肩が軽くなったような……」

「ああ。今なら空も飛べそうだ」

「私も少し元気になった気がします」

「……流石にプラシーボ効果だろうけど、タクトのは絶対に違うと思う」
しれつと混ぜたボケにつっこむのは流石リゼと言ったところだろう。

「まあ、プラシーボ云々は置いといてハーブティーもクッキーも美味かった」

「だな。また来てもいいか？」

「ど、どうぞ！ 先輩方さえよければいつでも……」

「あの……」

帰る準備をして立ち上がったところでチノがおずおずと声を出した。

「……ココアさんが寝ています」

見ると彼女は気持ち良さそうに寝息をたてていた。

「ハーブティー効きすぎ」

「今頃夢の中で花に囲まれてるな」

「それはロマンチックだね」

チノはココアの体を揺すってみた。

「ココアさん、起きてください。帰りますよ」

「えへへ……チノちゃんがたくさん……」

「どういふことだ!?!」

どうやら花ではなくチノに囲まれてるようだ。

タクトはそれはそれで楽しそうだと笑った。

「起こすのも可哀想だし、ココアは俺が持つていこう」

「そんなぬいぐるみを持つていくみたいに言うなよ……」

「今のココアさんなら大して変わりませんよ」

チノは意外にも毒舌キアラなのかもしれない。

フルール・ド・ラパンからの帰り道、タクトはココアを背負って歩いていた。

「ココアさんがすみません」

「大丈夫だ。気にしなくていい」

タクトの背中で気持ち良さそうに眠るココアを見ながらチノは申し訳なさそうにする。

文面だけ見たらどちらが年上かわかったものではない、とタクトは笑った。

「それにしても本当に軽々と持ち上げたな」

「仕事で慣れてるからな」

「そうは言っても人一人運ぶのは大変だろ?? 代わるか?」

「大変なことを普通の女の子に任せる訳にはいかないだろう」

「そ、そうか……」

そう言つてタクトはリゼに微笑みかけると、彼女はなにやら顔を赤らめて俯いてしまった。

「タクト君つて無愛想に見えて結構大胆よね……」

「凄い破壊力です……」

タクトには千夜とチノが顔を赤くしている理由がわからなかったが、きつと夕焼けのせいだろうと解釈した。

この後もラビットハウスに着いてタクトの背中で目覚めたココアが一悶着していたらしいがそれはまた別のお話である。

第十話 はじめてのおとまり

天候というものはなんとも気分屋である。先程までバケツをひっくり返したように雨が降っていたと思えば次の瞬間には太陽が元気に顔を覗かせる。その逆もまた然り。

雨音が響く喫茶店のカウンター席でこの店オリジナルのブレンドコーヒーを啜る常連客が一人。

「タクトってば、そんなところで黄昏てないでこっちに来て一緒に遊ぼうよー」

そんな彼の腕をノリノリな様子で引っ張っているのは他称お嬢様の金髪の少女だ。

顔を見ればほんのりと赤く、言動も普段と打って変わって非常にフレンドリーである。

あたかも酒に酔っているかのような見栄えだが鼻を動かしたところでアルコール類の匂いは無く、コーヒー豆のいい香りが鼻をくすぐるだけだ。

「コーヒー一杯でここまで酔えるのはいいな。将来的に酒税を納めなくても済むじゃないか」

「お前は吞兵衛か」

大層羨ましそうにするタクトに、リゼは相変わらずキレのあるツツコミを入れる。

なんと息の合った漫才だろうか。

「しかしカフェインで酔うとは聞いていたがここまでしっかりべろべろになるとはな」
「ふふ、甘えん坊なシャロちゃんも可愛いでしょう?」

タクトの腕に抱き着いて離れようとしないうるシャロを眺めながら千夜は微笑む。

「否定はしないがこれは甘えてると言うよりは酔っ払いがシラフに絡んでいる様にしか見えないが……」

「そうかしら? シャロちゃんは結構タクト君に懐いてると思うのだけど」

気づくとシャロはタクトの腕にしがみついたまま寝息をたてていた。

どうやら騒ぎ疲れたようだ。

「ウサギは安心する時にしか眠らないらしいわよ?」

それはウサギが苦手なシャロに対する皮肉だろうか。

「別に俺が彼女に対して何をした訳でも無いと思うがな」

タクトはシャロを起こささないようにゆっくりと席を立つと、彼女を抱き抱えて自分の座っていた場所に座らせた。

「チノちゃん……無自覚って罪だよな……」

「そうですね……」

なにやら女性陣が顔を赤くしていたが、タクトにはその理由を知る由もなかった。

そんな彼にツツコミを入れるかのように雨と風がラビットハウスの窓ガラスを強く叩いた。

「それにしても凄いい雨だな」

「私達が来た時はそうでもなかったのに……」

千夜の言う通り、シャロと彼女がラビットハウスに来た時にはまだ太陽が燦々と輝いていた。

しかし丁度彼女達が席に座った瞬間に天候がガラリと変わったのだ。

そのせいか、それとも平常運転なのかこの日はまだ彼女達以外に客は来ていない。

「迎えを呼ぶからよかつたら家まで送ってくよ」

リゼが携帯電話を取り出しながら言うが、千夜はハツとした表情でそれを断る。

「いい、いえー！ 私がシャロちゃんも連れて帰るわー！」

千夜はシャロを背負うとそのまま店を飛び出した。

なんと美しい友情だろうか。タクトは若干の感動を覚えつつ二人を見送った。

千夜とシャロが店を出て行って数十秒後、彼女達は戻ってきた。

どうやら数メートル歩いたところで千夜の体力の限界が来たらしい。

道端に倒れた彼女達はタクト達によって救い出されたものの、すっかりびしょ濡れに

なつてしまった。

そのままでは風邪をひくと言うことで千夜とシャロはチノ達に連れられて風呂に向かった。

タクトは流石についていく訳にはいかなかったので、カウンター席でティッピーをモフリながら飲みかけのコーヒーを啜っていた。

「タクト君、こんにちは」

「こんにちは、タカヒロさん」

店の奥から現れたのはバーテンダーの制服を身にまとったタカヒロだった。どうやらバータイムの準備をしにきたらしい。

「いつもうちに来てくれてありがとう。チノも喜んでたよ」

「いえ、俺はこの店のコーヒーを目当てに来ているだけで何もしていませんよ」

「はは、白波家は親子揃って謙虚だな」

笑いながらグラスを布巾で拭く彼の姿はとても画になる。ダンディという言葉は彼のためにあるようなものだろう。

「それにしてもタクト君のバイト先が力武さんのところだったとは驚いたよ。あの人もうちのバータイムの常連さんだからね」

バータイムという言葉を強調したタカヒロにティッピーは顔をしかめた。

自分の喫茶店ではなく息子の営業の方が繁盛しているのが気に食わないのだろう。

「力武さんから聞いてます。昔は親父とよく飲んでいたとか」

「そうだね。前はよくアキヒロと力武さん、時々もう一人の友人がここで騒ぎ合っていたよ」

彼はしみじみという様子で頬を緩める。

タカヒロはワイングラスに紫色の液体を注いで、それをタクトの前に差し出した。

「……タカヒロさん。俺はまだ酒は飲めませんよ」

「大丈夫。少しでいいから飲んでみて」

タクトは訝しげな表情でワイングラスを持ち上げ、中の液体を口の中に流し込んだ。

その液体の正体にタクトは眉をびくりと動かした。

「これは……ブドウジュース？……？」

アルコール特有の匂いも無く、飲み込んだ時に体が熱くなる感覚もないその液体はブドウの味がするだけだった。

「これはアキヒロがこの店で気に入って飲んでいたものだよ」

「親父が……?？」

タカヒロはブドウジュースの瓶をタクトに見せる。コルクで栓をされたその容器の見た目はワイン瓶と大差なかったが、瓶の側面の洒落たラベルにははつきり果汁百パー

セント葡萄ジュースと書かれていた。

「どうやらこの街で採れたブドウを使用しているらしい。」

「……親父は下戸だったんですか？」

「いや、酒豪という言葉は彼のためにはあるのではないかと言うくらい酒は強かったよ。昔上司とビールの飲み比べをした時があったのだけだね、アキヒロはその上司の倍の量を飲んだにも関わらずケロツとしていたんだ」

タカヒロはあの時の隊長の悔しそうな顔は見物だった、と笑った。

「そんな酒豪さんがどうしてジュースしか飲まなかったんですか？」

「彼自身の口からは一度も聞いたことは無いけど、万が一酔っ払って家族に迷惑を掛けなくなかったからだと、俺は思うよ」

「……どうしてそう思うのですか？」

タカヒロは拭いていたグラスを置き、次のグラスを手を取った。

「彼は昔から自分より他人を優先する癖があつてね、俺もその癖には何度か命を救われた」

タクトは父親が軍事関係の仕事をしていると言っていたことを思い出す。

恐らくタカヒロは同じ部隊にでも居たのだろう。

「そんな他人のことばかり考えていた彼がこの店で話していたのは家族のことがほとん

どだった。余程君達のことを大切に思っていたのだろうね」

「……」

「最も、俺も結婚しているからその気持ちはよくわかるよ。もちろん、ティツピーもね」
彼の言葉にティツピーは頬を染める。

「九年前にアキヒロが仕事でこの街に居た時も年に数回しか家族に会えないと嘆いていたよ」

「凄い大袈裟ですね……」

タクトが呆れるように言うのとタカヒロは笑った。

「はは、そうかもしれないね。でも、タクト君も将来父親の気持ちがわかる日が来るかもしれないよ」

「……」

その言葉にタクトは何も返せなかった。果たして自分にそのような未来があり得るのか。自分の過去を知った上で寄り添ってくれるような人が現れるのか。今の彼にはわからなかったのだ。

タクトがワイニンググラスの中のブドウジュースを飲み干したところで店の奥の扉が開き、チノ達が入ってきた。

シャロと千夜は風呂を上がったようで、チノから借りたらしい寝巻きを着ている。

「二人共、湯加減はどうだったかな?」

「とても気持ち良かったです」

「あ、ありがとうございます!」

千夜とシヤロはタカヒロにお辞儀をする。

「それは良かった。よかつたらみんな今日はうちに泊まっていくといいよ。布団の予備はたくさんあるからね」

「そうですね。外は凄いい雨ですし、是非泊まっていつてください」

「いいんですか!?!」

「もちろん」

香風親子のありがたい申し出にリゼ達は喜んだ様子で頷いた。

その様子を見ながらタクトは帰る準備を進める。

「タクト君もどうだい?」

「俺もですか……?」

タクトは驚いた顔をしてタカヒロに向き直った。まさか自分が話題に上がるとは思ってもいなかったのだ。

「もちろん。君だけを除け者にする理由はどこにもないからね」

「そうですよ。それに、この雨の中傘もささぎずに歩くななんて危なすぎます」

せつかくの好意を無下にする訳にもいかなかったので、タクトは首を縦に振った。

友人の家でのお泊まり会の経験が無い彼は若干の緊張を感じながらも、心が高ぶるのを自然と理解した。

タクト達はタカヒロに礼を言い、その後チノの案内により彼女の部屋にお邪魔させてもらっている。

部屋の中は綺麗に片付いており、なんとも落ち着いた雰囲気がある、彼女らしい部屋だという印象が強い。

なおココアとチノは現在入浴中である。二人で風呂に入るくらいには仲良くなったらしい。

まあそれはさておき、タクトには先程から気になっていることがある。

「リゼ」

「な、なんだ?」

タクトはリゼの姿全体を視界に入れながら尋ねてみた。

「中学時代が恋しくなったのか」

先程から彼女の服装はチノの中学の制服である。似合ってなくはないが、サイズが小さいせいかスカート丈が短いように見える。

タクト的にはこれはこれで悪くないと思ってる節があるが、それを口に出したら彼の人生に終止符が打たれることになるだろう。

「ち、違う！ ココアとチノにジャンケンで負けたからこれを着ている訳であって、決して着たいから着ている訳じゃないぞ！」

赤面しながら制服を腕で隠すが、積極的に着替えようとしなのは満更でもないのだろうか。

「そんないつもと一味違うリゼの様子にシャロの目は釘付けの様子だ。」

是非とも写真に収めたい光景だが、タクトはまだ三途の川を渡る気はないので根性で耐えていると、この事態を引き起こした張本人方が戻ってきた。

「上がったよー！」

「まだやっていたんですか」

自分達が作った状況に対してなんとという言い草だろうか。

「わ、私はお風呂に入ってくる……ん?? なんかココアの匂いがしないか？」

リゼは人の匂いを嗅ぎ分けることができるらしい。もしかして普通の女子高生にはそういう類のパッシブスキルでも備わっているのだろうか。

「あはは、私の匂いってなに?ー?」

「違う! 飲む方のだよ!」

「ふふふ……実はこれを入れてみたんだ！」

どうやら違ったようだ。

相も変わららず素晴らしいツツコミを入れるリゼに、ココアが見せた物は入浴剤の袋だった。

表には大きな文字でココアと書かれており、隅の方に飲用不可の注意書きがある。

「これでリゼちゃんも甘い匂いに……」

「余計な事を……」

リゼは怪訝そうな表情でチノの部屋を後にした。

しかしタクトは見逃さなかった。彼女が部屋を出る時に少し口角が上がっていたことを。

「上がったぞー」

しばらくしてリゼは満足そうな表情で戻ってきた。どうやらココア風呂の評価は上々らしい。

タクトはリゼが部屋に入ってきたことを確認してから風呂に入ろうと立ち上がった。

「次は俺だが、着替えは……」

「私が父に言って用意してもらおうのでタクトさんは先にお風呂に入ってください」

「そうか。ありがとう」

「ごゆっくり」

着替えの問題も解決し、タクトは足取りも軽く風呂場に向かった。

無事に入浴を済ませたタクトは用意された着替えに袖を通し、チノの部屋に戻った。

「あ！ タクト君おかえり！」

「お風呂どうでしたか??」

「ああ、いい湯だった」

「それは良かったです。タクトさんもコーヒー飲みますか??」

「じゃあ一杯もらおう」

彼女達はそれぞれコーヒーカップを持ち、一つの小さなテーブルを囲んでいた。

シャロはコーヒーカップの代わりにぬいぐるみを抱いている。ここで彼女にコー

ヒーを与えようものなら彼女が抱えるのはぬいぐるみではなく、ここにいる誰かになるだろう。

「タクト君も来たところで、皆の心に秘めてることを聞きたいんだけど……」

タクトがチノからコーヒーカップを受け取り、彼女の隣に腰を下ろしたところで千夜が静かに言い出した。

その瞳はまるで恋をする乙女のようにだ。一般的なパターンならば、ここで想い人を暴

露していく流れになるだろう。

そのことを考えてか、シヤロはなにやらそわそわし始めた。

そして、頬に手を当てて千夜が言ったのは、

「……とびつきりの怪談を教えてください?」

怪談。

つまりみんなで怖い話をして盛り上がる、ということだ。

紛らわしい言い方をする千夜に、シヤロは睨みを飛ばしている。

「怪談ならうちのお店にありますよ」

意外にも百物語の一番手はチノだった。それもまさかのラビットハウス原産の怪談

だ。

タクトは興味ありという表情でチノの話に耳を傾けた。

「……リゼさんとココアさんはここで働いてますけど、落ち着いて聞いてください」

声のトーンを落として話し始めるチノに、ココアとリゼはぐくりと生唾を飲み込む。

シヤロに至っては両手で耳をふさいでいる。

「この店は夜になると——」

丁度その時、雷鳴が轟き四人の少女は悲鳴をあげた。

チノは続ける。

「……目撃情報はたくさんあります……父も私も目撃しました」
「そ、それは……」

一呼吸おいてチノは言い放った。

「暗闇に光る目……小さく、ふわふわな……白い物体……!」

チノの言う謎の物体にタクトは心当たりがあつた。

白くてモフモフであり、時々ダンディな声で喋るそれはとある喫茶店のマスコットウサギである。

しかし、一生懸命怖がらせようとするチノにそれを伝えることはタクトにはできなかった。

可愛い正義である。

「……じゃあ次は私ね」

千夜はこほんと咳払いをするとポツリと話し始めた。

「これはね、切り裂きラビットって言う実話なんだけど——」

どうやらこの街の雷は空気を読むのがうまいらしい。

これから怪談が始まるうとしたその瞬間、外が一瞬眩く光り、部屋の明かりの一切が消えた。

停電である。

「く、暗いよ……」

「落ち着いてください。こんな時の為に……」

そう言つてチノは蠟燭に火を灯した。蠟燭のぼうつとした灯りがその周囲だけを照らす。

なんと雰囲気のあることだろう。

「盛り上がつてきたわ……！ それじゃあ続きね……昔、とある喫茶店に一匹のウサギがいました……そのウサギの周囲では次々と殺人事件が……！」

「——という訳なの。おしまい」

千夜が話し終える頃にはココアとシヤロはすっかり怯えてしまい、チノも震えながらタクトの腕にしがみついている。リゼも意外にもこの手の話が苦手なのか震えているようだ。

「そろそろいい時間ね。もう寝ましよう?」

「そうだな。という訳で……チノ、俺を解放して欲しいのだが……」

「ま、待つてください。タクトさんもここで寝ませんか?」

その提案にタクトは少し狼狽えた。

流石に複数人の女子と一夜を共にする訳にもいかないだろう。

「お誘いは嬉しいが、既に部屋を用意してもらっているからな」

「じゃあ布団をここに持つてこようよ！」

「そ、そうだな！ 私も手伝うぞ！」

「しかし……」

予想外の援軍である。

それほど千夜の怪談が怖かったのだろうか。

彼女達を落ち着かせて立ち上がろうとすると、チノと別の手がタクトの腕を捕まえた。

「ま、待つて！ お願い！ ここにいて！」

男というものは女子の涙に弱く、それはタクトも例外ではない。

それを知つてか知らずか、シヤロはタクトの腕を掴んで涙目、上目遣いで彼を見る。

タクトはそんな破壊力カンストの攻撃に耐えられるはずもなく、やむなく首を縦に振った。

「あらあら。タクト君、モテモテね」

この状況を作り出した本人が何を言っているのだろうか。

その後タクトは用意してもらつた部屋から布団を持ち出し、チノの部屋の端つこの方に並べた。

ココア達からもっと近くに来るようにせがまれたが、タクトはそこだけは頑なに断つた。

そして夜も更け皆も寝静まった頃、タクトは体を揺すられる感覚で目を覚ました。気配を感じる方に顔を向けると枕元に金髪のお嬢様がいた。

「……………どうした……………シャロ。暗殺か……………?」

「違うわよ!」

こんな夜更けでも小声でつつこむのは流石と言ったところだろう。

しかし、暗殺じゃないのなら彼女はなぜタクトの枕元に立っているのだろうか。

「その……………トイレについてきて欲しくて……………」

タクトは無言で頷いて布団から体を起こした。

「じゃあ行くか……………」

「ありがとう……………」

蠟燭を片手に持ったタクトを先頭に、二人は部屋を出た。

暗い廊下を蠟燭の灯りのみを頼りに進む。雨風によつてがたがたと音を立てる窓ガラス。

ラス。

まるでホラーゲームのワンシーンだ、と考えながらタクトが歩いているとなにやら遠くの方に人影が見えた。蹲っているようだ。

「ひっ……」

怯えるシャロを後ろに庇いつつ、その人影に近づいてみた。

蠟燭の灯りによって徐々にその姿が照らされていく。体育座りの要領で腕を前に組んで座っているその正体は、

「り、リゼ先輩?!」

リゼだった。

彼女の足元を見てみると火が消えた蠟燭が置かれていた。

「ろ、蠟燭の火が消えて動けなくなった……訳じゃないぞ……」

体と声を震わせながら言われてもなんの説得力も無い、とタクトは小さく笑った。

「一緒に行きましょう……」

「……そ、そうだな」

シャロはタクトの陰からリゼを立ち上がらせようと手を差し出した。

するとこの街の雷はやはり意思があるようだ。

リゼがシャロの手を握った丁度その瞬間、青白い光と凄まじい音が辺りを包んだ。

「キヤー!!」

それに驚いたリゼとシャロが悲鳴をあげて互いに抱き合おうとすれば、彼女達の間には居たタクトがどうなるかは明白だ。

「ぐふっ……」

単体のダメージはそれほどでもないが、それを挟み撃ちで喰らったならば話は別である。

前後から回避不能のタックルを受け、タクトはよろめいた。

「あ！ す、すまない！」

「ご、ごめんなさい！」

「い、いや、大丈夫だ……」

腹と腰にそこそこのダメージを感じつつタクトは一つの真実を改めて確信した。

「やはり暗殺か……」

「違うから！」

翌朝、タクトはいつもの癖で早めに目覚めた。体を起こし、寝ぼけ眼で辺りを見回してみるとチノも起きていたようで目が合う。

「おはようございませす。タクトさん」

「おはよう、チノ」

タクトは伸びを一つして布団から出る。実に気持ちのいい朝だ。外の音に耳を傾けてみれば、昨晚の雷雨の代わりに雀の鳴き声が聞こえてくる。

チノが窓のカーテンを開けると、眩しいほどの朝日が射し込んできた。

「……おはよう、チノちゃん、タクト君」

「……おはよ」

朝日に当てられた千夜とシャロも目覚める。シャロはまだ眠そうだ。

「シャロちゃん、寝言で今日は特売なの——」

「そそ、そんなこと言ってもここで言うな！」

どうやら目が覚めたらしい。

周りの騒がしきでリゼも目が覚めたようだ。彼女は目を擦りながら起き上がり、奇妙なものを見たような顔をする。

「……」

彼女の視線を追ってみると、部屋の扉の前でミステリアスな姿勢で寝ているココアが居た。

「芸術的だな」

「芸術……?!？」

匍匐前進の夢でも見ているのだろうか。

五体投地の一コマのような体勢の彼女の気持ち良さそうな寝顔を見ると、不思議とこちらまで安らかな気持ちになる。

かくして、タクトの初めてのお泊まり会は無事に終えることが出来たのだった。

第十一話 野菜は無くとも背は伸びる

ある日の朝、タクトはココアとチノと共に登校していた。と言うのも、以前不貞腐れたココアの機嫌を取る為に彼女達と共に登校したタクトだったが、彼の家とラビットハウスの位置関係上、その後も度々一緒になることがあったのだ。

そうして日を重ねるうちにいつの間にか彼女達と登校時間を合わせることにタクトの習慣となり、この日も取り留めのない会話をしながら三人で街を歩いていた。

「タクトさんは嫌いな物とありますか？」

「嫌いな物??？」

チノからの、まるで転校生に対するような質問にタクトは首を傾げる。

「はい。苦手でもどうしても食べられない物とかです」

「特には無いが……強いて言うなら一部のチーズは好んで食べないな」

「チーズですか？」

「ああ。チーズケーキとか粉チーズみたいなのなら気にならないんだが、どうも酸味のある奴が苦手だな……」

食べられない訳では無いんだが、と頬を掻きながらタクトは笑った。

「チノとココアはあるのか？」

「わ、私はありませんよ?……?」

「あはは、チノちゃん嘘は良くないよ?」

ココアに笑われて、チノはムツとした表情をする。

「ココアさんこそ今朝もトマトジュース一口も飲んでなかったじゃないですか」

「そう言うチノちゃんだってセロリ残してたよね。好き嫌いしないで食べないと大きくなれないよ?」

団栗の背比べ、この街に則って言えばウサギの背比べだろうか。

どちらも大差ない言い合いを繰り返す二人をタクトは微笑ましそうに眺める。

「心配は要りません。ココアさんと同じ年の頃には私の方が高くなってます」

何を根拠にそう言うのだろうか。

しかし、ココアより背が高くなったチノ。おとなしい立ち振る舞いと気が利いた接客、そこから溢れるのは姉的オーラ。

想像してみればどちらが年上かわかったものではない、とタクトは小さく笑った。

「あ、タクトさん笑いましたね! 私の本気ですよ!」

勘違いされてしまった。

タクトは、子供扱いされた、と頬を膨らませるチノをはなだめる。

「大丈夫だ。子供の成長は凄いから、すぐに大きくなる」
「もういいです！」

拗ねてそっぽを向いてしまった。

一体何が良くなかったのだろうか、とタクトは困ったように苦笑いする。

「でも、チノちゃんって毎日頭にティップー乗せてるよね。それで身長伸びるのかな?」

ココアの、核心に迫るような発言に対してチノは黙り込んでしまった。

そんな彼女を見ながらタクトは思うのだった。今度牛乳でも買ってあげよう、と。

下校の時間になりタクトは千夜達に別れを告げ、足早に学校を出た。

各教科担任から何ヶ月か前の春休みの宿題について聞かれることもあったが、桜の木は既に花びらが緑葉に変わり、日差しも強い。夏はもう目前である。

そんなちりちりと暑いこの街を彼が早足に行くのには理由がある。この日は彼の行きつけのスーパーで特売があるのだ。

彼は学費は父親に払ってもらっていると言ってもその他の生活費は自分のバイト代で賄っている為、こういう類の催しには積極的に参加しているのだ。

店に入ると、冷房の効いた空気がタクトの火照った体を気持ち良く冷やしていく。

店内を見回してみると、見覚えのある金髪を発見した。彼女は指を折りながら何かを

呟いていた。

「タイムセールまで後十分だから、それまでにモヤシと……魚も割引だったわね……」
なにやら真剣そうだったのでタクトはとりあえずそっとしておくことにした。

タクトはニンジンやタマネギなど、割引かれている野菜や肉、牛乳などを買い物カゴに放り込んでいく。

そして特売が始まればその場所に急行し、お一人様二本までのキャノーラ油をカゴに入れ、会計を済ませた。

合計一五〇〇円未満の商品を袋に詰め込み、店を出ようとしたところでタクトはあるものを発見した。

腕を天井に向かって伸ばし、一心不乱に垂直跳びを繰り返す金髪の少女と中学校の制服を身にまとった少女。

タクトはその背後に回り込んで知人二人の奇行を観察する。

果たしてこれは何の召喚儀式なのだろうか。

タクトがその光景を興味津々に眺めていると、新たな人物が登場した。

自称普通の女子高生の彼女は二人の伸ばしている手の先にある商品を掴むと、それを他称お嬢様の少女に手渡した。

「はい」

「り、リゼ先輩……とタクト!?!」

「い、いつの間に居たんですか!?!」

驚いた表情を見せる二人にタクトは軽く手を上げて応える。

「買いた物を済ませて出ようとしたら二人が何かを召喚しようとしてたから」

「あれ?! サバイバルを想定した訓練じゃなかったのか?!」

考えてみればそうかもしれない。

納得したように頷くタクトを、チノはジト目で見つめる。

「どちらも違います。ただの買物です……見たのなら取ってくださいよ」

なるほど、言われてみれば商品を取ろうとして飛び跳ねていたようにも思える。

タクトは今朝のチノ達との会話を思い出す。確かに身長の違いで私生活に影響が出

るのは良くない。

シャツもさぞかし身長を伸ばしたいのだろう、と彼女の方に視線をやるタクトの心配

とは裏腹になにやら嬉しそうな表情をしていた。

「身長小さくてよかった……」

どうやら考え方は人それぞれようだ。

なんとも幸せそうな顔でリゼから受け取ったスッポン汁の素を頬ずりするシャツを

見て、タクトは小さく笑った。

そつなく買い物物を済ませたタクトは生ものを冷蔵庫に入れる為一度家に帰った。そしてタクトは無事に特売に間に合ったこともあり、上機嫌で再び家を出た。

コーヒーを飲みに行くのだ。

タクトは以前まではコーヒーなど、その辺の自販機などで売っている缶の物で十分だと思っていた。しかし、ある日なんとなく訪れた喫茶店で飲んだそれは、彼の世界観をガラリと変えたのだ。

自販機のそれと比べると圧倒的なまでに苦味、酸味、コクの調和が取れており、一口啜れば豆本来の豊かさを感じる事ができる。

それ以前に一度でもその香りを鼻腔に通したならば、もはやそれを口に含まずには居られない。

簡単に言えばタクトは魅了されてしまったのだ。初めてその店を訪れた時、白い髭が特徴的なマスターが入れる、本物のコーヒーに。

彼が心を踊らせてその店——ラビットハウスの扉を開けば、コーヒー豆の良い香りと静かな雰囲気ータクトを出迎え——

「いらつしやあせえ!!」

「あ、タクト君……」

「タクトさん……」

どうやらラビットハウスは喫茶店から八百屋にリニューアルしてしまつたらしい。やはり客が少なすぎたのだろうか。

なるほど、扱う商品をコーヒーから野菜にすれば確かに喫茶店の競争率が高いこの地域ではそれなりの集客が臨めるだろう。

しかし、タクトはスーパーで既に安めの野菜を手に入れているので八百屋に用はない。

彼はお邪魔しました、と笑顔でラビットハウスを後にした。

しかし、どうしたものか。彼は今、カフェインを欲しているのだ。

抹茶でもカフェインは補えるのだろうか、とタクトが甘兎庵に向かつて歩き出そうとする。と八百屋の扉が勢いよく開けられた。

「ま、待つてください！ 違うんです！」

「そうだタクト！ 誤解だ！ 誤解なんだ！」

「タクト君待つて！ リゼ殿がご乱心してただけなの！」

「誰が殿だ！」

ラビットハウスの従業員三人は、店を立ち去ろうとするタクトの服を掴む。

服が伸びてしまうのでその手を離していただきたい。

タクトは改めて店内に入り、いつものコーヒーを飲みながら話を聞く。

「なるほど。つまりチノは大きくなりたいたい」と

「はい。それでココアさんと一緒に好き嫌いを克服しようとしたのですが……」

彼女はきまりが悪そうに視線をずらした。

その先を追ってみると、一口だけ齧られたセロリパンと、ほんの少しだけ飲まれた跡のあるトマトジュースの入ったコップが目に入った。

「ダメだったのか」

「はい……」

そこまでの事情は理解できた。しかし、それが先程の出来事とどう関係するのだろうか。

それについてタクトが質問すると、リゼが照れたように言う。

「いやあ、大声を出せば存在感が出ると思ってた……」

なるほど、せめて錯覚で大きくなったと見せようということだろうか。

決して客が少ない喫茶店が八百屋に化けた訳では無いということに、タクトはひとまず胸をなで下ろした。

それはさておき、錯覚では根本的な解決にはならない上にチノには合わないだろう。身長ではなくリゼに対する猜疑心が大きくなりそうである。

「無理して嫌いな物を食べなくてもいいんじゃないか?」

「そ、それではダメなんです! たくさん食べて、たくさん寝て、最低でもココアさんよりは大きくなりたいです!」

仮な姉妹関係だとしても、姉より大きくなりたいたいと思うのは妹の性というものなのだろうか。

「チノちゃん偉いね! よーし、私もお姉ちゃんとして頑張つてトマトジュースを克服するよ!」

姉も姉で威厳というものを保ちたいのだろう。

理由はどうであれ、自ら好き嫌いを克服しようとするのは素晴らしいことである。タクトは感心するように二人を見つめる。

「でも、もしチノがココアより大きくなったらココアはモフモフする側じゃなくてされる側になるな」

ココアは、リゼの言ったありえるかもしれない未来に目を輝かせながらチノに抱きついた。

「それでもいいかも! じゃあ今のうちにモフモフを堪能して——」

「私は抱きついたりしないので大丈夫です」

チノの無慈悲な突き放しにココアは膝から崩れ落ちた。しかし、すぐに立ち上がった

チノに詰め寄る。

「チノちゃんは大きくなっちゃダメ！ 食べちゃダメ！ 寝ちゃダメえ！」

人間をやめろということだろうか。

必死の形相でチノの頭を押し込むココアを、リゼは呆れ顔でチノから引き剥がす。

「何無茶言ってるんだ……」

「だって……」

涙目でチノから離れるココアに、タクトは笑って言った。

「誰だっていつかは大きくなるものだろう。それはチノだって例外じゃない」

「それはそうだけど……」

ココアは口ごもってチノを見る。

「それに、妹の成長を見守ってやるのも姉の務めなんじゃないか？」

「……」

姉という言葉にココアはびっくりと反応する。そして、しばらく何かを考えるように黙り込んだ。

「……そうだよ。私だったらわがままだったよね……ごめんね?? チノちゃん」

「いえ、私は気にしてないので大丈夫ですよ」

チノに向かって頭を下げるココアに、チノは笑顔で頭を上げるように言う。

喧嘩、と言うほどではなかったが、無事に和解できたらしい。

その様子をコーヒーを啜りながら見守るタクトを、リゼがニヤニヤしながら肘で小突く。

「意外といいこと言うじゃないか。誰かからの受け売りか??」

「ふっ……ただの経験則だ」

「経験則??」

「なんでもない」

不思議そうに首を傾げるリゼを笑顔であしらい、タクトはコーヒーカップに再度口をつけた。

コーヒーの液面に反射する彼の瞳は、どことなく懐かしそうで、哀しそうなものだった。

第十二話 占いは水玉模様

占いとは様々な事象を観察し、ある対象の運勢や未来、性質などを予測する行為のことを指す。

その観察する事象というのは国や宗教、時代などによつて異なるが、人の先を視るという点では共通していると言えるよう。

ただ、当たるも八卦当たらぬも八卦、という文句がある通り、過信は禁物である。あくまでも占いは占いなのだ。

さてそんな占いだが、この木組みと石畳の街の一角に建つラビットハウスという喫茶店にも、客へのサービスとして行っているものがある。

「カフェ・ド・マンシー?？」

ココアは初めて聞く言葉らしく、カウンターでコーヒーを啜るタクトの隣で首を傾げた。

「はい。コーヒーを飲み干した時にカップの底にできるコーヒーの模様を見て運勢を占うんです。これがカフェ・ド・マンシー。いわゆるコーヒー占いのことです」

「へえー！ コーヒーで占いつてできるんだね！」

チノの説明に、ココアは興味津々といった様子で目を輝かせる。

「チノの占いはよく当たるって評判なんだよ」

「わ、私はカプチーノしか当たりませんよ」

リゼに褒められたチノは恥ずかしそうに、持っているトレイで口元を隠す。

「それでも充分凄いや！　ねえねえ！　私もやりたい！」

ついに気持ちを抑えられなくなったらしいココアの言により、リゼ、チノ、ティツピーはコーヒーを一杯飲むことにしたようだ。

「じゃあまずはチノちゃんね……空からウサギが降ってくる模様が見えるよ！」

「そうは見えませんが、本当だったら素敵ですね」

チノに続いてココアはリゼ、ティツピーのカップを覗いていく。

「リゼちゃんはコインがたくさん見えるよ！　金運がアップするのかな？」

「おお！　欲しかった物が買えるかな?？」

「ティツピーはね……セクシーな格好でみんなの視線を釘付けだよ！」

ティツピーに関しては既に客から、主に女性からは人気があるように思える。

などとタクトが考えていると、ココア達の視線は彼の方に向いていた。

「次はタクト君だよ！　カップを見せて！」

屈託の無い笑顔で彼に手を差し伸べるココアに対して、タクトは首を横に振ることで

応えた。

「俺は遠慮しておく。占いは、特にコーヒー占いは俺には合わない……」

どこか遠い目で虚空を見つめるタクトに、困惑気味の三人は彼に聞こえない声で会話を始めた。

「た、タクト君って前に何かあったの?」

「昔、おじいちゃんのカフェ・ド・マンシーは当たりすぎて怖いって有名だったんですけど、前にタクトさんが占ってもらったんです……」

「それでどうなったんだ……?」

「その翌日に凄くボロボロな格好をしたタクトさんがやって来て、いきなり人生に対して呪詛を吐き始めたんです……何があったかは聞かなかった……いえ、聞けませんでしたが、あの時のタクトさんの目はどんなブラックコーヒーよりも黒かったことだけははっきりと覚えています……」

「……」

「……」

話を聞き終えたりゼとココアは、枯れきった笑みを浮かべるタクトの肩にぽんと手を置いた。

「……なんか……ごめんね……?」

「……ま、まあ、生きていければ色々あるからさ」

今はその優しさが彼の心をより決る。

「大丈夫……俺は大丈夫だ……大丈夫なんだ……」

タクトは今にも死にそうな声でそう呟いたが、その目に光は宿っていないかった。

なんとも近づきがたいその様子にココア達は、彼に占いの話を振るのはやめておこうと頷き合うのだった。

その後、ティップーによるコーヒー占いが行われていたようだったが、タクトには何も聞こえていなかったようだ。

タクトが過去のトラウマのフラッシュバックをなんとか抑え込むことに成功した翌日。

彼は占いの誘いを断ったおかげか、学校を終えるまで何事も無かった。それどころか、この日の彼の運は驚くほど良かった。

ある時は学校の中庭で五〇〇円硬貨を拾い、またある時は先生から食べきれない、と購入のウサギ型あんパンをもらい、そしてまたある時は女生徒のパンチラを拝むことに成功。

最後のは遠目だったため誰かはわからなかったが、水玉模様だったということにはつ

きりとわかった。

そして帰り道、タクトは千夜とココアと共に帰っていたが、なにやらココアのテンションが低い。

彼女の腕に抱かれている甘兎庵の看板ウサギが関係しているのだろうか。

「はあ……今日はなんかついてない気がするよ……」

聞くところによると、カラスに攫われたあんこが空から降ってきたり、スカートが捲れてしまったりして昼食を食べ損ねたらしい。

秀吉も驚きな兵糧攻めである。

「そんな日もあるわよ」

うなだれながら歩くココアを千夜が励ます。

なんとも哀れでなんとかしてやりたいが、タクトにはどうすることもできない。

彼が困ったようにしてふと空を見上げてみると、ベランダの植物にジウウ口で水やりをしている女性が見えた。

このまま歩けばその丁度真下をココアが通ることになるが、今日の彼女の運勢を考えると、ろくなことにならないのは火を見るより明らかである。

「ちよつと止まるか」

タクトはココアの前に手を出して、彼女の進行を止めた。

「……?? どうしたの——!?!」

程なくして彼女の目の前には中身の入ったジョウロが落ちてきた。地面に水が叩きつけられ、空になったジョウロがころがる音が響く。

「ああ! ごめんなさい! 手が滑ってジョウロが!」

タクトの制止によりココアと、その腕に抱かれているあんこは濡れずに済んだ。

間一髪である。

「びつくりした……ありがとうタクト君!」

「どっちも濡れずに済んでよかったな」

「うん!」

笑顔で自身とあんこの無事を喜ぶココアに、タクトは小さく笑った。

「ありがとう二人共。あんこのお礼と言ってはなんだけど、シャロちゃんの喫茶店に寄っていかない?? ご馳走するわ」

「いいの? やった!」

千夜のありがたい申し出にココアは喜んで頷くが、タクトは首を横に振った。

「気持ちだけでもらっておこう。俺の分はココアに譲ってやってほしい」

「私はいいけど、どうして??」

「せめてもの償い、かな」

「??」

疑問符を浮かべる二人を横目に、タクトは思い出ししていたのだ。

昼の時間に見かけた水玉を。そして、ココアが昼食を食べ損ねる原因になった出来事を。

どちらも同じ時間帯だったということは、皆まで言うまい。

ということとで三人はフルール・ド・ラパンにやって来たのだが。

「なな、なんてもの連れてきてるのよお!! やめて! こっち来ないで!」

どういふことだろうか、シヤロに入店を拒否されてしまった。それも、明らかにある一人の方を見て。

「うう……私ってそんなに不幸オーラ出てるんだ……」

チノの如くあんこを頭に乘せたココアは落ち込んでしまった。

若干涙目である。

「シヤロちゃんって小さい頃にあんこによく齧られて、ちよつと恐怖症なのよ」

「どうやらココアではなく、彼女の頭の上の黒ウサギについて言っていたようだ。

「なんだ。よかつたなココア」

「うん」

「よくないわよ！　つて——きやあ！」

涙目で抗議するシャロの声に反応したのか、あんこは彼女をめがけて飛び込む。

「あああああ……！」

顔面に黒ウサギを貼り付けたシャロはパニックになりながらその場でくるくると回りだした。

「ちよつとどころじやないよ?!」

彼女には気の毒だが、これはなかなか面白い状況である。

「いやあああ!!　誰かとつてよおおお?!」

「わかった」

シャロの懇願に、タクトはカバンから携帯電話を取り出し、写真機能を起動する。

「何かパシャパシャ音がする?!」

「撮ったぞ」

「違うわよ!!　取つて!!　コイツを!!　私から離して!!」

タクトは、半狂乱しながらもツツコミを入れてくれるとは恐れ入った、と頷きつつ携帯電話をしまい、シャロの顔面からあんこを引き剥がした。

彼女はツツコミと精神を保つのに随分と体力を使ったようで肩で息をしている。

「はあ……はあ……」

「お疲れ」

「おふぎけも大概にしなさいよ！」

シヤロの怒鳴り声に、タクトは流石にやりすぎたと軽く謝罪をする。

「タクト君……」

その横では千夜が下を向いて肩を震わせていた。

幼馴染をからかわれたことに腹を立てているのだろうか。

タクトが恐る恐る彼女の方に向き直ると、千夜はタクトの肩を両手でがっしりと掴み、涙目で言った。

「私のネタを取らないで!!」

「そっち?!」

どうやら彼女も同じネタを考えていたようだ。

それは大変申し訳ないことをした、とタクトはカバンから何かを取り出した。

「それはすまなかつた……お詫びにキウイをあげよう」

「毎回なんであるのよ?!」

「野菜じゃないと嫌よ！」

「あんたは何言ってるの?!」

「じゃあキュウリはどうだ」

「野菜もあつた!?!」

「名前が似てるから却下よ!」

「なんで!?!」

「Cucumber」

「英語!?! しかも発音がいい!?!」

「許すわ!」

「あんたはそれでいいの!?!」

「千夜……」

「タクト君……」

千夜とタクトは互いに真剣な表情で向き合い、握手をした。

二人はフルマラソンを完走しきったかのような、全てやりきったという表情をしていった。

その場合は、例えば明日地球に巨大隕石が衝突したとしてもなんの悔いも無いであろう、とても清々しい雰囲気に含まれている。

「あんた達……いい加減にしなさいよ!!」

シャロの全身全霊を込めたツツコミが店内を震撼させた。

最後までご苦労様である。

その後どうにか席に着き、それぞれ欲しい物を注文した。

「お待ちどうさま……はぁ……」

しばらくして、なにやらひどく疲れているシャロが商品を運んできた。

おそらく仕事の疲れが溜まっているのだろう。

「わーい！ 美味しそう！」

ココアが頼んだのはこの店特製のロールケーキだ。

たつぷりなクリームがふわふわと柔らかそうな生地に包まれ、その真ん中にはチョコでウサギが象られている。見た目も可愛らしく、とても美味しそうである。

「今日はコイツが来るなんてついてない……」

あんこにロツプイヤーを齧られ、心底不幸そうな顔をするシャロ。

それにつられて笑顔でロールケーキを頬張っていたココアの顔も暗くなっていく。

「ついて……ない……」

どうやら先程の漫才で忘れていた、この日の出来事を思い出してしまったようだ。

「せっかくココアちゃんが忘れていたのに、ついてない、なんて言っちゃダメ！」

「ええ……」

なんとも理不尽な物言いに、シャロは本日何度目かのため息をつくことになった。彼女には強く生きてもらいたいものである。

今度コーヒーでも奢ってあげよう、とタクトは決意した。

そして支払い時、タクトだけ個別に会計を済まし、千夜の番である。

「はい、おつり」

千夜は、おつりを渡そうとシャロから差し出された手を掴んだ。

「な、何よ?!!」

「シャロちゃんの手相も見てあげる」

手相占いをしようとしているらしい。

タクトは占いに関連する単語に一瞬身構えたが、対象が自分でないとわかると胸をなで下ろした。

「えつとね……片想い中で、しかも相手に全く通じない相があるわ。障害だらけの相ね……」

不吉な占い結果にシャロの表情は曇り、同時に彼女の小銭を握っている手が震える。

これまた嫌な予感しかない。

「後、金運が——」

「これ以上言うなバカ!!」

シャロの手から離れた小銭は、一直線に千夜を狙うが、彼女は運が良いのかはたまた悪いのかクシャミを一つ。

するとどうだろうか、的を失った小銭はその後ろに立っていたココアの額を的確に狙い撃った。

「あうー！」

ココアに当たった小銭は宙を舞い、やがて地面に落ち、景気のいい音を立てる。その音は虚しく、まるで今の彼女の心境を代弁したものであるかのようにだった。

フルールを出て千夜と別れ、現在ココアとタクトがいる場所はラビットハウスである。

「リゼちゃん！ チノちゃん！ 今日は私の占い当たってた？！」

ココアの唐突な問いかけに、リゼとチノは顔を見合わせる。

「いや、別に何も無かったけど?！」

「そっか……私は、空からあんこが降ってきたり、スカートが捲れたり、シャロちゃんにお金ぶつけられたりして大変だったよ……占い勝負はティツピーの勝ちだね……つてどうしたの?！」

えへへ、と笑うココアを目の前にタクトは、ココアの占いについて思い出していた。空からウサギ、コイン、セクシーな格好、これは偶然なのだろうか。

「ココア……今後占いはやめた方がいいぞ?……自分の為に」

「なんで?!?!」

リゼの総括に反論は無かった。

しかし占いもたまにはいいものだ、とタクトは拾った五〇〇円硬貨を見ながらいつものコーヒーを啜るのだった。

第十三話 運命と図書館はこの街に

タクトは焦燥した。必ず、かの死屍累々の点を除かなければならぬと決意した。タクトには英語がわからぬ。タクトは、街の学生である。コーヒーを飲み、力仕事をこなして暮らしてきた。けれども冗談と、自身の危機に対しては、人一倍に敏感だった。

彼は勉強がそれほど好きではない。故に最少の学習で、宿題もろくにやってこなかった。その中でも英語だけは本能的に拒絶している。できないからやらない、やらないからできないという負のサイクルが完成しているのだ。

化学と物理、数学、国語はそこそな出来栄だがそれ以外はあまり、いや、かなり絶望的である。特に英語は常に赤点すれすれである。何度か教科担任の採点ミスにより命拾いをしているが、今回の定期考査では追試験を確実に受けることになる、と彼の第六感が告げているのだ。

しかしいざ勉強をしてみれば、これがどうしたことか。机に向かい、ペンを握って三分も経てばことごとく彼のやる気は雲散し、気分転換にゲームやら小説やらに手を出せば今度は時間が霧消する。

家以外の場所で勉強すればモチベーションも違うのではないか。そう思った彼は、あ

る日の午後、街の図書館にやって来た。

この街の西歐風な外観に溶け込むような佇まいのその建物は、外から見た通り、内部も結構広いものである。例えるなら、某魔法の世界に存在する図書館のようだ。

タクトは辺りを見回して、窓際の眺めが良さそうな場所に腰を下ろした。人も少なく、とても静かで心地よい雰囲気である。

この環境なら集中して試験勉強に励めるだろう。そう思いながらタクトは勉強道具を取り出し、テーブルの上に広げる。

数分後。タクトは夢の世界に旅立った。

決して試験勉強をやらなかった訳ではない。タクトは英語の問題を三問程は解いた。ゼロではないのだ。

更に言い訳をするならば、図書館は静か過ぎたのだ。それと相まって、窓から差し込む程よい日光が彼を安眠へと誘った。ただそれだけである。

そんな、テーブルに突っ伏して穏やかな寝息を立てる彼の体を揺らす者が居た。

タクトは寝息が乱れる感覚で目を覚まし、寝ぼけ眼で彼を起こした人物の方に顔を向ける。

「おはようタクト君！」

「……ああ」

見ると彼の隣の席にはココアが笑顔で座っていた。その更に隣には千夜、テーブルを挟んで向かいの席にはチノとシャロが居た。

いつの間にか包囲されてしまったようだ。

タクトは体を起こして伸びを一つする。

「……いつから居た？」

「私達はついさつき来たばかりだよ。テストも近いから皆で勉強しようと思ってたんだ。タクト君は??」

「俺も試験勉強をする為にここに来た」

「思いつきり寝てたじゃない……」

シャロは呆れたように半目でタクトを見る。

「シャロ。この世には睡眠学習というものがあつてだな……」

「……要するに居眠りね」

なぜバレたし。

もしかして彼女は読心術でも持っているのだろうか。

「ところでチノもテスト勉強か?」

チノの手元を見てみると、ノートと教科書らしいものが握られている。

「はい。私も読みたい本を探すついでに、皆さんと勉強をしようかと」

「読みたい本?? 内容は??」

「小さい頃に読んでいた本なのでタイトルは思い出せないのですが……正義のヒーローになりたかったウサギが悪いウサギを懲らしめるんですが、関係ないウサギまで巻き込んでしまつて大変なことになるんです! 更に主人公を追うウサギまで現れて……」

「どうやら彼女の探し物の中身自体は彼女自身がぼつちり記憶しているらしい。」

「それでもなお、もう一度読みたいということは相当気に入っているのだろう。」

「見つかるといいな」

「はい!」

タクトがチノに微笑みかけると、彼女もそれに笑顔で応える。実に可愛らしい。

「勉強の方はシャロちゃんに教えてもらつたら?」

「シャロさんにですか?」

「ええ。特待生で学費が免除されているくらい優秀なの」

リゼやシャロが通っている高校はお嬢様が多いことで有名であるくらいには学費が高い。しかし入試で一定以上の得点を取れば学費が免除されるという制度がある為、一般的な家庭でも入学は可能なのだ。と言つても、そのハードルが高いというのは言うまでもあるまい。

「美人で頭もいいなんて……」

「非の打ち所が無いです」

「眩しいー!」

ココアとチノはわざとらしく両手で目を覆う。

二人の大げさな反応にシャロは困ったような顔をする。

「そ、そんな……」

「おまけにお嬢様だなんて完璧すぎるわ。マブシー」

「……」

シャロがお嬢様かどうかはさておき、おそらく彼女は学校の対偶を受けているのだろう。それなら彼女が勉強できるといえるのは間違いないさそうだ。

「さて、そろそろ勉強を再開するか」

タクトは先程まで枕代わりになっていた、学校で配られた英語の問題集を開く。

まだ三問しか解けていない。

「そうね。私達も始めましょう?! じゃあ、今日はよろしくねココアちゃん」

「うん!」

はて、聞き間違いだろうか。

今の千夜のニュアンスだとココアが千夜に学習の手ほどきをするということになる。

シャロも随分と不思議そうな表情だ。

「え?? 千夜が教えてあげるんじゃないの??」

「違う違う。私が教えてもらうの」

「嘘でしょ!?!」

シヤロの問いに、千夜は笑って手を横に振る。

どうやら聞き間違いではなかったようだ。

「私、数学と物理が得意なんだ!」

更に理数系教科が得意なようだ。

そう言えば、彼女は無自覚にも暗算が早いという特技を持っていた。

それなら納得できる、とタクトは頷いた。

「それだったらココアがチノちゃんに教えられるんじゃない??」

シヤロの言うことも尤もである。

しかしココアはバツが悪そうに、持っているノートで口元を隠す。

「私、総合順位で言えば平均くらいだし……」

「そんなに足を引っ張っている教科があるの??」

「これ……」

そう言っただけでココアが取り出したのは前回の定期考査のものだと思われる解答用紙だった。

見れば英語、国語、歴史の得点が芳しくない。

「文系か……俺と同じだな」

「タクト君も文系苦手なの?」

「ああ。国語はそこそこ取れるんだが、英語がな……」

一応赤点ではないんだが、とタクトは苦笑いをする。

「ココアさんは教え方がアレなので頼りになりません」

「アレ!?!」

それはなんとなく想像できる。

ぎゅつとしてドカーン的な、感覚に訴えるタイプの説明をするのであろう。

なるほど、確かにそれだと常人には理解し難いものがある、とタクトは頷いた。

「そう?なの? わかりやすいのに」

千夜には好評のようだ。

「千夜さんはきつと波長が合うんです」

「私達仲良しだもんねー!」

「ねー!」

チノの推測はおそらく正しい。ココアと千夜は互いに手を取り合い、自分達の仲を示す。

「放っておいて勉強しましよ?? チノちゃん」

「はっ」

勉強を始めて三十分、タクトのやる気はとうに失われている。それでも数問は進んだが既に彼の頭は疲弊しきっており、先程から同じ問題文をじつと見つめるだけで解こうとしていない。

本能的にこれ以上は無理だと判断しているのだ。

彼は一度ペンを置き、同じテーブルで勉強を頑張る友人達に目を向けてみる。

「この問題は、さっきの答えをこれに当てはめてみて」

シャロは時折チノのノートに書き込みながら、懇切丁寧に勉強を教えている。

「あ……シャロさんの教え方、すごくわかりやすいです」

チノも彼女の説明のもと、スムーズに試験勉強を進めることができているようだ。

「よかった。チノちゃんみたいな妹が居たら毎日だって教えるのに」

「え!?!」

シャロの口から出た妹という言葉にココアは反応する。

姉というポジションを取られることを危惧しているのだろうか。

「私もシャロさんみたいな姉が欲しかったです」

「私いらぬ子だああ!!」

続くチノによる無慈悲な追撃に、ココアはあえなく撃沈した。

「図書館では静かに!」

テーブルに突っ伏して泣きわめくのココアをシャロが咎める。

「チノちゃんは将来、私達の学校とシャロちゃんの学校、どっちに行きたい?」

「チノちゃんにはセーラー服が似合うよ!」

千夜のふとした一言にココアは早くも立ち直った。先程までの泣き声はどこに行ったのか。

しかしセーラー服、これはなかなか侮れない。

ゆつたりとした襟元から覗く滑らかな首筋は彼女の長い髪に隠れ、その隙間から僅かに見える鎖骨は、朝靄に包まれながらも日光に当てられ、きらきらと輝く小川を彷彿とさせる。

更に、着用者が屈む姿勢を取れば見える真理がある。ただの布切れと言ってしまうまでものだが、その布切れを隔てた向こう側には無限大の可能性が広がっているのだ。

「ブレザーの方が絶対可愛いわよ!」

ブレザーも捨て難い。

一見形式ばった様子の服装で、セーラー服のようなチラリズムはないものの、自身の

想像を掻き立てるだけの魔性を秘めている。

完全であるが故に不完全であり、己の感性を解放することによって本物となるそれは、ミロのヴィーナスに近しいものを感じさせる。

「私は袴姿がいいと思うの」

「いつの時代よ……」

袴姿。

和服というのはセーラー服やブレザーなどとは形状も異なる。しかし特筆すべき点はそのではない。それ自体が華やかであるのに関わらず、着用者の一挙手一投足全てにおいて、その人本来の美しさ、優雅さ、気品を限界まで引き立ててくれるという特殊性があるのだ。

僅かな所作により着物のはだけた部分から見える肌は、こちらに感動をさえ与える。

「悩むな……」

「どうしてタクトさんが悩むんですか……」

セーラー服、ブレザー、袴、それぞれに違った趣があるのでどれが良いとは一概には言えない。

むむむ、と唸るタクトをチノはジト目で見つめる。

「タクトはとりあえず放っておいて、将来のことを決めるのは確かに難しいわよね」

「将来かあ、私はパン屋さんか、弁護士さんになりたいな」

ココアが弁護士とは、これまた意外すぎる職業である。

「街の国際弁護士ってなんかかつこよくない？」

「何か違和感が……」

街の国際云々は置いといて、弁護士と言えばスーツであるが、これもまた素晴らしい文化である。

ブレザーよりも更に肌にぴつたりと沿う形状は身体のラインを露見させる。そして、スーツと共に着用されることが多いのはタイトスカートである。一般的なスカートに比べると圧倒的に裾が狭く、臀部から太ももにかけてをより強調させる。

そんな魅力たっぷりの服を、ココアが着たならば何が起こるか。

客観的に見ると彼女はとてもスタイルがいい。その胸元に掲げる二つの果実もリゼや千夜ほどではないが、同年代の女子の中では豊満な部類に入るだろう。

「ふむ、これはなかなか……」

このことを踏まえてタクトは想像してみた。将来的にありうる、ビッグバンを。

それぞれの要素が表面に浮き出ているのが実に素晴らしい。

「……タクトが何を想像しているのかなんとなくわかるわ」

「多分ろくなことじゃないですね」

女性陣の氷柱のような視線が彼に突き刺さる。

しかし、こればかりは男の本能なので仕方ないのだ。想像するだけならタダであり、誰にも迷惑はかけまい。

「立派な夢ね、ココアちゃん」

「千夜ちゃんの夢は?」

「私は、自分の力で甘兎をもつと繁盛させるのが夢」

千夜は頬に手を当てながら言う。

「私も、家の仕事を継いで立派なバリスタになりたいです」

千夜もチノもそれぞれの実家の店を繁盛させたいようだ。

家業を継ぐというのも十二分に立派である。今の世の中ではつきりとそう言える若者は少ないのではないだろうか。

「バリスタもかつこいいね! ……決めた! 私、街の国際バリスタ弁護士を目指すよ!」

「街の国際から離れてください……」

正月の福袋並に詰め込まれたココアの夢にタクトは苦笑いをする。

夢が無いよりはマシだが、方向性を定めるのも重要である。

結局タクトの試験勉強は大して捗らなかつた。今は適当な小説を手に取り、それを目を通してゐる。

チノとココアは本を探しに行った。

陽も傾き、館内には暖かい、けれども寂しげな色をした光が差し込む。本棚やテーブルに遮られてできた影が長く伸び、妙に感傷的な気分させる。

「私が千夜達と同じ学校だったらどうなっていたんだらう……」

そんな夕焼けに照らされ、テーブルに伏せているシャロがぼつりとこぼした。

「今の学校、後悔してるの?」

「……せめて……せめてリゼ先輩と同じ学年だったら……」

千夜に力ない声でそう答えるシャロは、もしかしなくても本当に後悔しているのだろうか。

「人は、運命を避けようとしてとつた道で、しばしば運命にであう」

「な、なによ……突然……」

突拍子もないタクトの言葉にシャロは訝しげな表情を浮かべる。

タクトは読んでいる本のページをめくつた。

「この小説によれば西欧の詩人の言葉らしい。仮に今と違つた道を辿つていたら今とは違う運命にであうという格言、だと書いてあるな」

「なにを……」

シヤロが何かを言いかけたが、タクトは気にせず続ける。

「これを俺的に解釈してみたんだが、例えば今の運命でいろんな人と出会って仲を深めたとしても、一方の運命ではそうなるとは限らない、ということだと思うんだが、どう思う??」

「……」

「まあ、俺は運命なんてものは占いほどに信じてはいないが、この言葉は何故か納得できる。不思議なものだな」

タクトは読んでいた小説を閉じ、テーブルに頬杖をついた。

それからしばらく静寂があたりを包み、最初に話し出したのはシヤロだった。

「タクトは……」

「ん??」

「……タクトは今の学校どう思ってるの?」

今の学校をどう思うか。

タクトがこの街にやって来た時、友人はおろか、同年代の知り合いの一人もいなかった。

おまけに彼の通う学校は元女子校で、周りに同性はほとんどいない。物珍しさで彼に

話しかける者はいても、本当に友人と呼べる人物はいなかった。

「どう、か。確かに周りは異性ばかりで、下手に興味の話などもできない。会話についていくことさえ難しい。その上新しい街での生活にも不安があった。正直言って、少し疲れていた」

「趣味……」

シャロは何やら半目でタクトを見つめるが、フルール初来店の時の彼の暴走を思い出しているのだろうか。

タクトは頬杖を解いて目の前でうつ伏せになりながら彼の話を聞くシャロを見て言う。

「だが、少なくとも今は後悔はしていない。これだけははつきりと言えるな」

「……どうして??」

その質問にタクトは小さく笑って答えた。

「あの学校に通っていなかったら俺はこの街にはいなかったからな」

それを聞いてシャロは体を起こし、タクトを見やる。

「この街にはコーヒーが美味しい喫茶店もあるし、街並みも俺好みだ。そして何より……」

タクトは千夜、シャロの順に目をやり、微笑んだ。

「いい友人達に巡り会えた。これのどこに後悔する要素がある??」

その笑顔に当てられた少女二人の頬は夕焼け色に染まっていたが、そのことに彼が気づくことはなかった。

——人は、運命を避けようとしてとった道で、しばしば運命にであう。

過去にこう言った詩人がいたが、別の哲学者は以下のように残したという。

——運命は我らを幸福にも不幸にもしない。ただその種子を我らに提供するだけである。

数日後、とある男子高校生が英語の追試験を受けたらしいが、それもまた彼の運命なのであろう。

第十四話 球が返せても点は取り返せない

「タクト……お前……」

「タクトさん……」

夕焼けが美しい街のとある公園にて、タクトは立ち尽くしていた。

彼の目の前には喫茶店ラビットハウスの新住人ココア、甘兎庵の看板娘千夜。二人共ジャージ姿で地に伏せており、側にはバレーボールが一つ無造作に転がっている。

呆然とした表情でいる彼を疑うような目付きで見つめているのは、同じくジャージ姿のりぜとチノである。

「待て、俺が来た時には既にこの有様だった。だからその手持ちの携帯をしまつてほしい」

「犯人はみんなそう言うんだ。観念しろ」

タクトは、今まさに彼を豚箱送りにせんとするりぜに必死の弁明をするも、その努力もむなしく散りそうである。

こんなところで自分の人生は終わってしまうのか。将来が潰えてしまうのか。刑務所の飯は美味しいのだろうか。

一筋の汗がタクトの額をつたう。それと同時に、この危機的状況を如何に回避するかという思考が彼の脳内を支配する。

彼は目を閉じ暫し考えると、一度だけ大きく深呼吸をし、片膝をつき、ゆっくりと目を開いた。

「……ああ！ 麗しき御仁よ。今一度考えを改めてほしい！」

「う、麗しい!?!」

「た、タクトさん!?!」

突然仰々しい手振りを交えて芝居を打つタクトに、リゼとチノはうろたえ一歩引く。

それを気にもとめずに彼は続ける。

「私が、かの可憐な御二方を手に掛けたと、本気でお思いか!? 私には、美しく、愛らしいものを自らの手で壊すなど到底出来ない! もしそのようなことを考えたとなれば、この命……絶つことさえ、息をするが如くやって見せよう!」

自身の無実を声高々に訴えるタクト。多少引かれようと、軽蔑されようと自分の未来を守る為には恥も外聞もない。

「た、タクト君、もう勘弁して……!」

彼の迫真の演技にココアと千夜は頬を染めながら起き上がった。恥ずかしそうに、だが申し訳なさそうにする二人を見てタクトは口の端をに、と吊り上げた。

彼はわかっていたのだ。彼女達が途中からノリノリで死んだフリをしていたことを。二人はリゼ達の位置からちやうど見えないように、しかしタクトにはわかるように笑っていたのだ。

そんないたずらを易々と見逃してやる程タクトは善人ではない。

「おお！ 生きておられたか！ 太陽も霞むその麗しき御姿、まさに天女と言っても——」

「謝るから！ わざとやってたの謝るから許して!!」

いよいよ恥ずかしさに耐えきれなくなった二人が泣きつき、タクトは少し残念そうな顔をしながらも立ち上がった。

「ここからが本番だったんだが……」

「お前はどこを指しているんだ……」

素材があればとことんボケを追究するのがタクトという男である。

「ところでお二人はどうしてこうなっていたんですか？」

「実は……」

二人は事の顛末をつらつらと話し始めた。

近日に行われる球技大会に向けてバレーボールの練習をしていたらしいのだが、千夜は運動が苦手だと言う。

ココアは彼女にトスで返すように、と高いボールを送ったが、返ってきたのは強烈なスパイク。躲す術も無く顔面に直撃し、ノックアウト。

千夜自身もスパイクの反動で体力を消耗し、ダウン。

その結果が先程の疑似殺人現場である。

タクトは『とある事情』により居残りをさせられた後、ふらふらと帰っていると、公園に倒れている二人を見つけたのだ。

何事か、と彼が近づいたところをリゼとチノに発見され現在に至った訳だ。

「千夜ちゃん……和菓子作りと追い詰められた時だけ力を発揮するから……」

よく見ればココアの頬にはボールが当たったような痕があった。

想像以上にハートフルボッコなあらすじに、タクトは多少の恐怖を覚えた。

「これじゃあチームプレーも難しいな……」

リゼの言う通り、味方に攻撃されてはたまったものではない。

「顔に当てたら反則なんだよ?？」

「うそ?! 知らずにやってたわ」

「わ、わざとじゃないよね?……?」

むしろ狙って顔面に当てるといふのは、なかなか高等な技術ではないだろうか。

「確か、顔面はセーフじゃなかったですか?」

そう言えばそんなルールもあったか、とタクトは頷いた。

今の千夜にはぴったりのルールである。

「よかったな、千夜」

「ええ」

「全然良くないよ!」

チームメイトが反則を取られないという喜ばしい事実が判明したのだが、ココアからは抗議の声が上がった。

今の会話に不満があったらしい。

「タクトは球技大会の練習しなくてもいいのか? ココア達と同じ学校だろ??」

「一応バレーボールで参加するが、練習相手もないしな」

授業でもやってるから問題はない、とタクトは笑った。

「それじゃあタクト君も一緒に練習しようよ!」

「そうね。人数が多い方が楽しいわ」

「いいのか?」

「もちろん! あ、でも……」

ココアはタクトの今の姿をまじまじと見つめる。

彼は学校から帰る途中だったので今の服装は学ランである。

ココアの視線に気がついたタクトは笑って言った。

「ああ、服装なら問題ない。体育の授業でもこの格好だ」

「えっ」

彼は運動をする時も学ランで授業を受けている。

「動きづらくないんですか?」

「そうでもない」

もちろん彼の学校では男子生徒にも体操着はあるが、タクトは着替えるのが面倒くさいという理由でほとんど着たことはない。

そのせいか彼の制服の裾やズボンには多少砂埃が付いたりしている。

「そう言えばタクトはどうして制服なんだ?? 学校はとづくに終わっていたんだろ??」

タクトはリゼの質問に目を逸らすことで答えとした。

まだ先日の定期考査の結果が返ってきて日が浅い。

タクトがなぜ制服姿なのかはさておき、彼らはそれぞれの練習に取り組むことにした。

タクト達バレーボール組は三角形になるように陣取った。いわゆる円陣パスをしようという話である。

「タクト君！ 行くよ！」

「ああ」

ココアから打ち出された高く緩やかなボールを、タクトはトスで千夜の方に送る。

「ほら、千夜。スパイクだ」

「待つて??!?? 千夜ちゃん普通に回してね?!?」

二人から異なる指示を受けた千夜が混乱しない訳がなく、迫り来るボールを前にして非常に慌てふためいているのが見て取れる。

「え!?!? え!?!? 私は……どうしたらいい——の!?!?」

彼女が苦し紛れに放ったのはとても鋭いスパイクだった。

「ヴェアアアアア!?!?」

まるで砲丸と錯覚するようなボールを、ココアは紙一重で躲した。

ボールはココアの横髪を揺らすとそのまま地面を数センチ程抉りながら進み、止まった。

「おお。ナイススパイク」

「はあ……はあ……ありがとう……」

タクトがぱちぱちと手を叩いて千夜を褒めると、彼女は肩で息をしながら笑う。

「はあ……はあ……し、死ぬかと思ったよ……」

ココアも息を切らせているが、おそらく体力面ではなく精神的な問題だろう。

もしかすると下手にジェットコースター乗るよりもスリル味を与えるのではないだろうか、などと考えながらタクトはちらりとチノとリゼの方に目を向けた。

二人はどうかやらバドミンソンの練習をするようだ。チノに聞くと、中学の授業でバドミンソンの試合をやるらしい。

「それじゃあチノ。行くぞー??」

「は、はい!」

リゼはチノに呼びかけると、バドミンソンのシャトルを緩やかに打ち出した。

ゆっくりと落ちてくるシャトルを、チノは大きく振り返って打ち返そうとするが、振られたラケットにシャトルが当たるとはなく、彼女の隣をすり抜けて地面に落ちる。

「す、すみません」

「あはは。落ち着いてやれよ??」

「は、はい!」

「次行くぞー」

「お願いします!」

なんと和やかな雰囲気だろうか。殺人スパイクの恐怖に苛まれるような殺伐とした雰囲気ではなく、とてもリラックス出来る空間がそこに広がっていた。

「私そっち行きたい……」

「……ダメだ」

隣の芝生はなんとやら。ココアは和気あいあいとした様子が眩しく見えたようで、切実そうな表情で二人の練習風景を眺める。

リゼはそんな彼女の願いをばっさり切り捨て、再びラケットを構える。

ココアも渋々といった様子で自分の後ろの地面に刺さっているボールを引き抜いた。「今度は？千夜ちゃんから行くよ！ レシーブで返してね。レシーブだよ?！」

「チノ、行くぞ」

なんの偶然だろうか。リゼがサーブスを打とうとしたその瞬間彼女の手からラケットが滑り抜け、ココアが放ったボールと交差線を成すような軌道で一直線に飛んだ。

それらの進まんとする交点には千夜が居たが、彼女はなにやら思索に耽っているように目の前の出来事に気づいていない。

「千夜ちゃん!」

「危ない!」

サーブスを打った二人が声をかけるが時すでに遅し、悲劇は彼女の目先まで迫っていた。

「あ、靴紐が……」

しかし彼女はまるで図ったかのように、解けていた靴紐を直そうとしゃがんで事なきを得た。

タクトは彼女の危機回避能力に驚きながらも感心したように頷く。

「リゼちゃん交代してー!」

「しようがないな……」

ココアの懇願にリゼが折れてやり、二人は場所を入れ替わった。

吹っ飛ばされたラケットとボールを回収し、新しい組み合わせで練習を始めることになった。

「それじゃあタクト、行くぞ」

「ああ」

リゼは片手でボールを上げると、タクトを目掛けてオーバーハンドサーブを打ち込んだ。

「よっ……と。千夜、スパイクだ」

タクトはそれをレシーブで、千夜の方へ高く送る。

「よし、来い!」

「う、うん!」

リゼはどっしりとレシーブの構えをして迎え撃つ気満々である。

千夜はそれに応えるように高く跳躍し、

「えい!!」

全力でスパイクを放った。

勢いよく打ち込まれたボールはリゼを目掛け——ず、

「あ——」

何故かココアの居る方に逸れて進み、

「がつ!!」

彼女の側頭部に着弾した。

思いもよらない奇襲にココアは地に伏せることとなった。

「ああー! ごめんなさい! 私、周りに迷惑掛けてばかり……! きつとバレーボールの才能が無いんだわ……!」

千夜はその場にうずくまって、よよよ、と泣き始めた。

「でも……さつきから……私にしか当たってないような……」

よろよろと立ち上がったココアは蚊の鳴くような声で訴える。大した耐久力である。

「だとしたらそれはもはや愛です!」

「ああ。何度倒れても起き上がる並ならぬフィジカルを信頼しているんだろう」

「さあココアさん!」

「俺達に……」

「華麗なる顔面レシーブを見せてください！」

タクトとチノは仲良くココアにガッツポーズを見せる。

「そんな愛嫌だ！」

「よし、みっちり鍛えてやるからな！」

「なんで私の特訓になってるの!?!」

リゼもノリノリで彼女に訓練を施してくれるようだ。

ココアはなんと幸せ者なのだろうか。

「ここでやらなければ男が廃るぞ」

「私女の子だよ!?!」

タクトはココアに近づくと、学ランのポケットからある物を取り出して彼女に手渡した。

「うまし棒あげるから頑張れ」

「本当になんでもいつも何か持ってるの!?!」

「サラダ味だ」

「また野菜!?!」

「残念、サラダ味は野菜ではない」

「そうなの!?!」

「冗談……」

「違うの!?!」

「ではない」

「紛らわしいよ!?!」

タクトが、元気そうでよかった、と笑うとココアは頬を膨らませる。

ぱつと見て彼女に外傷が無さそうでタクトは胸を撫で下ろした。女の子の顔に傷がついてしまつては一大事である。

「千夜ー! おばあさんが帰りが遅いつて心配してたわよー!」

突然聞こえた声の方に顔を動かせば、土手の上には私服姿のシャロが見えた。

「あら、シャロちゃん」

「おー、シャロもちよつとやつてくか?」

「り、リゼ先輩!?!」

リゼに声を掛けられたシャロは、なにやら恥ずかしそうに自分の服の裾を握る。

「その服装なら大丈夫だよ!」

その姿をやる気に満ち溢れていると捉えたらしいココアは彼女に手招きをする。

「被害者……人数が多い方が楽しいよ!」

不穏な言葉が聞こえたようだが、タクトには人数がいくら増えたとしても千夜の攻撃はココアにしか当たらないのではないか、と思えて仕方がなかった。

それが杞憂に終わることを切に願いたいものである。

「それでは、バレー勝負を始めます」

シャロも加わり、何故かバレーボールの試合をすることになった。

チーム分けはリゼと千夜が組み、それに対するのはココアとシャロである。

チノとタクトは審判、というよりは特にスコアを競う訳でもないので観客と言った配役だ。

タクトは公園のベンチに置かれている自分の鞆の中から数人が座れそうな大きさのブルーシートを取り出すとおもむろに地面に広げ、靴を脱ぎ、その上に腰を下ろした。

「随分用意がいいな……」

「どうしてブルーシートなんて携帯してるんですか……」

リゼとチノは驚きとも呆れとも取れるような面持ちでタクトを見つめる。

彼は鞆から麦茶の入った水筒を取り出しながら言った。

「いや、以前バイト先から何その役に立つかとブルーシートを貰ったんだが忘れててな」
意外なところで役に立った、とタクトはあっけらかんと笑う。

彼にとつては特になんとも思わないような些細なことなのだが、

「タクトさんの謎がまた深まりましたね……」

「ああ……あの鞆の中は一体どうなっているんだ……」

どうやら彼女達にとつてはその光景は不思議に見えるようで、とても訝しげに彼の傍に置かれてある鞆を睨んでいた。

別にこれといって特徴がある訳でもない至つて普通の鞆なのだが。

「タクト君！ コーヒーある?？」

タクトが水筒の中身を啜っているとココアがやってきて飲み物の催促をしてきた。

彼は一旦水筒をブルーシートの上に置いてから、鞆の中から缶コーヒーを取り出してココアに渡した。

「あるぞ。ほら」

「ありがとう！ シャロちゃん！」

タクトから缶コーヒーを受け取ったココアは笑顔で礼を言うと、再びシャロのもとに駆けて行った。

カフェインでドーピングでもするのだろうか。なるほど、確かにテンションを上げてから戦に臨むというのは戦略としては丸なのではないだろうか。

シャロにコーヒを飲ませるココアを眺めながらタクトが感心したように頷いてい

ると、リゼとチノの会話が耳に入ってきた。

「ああ見えて中は結構大きいんですよ。きつと」

「いや、多分中は四次元空間に繋がっているんだ」

タクトの鞆は決して未来の産物ではない。どこにでもある、少し丈夫なごく一般的な構造の鞆である。

ただ少しだけ彼が収納上手なだけなのだ。

その後、練習の甲斐もあって千夜はトスができるようになったのだが、本番はドツジボールの選手と交代してもらい、球技大会では無事に勝利を収めたという。

一方でタクトはバレーボールでは見事なスパイクを連発したらしいが、『何故か』英語の追課題をやることになり、それは未だにレシーブできていないというのは彼だけの秘密である。

第十五話 楽園を求めてモヤシを齧る

初夏という言葉がある。文字通り夏の初め頃を指す日本語だが、時たまここが日本であるということ忘れてしまうこの木組みの街でも、その季節の足取りをうかがうことができる。

公園や道の端に植えられている木々を見ればすっかり緑色に染まり、道行く人々の服装も袖が半分であることが当たり前になっていた。更に天気予報で傘の記号を見る回数も増えてきたことも目立つ。

そんなことで、タクトが自宅のカレンダーをめくればもう六月である。

月の初めに祝日と休日の数を数えて一喜一憂するのが彼の月一の楽しみであったが、今回は外れだ。

先月には祝日が連なりほぼ一週間丸々休める黄金の週が存在していた。しかし、その帳尻合わせということなのか六月には祝日と言うものが無い。

更に悪いことに、まだ梅雨入り前であるのにも関わらず雨日が続いていることも相まって、折角の休日なのだが彼の心の空模様までもが生憎の曇天だった。

「はあ……」

タクトは部屋の中にぶら下がる洗濯物を見て、一つ大きなため息をつくとなんとも一度カレンダーに目を通してみた。

特に何も考えずにぼんやりと数字と文字を眺めていると、カレンダーのある部分に目が留まる。

「父の日か……」

第三日曜日の記念日の欄に書かれている文字を見ながら、タクトは故郷にいる父親のことを思い出してみた。

前回、年末年始の数日だけ帰省したのが最後だっただろうか。先月の連休はバイトだったり生ものの消費だったりに追われて結局帰れなかったというのは記憶に新しい。

今度の夏休みには帰省しようか、などとタクトが考えていると窓から眩しい光が差し込んできた。

どうやら雨が過ぎ去り、太陽が働き始めたらしい。昼までに上がってくれたのは幸運である。

タクトは部屋の洗濯物をベランダに出すと、昨日の夕飯の残りのモヤシ炒めで少し遅めの昼食を済ませ、外出の準備をする。

折角晴れたので散歩でもしよう、とタクトは久々の日向に、少し晴々とした気持ちで足を踏み入れた。

さて、外出したまではよかったが何をするか、どこへ行くかはタクトは全く考えてなかったのだ。

ぶらり旅と言えば聞こえは悪くは無いのだが、単にタクトの無計画さと気まぐれが招いた擬似的な迷子であることは否定することができない。

タクトが手提げの鞆を片手にぶら下げて、あてもなくふらふらと石畳の道を歩いていると、友人が働いている甘味処の前まで辿り着いた。

相も変わらず看板だけはやたらと古いその店の内部を、窓からちらりと覗いてみればこれまた面白い光景がタクトの視界に飛び込んできた。

タクトは携帯電話を片手に、嬉々とした表情で甘味処『甘兎庵』の扉を開いた。
「いらっしやいま……せ……」

タクトを笑顔で出迎えたのは、彼が足繁く通っている喫茶店『ラビットハウス』の従業員であるリゼだ。普段の喫茶店の制服ではなく、何故か甘兎庵の和風を意識した制服を身に纏っている。

タクトは、目の前で引きつった笑顔のまま固まる彼女を改めて観察してみた。

和服と長いツインテールの組み合わせもさることながら、彼女の抜群なスタイルが全面的に強調されているというのは、なかなかどうしてぐつとくるものがある。

控えめに言つて、とてもよい。

「……」

「……」

なにやら既視感のある状況の中、二人の間を支配する沈黙を打ち破つたのは、ぱしやりという音だった。

「……な、な、なな何でお前がここにいるんだ!?!? 後それ消せ!! 今すぐ消せ!!」

「何故と言われても散歩をしていたら珍しい格好をした友人を見かけたから撮影……もとい挨拶をしようと思っただけだが」

そこにやましい気持ちは一切無い、とタクトは顔を真っ赤にしながら携帯電話を奪おうと襲いかかるリゼを躲す。

このレア写真は何としてでも死守しなければならぬ。これは人類の宝だ。国宝にするべきだ。

携帯電話を、リゼの手に渡らないように高く掲げながら店内を見回してみると、入口のすぐ側のテーブル席に見知った顔を見つけた。

「シャロも居たのか」

「え、ええ……」

彼女もリゼの和服姿を拝みに来ていたのだろうか。

タクトは首を傾げてシャロに尋ねる。

「わ、私は別に！ そんなことは……ないわよ」

今の間については特に言及しないでおこう。

同好の士が一人でも多いのならそれに越したことは無い。

「あら?! タクト君、いらつしやい」

タクトがシャロを同士、あるいは同類を見ようような目で見てみると、店の奥から甘兎庵の本来の看板娘である千夜が顔を覗かせた。

天々座家に甘兎庵を乗っ取られた訳ではなかったようなので一安心である。

「ああ。随分美人な従業員が増えたな?」

「び、美人……?!?!」

タクトの美人という言葉にリゼはわかりやすくうろたえる。見ていて面白い。

もちろんその発言はタクトの本心であるが、これを好機と見た彼は一瞬のうちに携帯電話を鞆の奥の方に押し込んだ。ヴィクトリー。

「そうなの。しばらくここでも働いてもらうことになったの」

これは集客力抜群ね、とニコニコしながら千夜は言う。

なるほど、そういうことならリゼがこの店の制服を着ていても何の不思議もない、とタクトは頷いた。

「だが、何故ここでバイトを?」

しかし、彼女は既にラビットハウスで働いている。

小遣いを稼ぐだけならばそれだけで十分に事足りるはずだが、複数のバイトをせざるを得ない理由があるのだろうか。

「実はこの前、親父がコレクションしていたワインを一本割ってしまったんだ……それで、もうすぐ父の日だろ?? だからそれまでに頑張ってお金を貯めて、ヴァインテージワインをプレゼントしたいんだ!」

罪滅ぼしをしようということなのだろう。なんと父親想いのいい娘さんであろうか。

しかしヴァインテージ品のワイン、それもコレクションする程の物ともなれば、一つや二つバイトが増えたところで買えるような代物ではない。

タクトはそのことを忠告するべきか悩んだが、

「ラビットハウスのシフトを少し変えてもらって日替わりで甘兎庵と、それからフルールでもバイトをするんだ!」

やる気に満ち溢れた表情のリゼに水を差すようなことは到底できなかった。

それよりもリゼの発言で気になる箇所を見つけたので、タクトはそちらについて聞いてみることにした。

「フルールでも働くのか?」

「ああ。とりあえず明日は……って、なんだそのキラキラした表情は……」
「どうやら聞き間違いではないらしい。」

タクトは自分の耳が正常に機能していることに、心の中で狂喜乱舞した。多少表情に出してしまったようだが、それは問題ではない。

彼女がフルールで働くということは、例の制服を着るということだ。つまり、あのロップイヤーを、リゼが、つけるということなのだ。

月の形成には様々な説があるが、その中でジャイアント・インパクト説というものがある。生まれたばかりの地球に、火星ほどの大きさを持つ天体が衝突したことで月が生まれたというものだが、人類がそれを観測するには寿命と、歴史があまりにも足りなかった。

しかし、明日まさに、その奇跡の天体現象が再現されようと言うのだ。容姿端麗な彼女とフルールの完成された芸術との融合によって何が起こるのか、それが明日、わかると言うのだ。

これを知ってなお、自身の感情を押し殺せる程タクトは成熟していない。

「シャロ」

「な、なによ……」

シャロは、普段見ない——以前彼がフルールで見せた、いつになく真剣な眼差しに一

瞬たじろぐ。

「明日はよろしく」

「それは私のセリフだと思っただが……」

タクトの明日の予定が決まった。

桃源郷を、見に行くのだ。

「……タクトは少し自重した方がいいわよ」

心なしかシャロトリゼの、タクトに向ける視線の温度が氷点下をぶつちぎっている気がするが、今の彼にはそれは関係なかった。

「ところで、さっきの写真がここにあるんだが……」

「……」

タクトが携帯電話の入った鞆の底の部分を指させば、シャロは他のお客様に迷惑が無いように、と快くタクトの来店を許可してくれた。

無論、タクトは店で騒ぐつもりは無い。自らの欲望の為にアダムの轍を踏むことは彼自身も避けたいと思うところである。

翌日、タクトは終業の鐘を聞くや否や、自身の限界速度を以て学校を飛び出すと、フルールへと直行した。

初夏というのは名ばかりで、一段と日差しが強いこの日、タクトは早足で街を通り抜けた。チクチクするような暑さも、汗で背中にシャツが張り付く感覚も、今の彼にはどうでもいいことだった。

ただひたすら己の目的を果たすために、彼は急いだ。

世界には冒険者が居た。それぞれが何かを追い求め、未知の世界に飛び立った。ある者は伝説の秘宝を。ある者は絶景を。そしてまたある者は新天地を。

彼らは自身の欲望のまま旅をした。幾層倍もの艱難辛苦を乗り越え、自らが想った理想郷を目指したのだ。

長い旅路の果てに、ついに成功を収めた者も存在したが、全てがそうだったわけではない。夢を求め、掴もうとして惜しくも散っていった者は数知れないだろう。

そして今まさにタクトは、志半ばで倒れていった勇者達に心の中で敬礼しつつ、目の前の扉を開いた。

「い、いらっしやいませー」

さすれば、女神が現れた。

普段は左右で留めている長髪を下げ、そこには代わりにこの店の目玉とも言えるロツプイヤーが愛らしく垂れ下がっている。更に、服のサイズが小さいのか、はたまた違う理由があるのか、胸元の布地は柔らかかそうに、だがぴっちり張り詰め、丈の短いスカ-

トと白いニーハイの隙間には乳白色の太ももが雲間の月の如くちらりと見える。それに加えて、恥じらいながらも笑顔で接客するその姿はとても良い。すごく良い。

タクトは、ふう、と息を一つ吐いた。

「エリュシオンはここにあったのか……」

「何馬鹿言ってるのよ……」

タクトがやや感動気味に呟くと、リゼの背後から呆れ顔のシャロが現れた。

もしかしてリゼばかり注目されていることに嫉妬しているのだろうか。

もちろん彼女には彼女の味がある。

例えば彼女のくせつ毛とロツプイヤーは獅子に鱗、鬼に金棒、シャロにコーヒーである。多少もじゃつとした髪に溶け込むようなふわりとした耳は、彼女の小柄な体も相まって小動物的な庇護欲を掻き立てる。これだけでも十分すぎるアイデンティティである。

故に小さくても気にすることはない。小さいものには小さいものの良さがあるのだ。ステータスだ。希少価値だ。

「……」

「何故腹を殴る」

彼女は何を察したのか、タクトのへその少し上らへんにグープンをぶち込んだ。

そこそこ鍛えられた腹筋と、彼女の低い攻撃力のおかげでダメージは抑えられるが、それでも全く痛くない訳ではないし、なによりそこは人体の急所なので遠慮していただきたい。

最悪の場合死に至る。逆流的な意味で。

憤るシャロをなだめてどうにか席に座ることができた。

タクトが適当にハーブティーを注文すると、リゼとシャロは店の奥へ消えていった。

暑さに耐えながらここまで来たためタクトは喉が渴いていたのだが、不機嫌そうなシャロにハーブティーの代わりにカップいっぱい醤油を持ってこられた場合、彼は全力で額を地面に叩きつける用意はできていた。

プライドだけでは生き残れない。

「待たせ……お待ち遠様です。こちら、リンデンフラワーになります」

どうやらその心配は杞憂に終わったようだ。

リゼが運んできてくれたティーカップからは上品な香りが立ち上っている。

タクトは湯気がゆらゆらと立つカップに口をつけ、ほっと一息ついた。

「それにしても三件掛け持ちとは、よくやる気になったな」

ふとタクトがそう言うと、リゼは少しバツの悪そうな顔をした。

「まあ……ワインを割ってしまったのは私だからな。親父は笑って許してくれたけど、

せめて父の日には何かをしてやらないと私の気が済まなかったんだ」

「義理堅いな」

「う、うるさい！」

タクトが感心したように笑うと、彼女は照れたようにそっぽを向く。

「そう言うタクトはどうなんだ？。親父さんに何か送ったりしないのか？」

「ああ……そう言えば何も考えていなかった」

昨日は元々実家への土産を吟味する予定だったはずなのだが、衝撃的な出会いによってそれはタクトの頭からすっぽりと抜け落ちていたのだ。

リゼがあまりにも魅力的だったのだから仕方ないだろう。

「……何か考えなかったか？」

「さあな」

野生の勘は侮れない。

タクトは誤魔化すように目の前のティーカップの中身を喉に流し込んだ。

「クッキー焼けたわよ」

タクトがリゼに睨まれながらリンデンフラワーの甘い香りを堪能していると、シヤロがトレイにクッキーの乗った皿を乗せてやって来た。

甘くて香ばしい、微かにハーブの爽やかな香りが混ざった空気が鼻をかすめ、とても

食欲をそそられる。

「ありがとう。それじゃあ、一つ……」

タクトは、テーブルに置かれた皿からクッキーを一つつまみ上げると、それを口に運んだ。

「相変わらず美味しい」

「そ、そう?? ここで働き始めてからクッキーを焼くのに慣れただけよ……」

クッキーを頬張って微笑むタクトに、シヤロはもじもじとロップイヤーを弄る。

「そう言えば、シヤロはどうしてバイトをしているんだ??」

「え!?!? そ、それは……!?!? こ、この食器がすごく気に入っていて決してお金に困っているとか言う訳ではなくて……!?!?」

リゼに投げかけられた質問に、シヤロは目を回しながら答える。

「親に頼らずお金を使いたいもんな」

「え、ええ!?!? ……初めて自分のお金で好きな物を買えた時って嬉しいですよね!?!?」

「ああ!?!? 感動したなあ……」

果たして二人の想像している物が同じ方向性なのかはさておき、タクトは自分がバイトを始めて最初に購入した物を思い出してみた。

「……モヤシか?」

「野菜ね……」

「野菜だな……」

野菜だった。

この街のスーパードで初めて見かけて、あまりの安さに驚いてつい手に取った物がモヤシだったのだ。

モヤシを侮るなかれ。彼らには食物繊維をはじめとした豊富な栄養が含まれているのだ。

安価に入手できるというのもモヤシの強みなのだが、悲しいかな。それ故に彼らは食卓では脇役という扱いを受けてしまうのだ。

調理法一つで肉や魚にも劣らない、ご飯のお供になり得るのに、と力説するタクトを、リゼとシャロはなんとも言えない表情で見つめるのだった。

第十六話 兎の休日

石畳のやたらと広い道路に、木組みの風情のある建物。街中の水路にはさらさらと、透き通った水が流れている。市場の方に顔を出せば溢れんばかりの活気に気圧されそうになる。初めてこの街を訪れる人間は、西欧の都市に迷い込んでしまった錯覚に陥ることだろう。

と言つても、一年以上住めばそれが当たり前の光景となり、観光気分も薄れ、やたらと曲がり角や階段が多いことに不満を感じることもあるのだが。さらに言えば、夏の、日差しが強い日には、日光に照らされた石畳が石焼きプレートプレートの如く熱を放つので、毎日天然露天サウナを楽しむことができる。夢もなにもあつたものではない。

もちろん、悪いことばかりが浮き彫りになる訳ではなく、大変微笑ましいこともある。この街はウサギの街と呼ばれることもあるほど、ウサギが多い。公園に行けばウサギ。商店街に行つてもウサギ。道を歩いていてもウサギ。といった具合に、この街の中でウサギとエンカウトすることはさほど珍しくない。

休日に公園に立ち寄り、ウサギを愛でて日々の疲れを癒す、そんな日常を送ることもできるのだ。

「いやあああああ!!」

あまりの癒しの暴力に、叫びながら喜びを体現する者もいる。なんと微笑ましい光景だろうか。

「どこをどうしたらそう見えるのよ!!」

どうやら違うらしい。

目の前のクレープ屋のバイトさんは、三匹のウサギに囲まれ、軽く涙目になりながらも見事なツツコミを入れてくれた。相変わらずキレイがあつて素晴らしい。

タクトは、そんな彼女に、心の中で感謝と尊敬の意を唱えつつ屋台のメニューを指差した。

「それじゃあバナナクレープを一つ」

「今の私にそんな余裕ないわよ!! ひい!!」

シャロを取り囲むウサギのうち一匹が彼女へ近づくと、シャロはその場に両手で頭を庇うようにしてしゃがみこんでしまった。いかにも防衛力が高そうなガードである。

このまま眺めているのも悪くはないのだが、これではクレープが食べられない。

この日、タクトは二度寝、三度寝を繰り返して、起床したのは朝とも昼とも言えない時間。彼が食事をしようと冷蔵庫を開ければ、入っていたのは調味料と僅かばかりのコンソメ。つまるところ、彼は今朝から何も食べていないのだ。

今、このクレープ屋を閉店させるわけにはいかない。

タクトはクレープ屋の屋台の裏側に回り込むと、三匹のウサギを抱きかかえ、屋台から離れた場所に彼らを放ってから屋台に戻った。

「もう大丈夫だ」

タクトは、未だカリスマ性が滲み出る防御態勢を取るシャロに声をかけた。

「ほ、本当?……?」

彼女は恐る恐る顔を上げると、周囲を見渡した。ウサギがいなくなったことがわかると、安心したように胸をなで下ろし、立ち上がった。

「あ、ありがとう……」

「気にしなくていい。前にも言ったが誰にでも苦手なものはあるさ」

むしろ恐れることは人間にとつて有用なことだろう。人が恐怖という感情を失った時、自己防衛の本能も同じく消えることになる。

「タクトにも苦手なものってあるの?」

「ああ。俺は今、クレープが怖い」

「……だからってタダにはしないわよ」

シャロはジト目でタクトを見やると、帰れと言わんばかりに手を払う。あまりに素っ気ない様子に、タクトは少し寂しくなった。

「改めて、バナナクレープを一つ頼む」

クレープは饅頭になり得ないことがわかったところで、目的のものを手に入れるべく、小銭を差し出す。

「はい。ちよつと待ってね」

シヤロは、タクトから代金を受け取ると、慣れた手つきで生地器具材を包み込んでいく。

これでどうにか食事でありつけそうで一安心である。いつもよりも少しばかり豪華な朝食だが、たまにはこういうのも悪くないだろう。

「あれ?! タクト君?!」

出来上がっていくクレープをなんとなく眺めていると、後ろから聞き覚えのある声に呼ばれた。

声のする方に目を向けてみれば、行きつけの喫茶店のマスターの孫と、その自称姉が仲良く並んでいた。散歩の途中だったのだろうか。

タクトが彼女達に軽く手を振ると、あちらも大きく振り返してくれる。

「こんなところで奇遇だね……ってシヤロちゃん!?!」

「ココア?! チノちゃんまで……」

ココアは、屋台の下でクレープを作るシヤロを見て、意外なものを見るような顔をし

た。

一方でシャロはなんとも複雑そうな表情である。

「こんなところでもバイトしているなんて、シャロちゃん多趣味だね」

「そ、そうよ！ 多趣味よ！ 悪い!?!」

多趣味であることは良いことだと思うが、手持ちのクリーム絞り袋を握りつぶすのは遠慮願いたい。タクトのバナナクレープが真っ白になってしまう。カロリーの過剰摂取はウェイト的に危険だ。

「ところで、ココア達はこんな朝早くからどうしたんだ??」

「朝早くって……もうすぐお昼の時間ですよ……??」

「一体いつまで寝てたのよ……」

二人から呆れるような視線を受けるタクトだが、なにもずっと寝ていたわけではない。ここは一つ、弁明しておく。

「失礼な。六時には起きた。ただ、布団の温もりに抗えなかったんだ」

「それは起きたって言わないわよ!」

朝の布団には妙な魔力があるのだ。仕方あるまい。

「私達は天気がいいからお散歩してたんだよ!」

「私は家でボトルシップの続きを作ってたのですが……」

なるほど。チノはココアに引つ張られて外に出てきたということらしい。

休みの日はのんびり過ごしたかったです、とぼやくチノだが、その心なしか明るい表情を見るに、満更でもないようだ。

「シャロちゃん！ クレープを二つくださいな！」

「少し待ってて……はい、タクト」

「ありがとう」

ココアの注文を受け取ったシャロは、タクトに出来上がったバナナクレープを渡すと、続けて新しいクレープを作り始めた。

「タクト君もお散歩??」

「まあ、そんなところだ。家の食料を切らしてしまつてな。買い物ついでにここに寄つてみたんだ」

タクトは、左手にぶら下げているレジ袋をココアに見せた。

「そうなんだ。あ、そうだ！ タクト君はこの後暇?? 折角だから一緒にお散歩しようよー！」

「そうですね。タクトさん、どうですか??」

ココアとチノから嬉しいお誘いを受けたタクトだったが、流石にこの袋を持ったまま出歩くわけにはいかない。中には卵や、野菜などすぐに冷蔵庫に保存しなければならな

いものが入っている。

この公園と自宅を往復するのは流石に時間がかかる。二人に待っていてもらえば問題ないのだろうが、それでは彼女達の貴重な休日の時間を無駄にさせてしまうだろう。

タクトは、申し訳なさそうに二人の申し出を断った。

「今日は特に予定はないが、一度生ものを家に置いてこないといけないな」

「それもそうですよね……」

「そっか、残念……」

わかりやすく落胆する彼女達を見て、若干の罪悪感を感じたので、タクトはフォローを入れることにした。

「すまないな。また今度誘ってほしい。その時はご一緒させてもらおう」

「わかった……じゃあまた今度ね！」

どうやら元気を出してくれたようだ。

タクトは、二人の見せる明るい笑顔に安堵しつつ、購入したクレープにかじりついた。

若干クレープが多いが、バナナとチョコシロップの程よい甘さが実に美味しい。

「はい。お待たせ」

「ありがとう！」

ココア達のクレープも無事完成したようだ。

ココアは、シャロから二つのクレープを受け取ると、そのうち片方をチノに渡して、自分のクレープを頬張った。

「……んー！ 美味しい！ はい、シャロちゃんも！」

ココアはにこにことした表情でクレープをシャロに差し出す。

対してシャロは迷っている様子だ。

「……私、工作中よ??」

「まあまあ、ひとくちだけでも」

「ひとくち……」

やはり甘いものの誘惑というのは強かったようだ。ひとくちだけ、という言葉に心が揺らいだらしく、シャロは恐る恐るクレープに手を伸ばす。

「じ、じゃあひとくちだけ——!?!」

彼女の手がクレープに触れようとしたその時、空から落ちてきた黒い物体がクレープを押しつぶした。

「あー!! また空からあんこが！」

黒い物体の正体は甘味処、甘兔庵の看板ウサギのあんこだ。以前もカラスに攫われたと聞いたが、もしかしなくても今回もそうなのだろう。

「よりによってクレープの上に落ちなくても……」

ココアがクリームで白くなったあんこを持ち上げると、クレープは見るも無残な姿へと変わり果てていた。

とても可食部分が残っているようには見えない。

購入したばかりのものを目の前で失うのは大層に辛いことだろう、とココアの方に目を向けようとする、屋台の中から悲痛な呻き声が聞こえてきた。

「うう……久しぶりのクレープが……」

どうやら、シャロの方がダメージが大きかったようだ。

クレープなどそう滅多に食べる機会はないだろう。一人暮らしで、節約生活を送っているのなら尚更だ。

タクトには、彼女の気持ち痛いほどわかった。彼も以前、焼きたての鯛焼きを川に泳がせてしまった過去があるのだ。百五〇円。小豆と生地の割合が絶妙で、ほんのりと香る黒ごまの風味が未だに彼の記憶に残っている。

「ほら」

それ故だろうか、それとも単純に目の前で悲しむ二人を放っておけなかったのか、タクトは自身の持っていたものを彼女達に差し出した。

「二人共全く食べられなかっただろう?? なら、これを食べるといい」

「え!?? で、でも……」

「そ、そんなの悪いわよ……」

差し出されたクレープを、二人は申し訳なきように拒む。もしかして、タクトが二、三口程しか食べていないことを気にしているのだろうか。

「気にすることはない。俺はもう十分だ。残りは二人で分けてくれ」

そう言つてタクトは半ば強引に、ココアにクレープを握らせた。

二人の頬が終始赤かった気もするが、この日は日差しも強く気温も高いからだと、タクトは解釈した。

「……タクトさんは少し手加減をするべきです」

なにやらチノがジト目で言っているが、タクトに意味が分かるはずもなく、彼は首を傾げることにしかできなかつた。

「待つてえー!」

クレープよりも甘々な雰囲気が出る公園に、これまた見知った人物が駆け込んだ。た。

仕事の途中だったのだろうか、和服の制服を身にまとい、肩で息をしている。

そのせい、あるいはそのおかげと言うべきか。布地が乱れ、地肌が露出しているが、決して卑しいことはなく、むしろ適度に艶やかで、上品な雰囲気を醸し出している。

「はあ……はあ……やつと追いついた……」

「千夜ちゃん！ またカラスにあんこ攫われたの??」

加えて彼女の洩らす吐息が一層色気を立たせ、見る者を陶酔の渦へと引き込む。早い話が、とても、良い。

「よきかな」

「……そういえば、いつもと制服が違いますね」

何の反応もされないというのはなかなか辛いものがあるが、それはさておき、チノの言う通り、この日の千夜の服装はいつもと異なり、近代的なデザインである。

何らかのキャンペーンの最中なのだろうか。

「気づいた?? 今月はレトロモダン月間なの」

千夜は、そう微笑んでその場でくるりと回ってみせた。

橙色をベースとした布地に、白や水色といった淡い色合いの帯を重ねることで、懐古的だが、妙に先進的なイメージを持たせる。落ち着いた雰囲気の中に、活気を感じさせるような服装で、実に趣深い。

「甘兎もそのうち、フルールよりもいかがわしくなるんじゃない??」

タクトとしては大歓迎なのだが、もしそうなった場合、フルールと甘兎庵の趣向が被ってしまう。ただでさえ喫茶店の多いこの地域で同じような商売をするというのは、あまり好ましくないだろう。ダブってしまうのはライスだけで十分だ。

「そう……それなら脱ぐわ……」

「ここで脱がないでよ！ タクトも携帯を構えない！」

着物をずらし、肩をはだけさせる千夜を目の前にして、タクトは無意識に写真機能を起動していたが、これは仕方あるまい。

人間は本当の芸術を前にして、黙っていることなどできないのだから。

「あ、改めて言われると恥ずかしいわ……」

気づけば千夜がなにやら頬を染めて自分を抱きしめていた。

どうやら、またもや声に出してしまったらしい。どうも最近は思惑がだだ漏れで良くない。

それだけこの街に染まってきたということだろうか。以前よりも自身の想いを発信するようになったというのは好ましい変化であるが、ものには限度がある。

タクトは、すっかり慣れてしまった周囲からの冷ややかな視線に、困ったように肩を竦めた。

第十七話 開店、妹喫茶

リストラという言葉突きつけられて喜ぶ者は居ないだろう。サービス残業などと言つて労働基準法の定めるところの、法定労働時間を大幅に超越したのにも関わらず、一切の手当も出ないようなブラックコーヒーよりも黒ずんだ企業に勤めているのなら、あるいは狂喜しうるだろうが、多くは絶望の淵に立たされることになるのではないか。

そうは言つても、一従業員に上からの唐突な解雇命令に抗う術は無い。そのまま流されるようにして消えていくしか道はないという事実は現代社会に潜む闇と言えよう。

ある日の夕方、季節はすっかり夏に移り変わり、太陽が未だ沈まず燦々と輝くなか、夕クトは喫茶店ラビットハウスに足を運んでいた。

彼がこの店に顔を出すようになって早一年、彼もすっかり常連である。細部までこだわり抜かれた、極上のコーヒーを求めて足繁く通うのだが、最近彼にはラビットハウスにて、もう一つの目的ができた。

それは従業員との交友だ。

ラビットハウスでは三人の少女が働いており、うち二人のバイトとは歳も近い。何度も店に顔を出すうちに、彼女達とも友人と言える程には話すようになったのだ。せつかく親交を深めることもできたので、彼女達には働き続けてもらいたいものである。ラビットハウスの安寧と繁盛を祈りつつ、タクトは店のドアノブに手をかけた。

「いらつしやいませ……あ、タクトさん。今日も来てくれたんですね」

店内に足を踏み入れると、初代マスターの孫娘がタクトを出迎えた。トレイを抱き抱える彼女の姿もすっかり見慣れたものである。

「ああ。いつものを頼めるか?」

「少し待っていてください」

タクトはカウンター席に腰掛け、目の前でコーヒーマルを動かすチノの手元をぼんやりと眺める。

はて、いつもと同じように注文を済ませ、いつもと同じようにカウンター席を陣取ったのだが、違和感を覚える。

何かが足りない。

「なあなあ、チノ。あの人がこの前言ってた人?」

「タクトさん、だったっけ?」

タクトが正体不明の不足感に頭を捻らせていると、見慣れたラビットハウスの制服を

着た、二人のバイトがチノに話しかけていることに気がつく。

が、どうしたことがか。二人共、今日はやけに小さい。見たところ身長がチノとさほど変わらないではないか。それどころか、髪型も雰囲気もいつもと全く違う。

「……これが俗に言うイメージチェンジというやつなのか」

髪型だけでなく、身長や自身の雰囲気まで自由に変えることができるとは、最近の高校生は摩訶不思議である。

「何を言っているんですか？……二人は私のクラスメイトですよ」

「マヤだよ！」

「メグですー」

それぞれ元気よく名乗った二人を観察してみれば、なるほど、確かに中学生らしい容姿をしている。それどころか、下手をすれば、チノを含め、小学生と紹介されても違和感が無いのではないだろうか。

「……今、ものすごく失礼なことを考えられた気がします」

流星に鋭い。接客業は伊達ではないようだ。

タクトはジト目のチノから目をそらし、推定中学生の二人、ショートヘアのボーイツシユな少女と、おさげ髪とほんわりとした雰囲気少女を順に見やった。

「マヤにメグだったか。俺は白波託兔という。ただの客だが、よろしくな」

「よろしく！ ……タクトって、チノに聞いた通りの人だな！」

屈託の無い笑顔で思いもよらないことを言うマヤだが、果たしてどのような話をされたというのか。チノに限って、あることないことを吹聴することはないだろうが、些か気になる。

「チノちゃんがね、お兄ちゃんみたいな人だ、って言ってたんですよー」

「め、メグさん！」

親切にも、メグが笑顔で噂の内容を軽く教えてくれた。

まさかの兄扱いである。タクト自身がチノに何をした訳では無いはずなのだが、随分と高い評価をいただけただけものだ。

タクトには妹属性は無いが、兄と言われて不思議と悪い気はしなかった。もしこの場に、自称姉を名乗る人物が居たら発狂することは必至だろうが。

「喋り方とかが大人っぽいって言ったんです！ よくお店の方を手伝ってくれますし、ブラックコーヒーだって飲めますし、セロリだって食べられますし……」

顔を赤くしながら必死に弁明するチノは見ていてとても微笑ましい。

なるほど、兄というのはこういう気持ちなのだろう。タクトは、ココアが姉に期待を寄せる訳を少し理解し、小さく笑った。

それはさておき、タクトには先程から気になっていることがある。

「ところで、マヤとメグはなぜラビットハウスの制服を??」

「私達、ここで働いているんだ!」

「そうそう、少し手伝っているんですー」

なんということだろうか。今まで商品の質を売りにしてきたラビットハウスが、営業方針を変更してしまった。まさかの妹喫茶の導入である。確かに、数多の喫茶店が軒を連ねるこの街では、未開拓のこのジャンルはそこそこ流行りそうではあるし、タクトも嫌いではない。

しかし、それに伴って従業員の変更が必要だったのだろうか。妹系従業員が入ったことで、以前までの高校生バイト二人は解雇されてしまったらしい。

タクトは個人的に彼女達にはバイトを続けて欲しかったのだが、ラビットハウスの未来のために必要な犠牲ならば仕方がない。

「そうか……二人共、しっかりな……」

「うん! あ、コーヒーできたよ!」

「ありがとうな……」

世知辛い世の中だが、ココアとリゼには強く生きてもらいたい。願わくば、哀れな仔羊達に幸福のあらんことを。

タクトは心の奥から溢れる、やるせない気持ちを、新人従業員に手渡されたブラック

コーヒーで流し込んだ。まったくもって苦い社会である。

すると、店の裏口に繋がる扉が勢いよく開かれた。

「遅れてごめんね！ 制服がなかったんだけど……」

慌ただしい様子で店内に駆け込んできたのは、当の仔羊である。しかし、時すでに遅し。彼女の席はすでに埋まってしまっている。

「私、リストラ……!?!」

ココアは自身の制服を着て働く新人を見て啞然とした様子だ。自分が今まで座っていた椅子を失ったのだ。涙目になるのも無理はない。

しかし、何を落ち込む必要があるのだろうか。考えてみれば、いや、考えることも必要ない。まだ、手はある。

「大丈夫だ」

「タクト君……」

まだ解決策は残されている。何事も、最後まで諦めてはいけない。

タクトは、弱々しくカウンターに寄りかかるココアに、優しく微笑みかけた。

「まだ、フルールと甘兔庵がある」

「うわあああん!!」

泣いてしまった。

タクトは、失職したのなら新しい職場を見つければ良いという考えの下、妥当な就職先を紹介したはずなのだが、何がいけなかったのだろう。どちらの制服も可愛らしく、同じ接客業だというのに。

「二人は一体何をやっているんで——!??」

「チノちゃあああん!!」

少々騒がしくしすぎたのか、厨房からひよつこりと顔を覗かせたチノに、ココアは勢いよく抱きついた。

「これからは日向ぼっこは週三回にするから! もつとお姉ちゃんらしくするから、捨てないで!!」

「お、落ち着いてください! 一体なんのことですか!?!」

ココアタックルを食らったチノは、少しよろめきながら、泣きつくココアを落ち着かせる。

身長について目を瞑ればどちらが姉に見えるかは言うまでもないだろう。

「だって……リスが……トラが……」

動物園だろうか。

支離滅裂な言葉を連ねるココアを見て、チノは一言。

「……タクトさん、一体何をやらかしたんですか?」

あろうことかチノは、タクトが何かしらの悪戯をココアに仕掛けたのだと思っ
ようだ。確かに彼は冗談好きで、よく誰かをからかっては怒られることはあるが、友人
の就職トラブルをネタに盛り上がるほど闇は深くない。

濡れ衣もいいところである。

「……待ってくれ。俺はただ、ココアが途方に暮れないように新しい就職先を提案した
だけだ」

「うう……私を見捨てないでえ……」

タクトは、少なくとも事態の解決に貢献したはずだ、と最早見慣れてしまったジト目
のチノに抗議した。

「就職先……?? 見捨てる……?? なんの話です??」

しかし、当のチノは話が見えないようで首を傾げる。

どうも噛み合わない。

「え……?? だって、私の制服が……」

「妹喫茶が……」

「妹喫茶!?! どこにあるの!?!」

ココアが妹喫茶に興味を示しているようだが、それはどうでもいい。今はそんなこと
よりも確認しなければならないことがあるはずだ。

「ココアにはフルールと甘兔庵、どちらの制服が似合うだろうか」

「うわあああああん!!」

「ココアさん!?! お、落ち着いてください!」

再び泣いてしまった。

彼女のことを想つての質問だったのだが、本当に何がいけなかったのだろう。職場を変えるのなら同じ職種なのはもちろん、モチベーションも上げなければならぬ。タクトは、そのためにも服装にもこだわるべきだ、と思つた次第なのだ。

「なあメグ」

「なに?? マヤちゃん」

「私達はどうすればいいの?」

「うーん……とりあえず座ってる?」

「そうだね」

完全に置いてかれた新人従業員二名は、目の前に広がる混沌を、静かに見守るのだつた。

ラビットハウスは今日も平和である。

事態に收拾がついたのはそれから数分後だった。チノに詳しく状況を説明しても

らったところ、ココアとリゼの帰りがいつもより遅かったので、たまたまラビットハウスに遊びに来ていたマヤとメグが二人の代わりに手伝ってくれていただけだと言う。制服は折角なので着てみた、とのこと。

決して二人がリストラされた訳ではなく、ましてや、妹喫茶が開設されることもない。それはそれで少し残念であるが、ラビットハウスの従業員が変わる訳ではないとわかって一安心である、とタクトは胸を撫で下ろした。

「なるほど、要はココアの勘違いだった訳か。人騒がせだな」

「えへへ、ごめんね……って！ タクト君もだよね!?!」

「……?!」

「なんでそんな不思議そうな顔を!?!」

「まあまあ、これあげるから落ち着いて」

「ミヨウガ!?!」

「リラックス効果があるらしいぞ」

「へえ、そうなんだ……って、そうじゃないよ!!」

「こちらをお求めだったか」

「シヨウガも出てきた!?!」

「体も暖まるぞ」

「今夏だよね?!」

シヨウガ科はお気に召さないらしい。どちらも爽やかな風味と、みずみずしい歯ごたえがなんともクセになるのだが。

最近の子は好き嫌いが激しくて困ったものだ、とタクトは残念そうに取り出したものを鞆の中に仕舞った。今夜は生姜焼きにでもしようか。

「あはは! 二人共面白いな!」

タクト達のやり取りを目の前にしたマヤは人懐っこい笑顔を咲かせるが、一つだけ訂正させていたきたい。

「残念、面白いのはココアだけだ」

「ひどい?!」

確かにタクトは冗談を好み、本人もその手の話に便乗することがよくある。しかし、人間の本质として面白いか否かを問うならば、軍配は万年道化に努めるココアに上がるだろう。ただそこに居るだけで周りを笑顔にできる彼女に適う者が居るならばそれは本物の道化であろう。

故にタクトは否定する。自分は一般的な人間であると。

「それって私が普通じゃないってことだよね?!」

はて、なんのことだろうか。

タクトは何処吹く風と言わんばかりにコーヒーを啜る。注文して時間が経ってしまつたせいか些かぬるい。

タクトの態度に遺憾の意を示すココアを適当にあしらっていると、店の扉が乱雑に開かれた。

「すまない！ 部活の助っ人に駆り出されてしまつて……」

慌てた様子で駆け込んできたのはこの店のもう一人のバイトだ。

大分急いで来たようで、制服の所々が乱れており、若干汗ばんでいるのが伺える。いとをかし、とはいつの言葉だつただろうか。

自身の制服を着て店の仕事をこなす、面識のない二人を目の前に啞然とするリゼに、タクトは真剣な面持ちで問いかけた。

「リゼ。和服とメイド服、どちらが着たい??」

「うわああああ!!」

「り、リゼさん!?! 待つてくださいい!」

突然大声で叫びながら店を飛び出すリゼと、それを追うチノの後ろ姿を眺めながらタクトはコーヒーを一口。

一仕事終えた後の一杯は冷めていても、なぜここまで美味しいのだろうか。

数分後、笑顔のリゼと『お話』するタクトの姿が、そこにあった。

第十八話 最高の笑顔を貴方に

喫茶店の役割とは何か。

この問いに対する回答は十人十色、人によっても状況によっても変わるだろう。

タクトは喫茶店は心休まるオアシスのような場所であるべきだと思っている。

日常生活という名の砂漠を歩く途中でふらりと訪れ、そこで出されるコーヒーと料理をゆっくりと味わい、店員との会話に花を咲かせる。そうすることで明日を生きる活力を蓄えるのだ。

タクトもそうした心穏やかに過ごせる場所を求めて、この日も変わらずラビットハウスを訪ね、高品質なコーヒーを味わいながら、二人の小さい臨時アルバイトとの会話を楽しんでいたのだ。

そして現在。

「さて、タクト。何か言いたいことはあるか？」

オアシスは大嵐に見舞われていた。

数分前、突如として店を飛び出したりゼダだったが、しばらくすると落ち着いたらしく、随分と軽やかな足取りで戻ってきた。彼女は店に入るなり、タクトを視認するととても

いい笑顔で近づいてきたのだ。

この時タクトは言い知れぬ危機感を覚えその場を離れようとしたが、第六感が少しでも目を離せば殺られると告げており、とてもじゃないが逃げ出せる様子ではなかった。そうこうしているうちにもリゼとタクトの距離は狭まり、ついには手を伸ばせばリゼに触れられる位置まで来てしまった。それは彼女にとつても同じであり、つまりは逃げられないのである。

こうして出来上がったのが、この状況だ。

一見すると和気藹々とお喋りを楽しんでいるようにも見えなくはないが、どこことなく命のやり取りが行われているような剣呑な雰囲気があたりを支配している。

依然としてリゼは笑顔を絶やさずに、カウンターを背にして座るタクトの前に仁王立ちをしている。

怖い。

自分の話術だけではどうにもならないと理解したタクトはココアに助けを求めようと、正面のリゼから視線を逸らしてアイコンタクトを送るが、

「ふふふ。タクト君、リゼちゃんとお話ししないとダメだよ？」

ココアが怖い。

もしかなくても先ほどの件でお怒りなのだろうか。

いや、彼女の目が笑ってないところを見るに、確実にキレてる気がする。

タクトとしてはちよつとした冗談のつもりだったが、これは少し洒落にならない状況だ。

笑うという行為は本来攻撃的なものである、などといった話は聞いたことがあつたタクトだったが、まさか身に染みて知ることになるとは思いもよらなかつた。

一縷の希望を託し、今度はカウンター内で恐る恐るといつた様子でこちらを伺つているチノとティッピーに助けを求めろが、

「すみません。私にはどうすることもできません……」

「自分で蒔いた種じゃ。自分で何とかせい」

希望は潰えた。

もはや一切の救済も残されていない。

確かにこの状況はタクトの冗談が招いた結果だが、タクトは穩便に事を運びたいと思つている。

どうにかして店から脱出しなければならぬ。

「ああ、そういえば用事が残つていたんだつた。そろそろお暇しないと……」

タクトはわざとらしく腕時計を確認して椅子から立ち上がり、荷物を持つて店を出ようと思つた。このまま店から出てしまえばミッション・コンプリートだ。

ガシツ、と。

背後にいたりぜに肩を掴まれた。

その手には少し、というかかなり力がこもっているようで、痛い。

ココアもタクトの進行方向上に立ち塞がるように移動してきた。

退路が完全に断たれてしまった。

「まあタクト。もう少しゆっくりしてけよ」

「そうそう。私もう少しタクト君とお話したいなあ」

そう言って笑う彼女たちの声はとても穏やかで、しかし、どこか冷たさを感じる。

傍から見ると笑顔の美少女二人に囲まれてなんとも羨ましく妬ましい状況にも見え

なくもないが、

「ふっふっふ……」

「ふっふっふ……」

再度言うが、彼女たちの笑顔は目が笑っていない。

前後共に動けない状態から横にズレて後退りするが、やがて壁に背をぶつけてしまった。

完全に身動きを封じられたタクトに、黒い笑顔を浮かべた少女達が詰め寄る。

これは万事休すか。

「あはは！ みんな仲がいいんだな！」

「そうだねー。みんな楽しそうだね！」

追い詰められたタクトが最終奥義『大地全に咲力きし風土信下子座』を発動するべきかと悩んでいると、臨時バイトの少女たちの笑い声が聞こえてきた。

マヤとメグの二人にはこの緊迫した状況が微笑ましい光景に見えるらしく、リゼの肩越しにそちらの方に目を向ければ楽し気に笑い合っているのが確認できた。

当事者としては息が詰まるような思いだが、二人が楽しそうに何よりである。

タクトと相対していたリゼは振り返ってマヤとメグの姿を改めて確認すると首を傾げた。

「そう言えばこの二人は？」

リゼはどうやら二人とは初対面のようだ。

再び店に戻ってきた彼女の意識は全てタクトに向けられていたので、そのことはすっかり頭から抜け落ちていたのだろう。

不思議そうに自分の制服を着たマヤを観察するリゼに、ココアはすかさず、

「マヤちゃんとメグちゃんだよ！ チノちゃんの友達で、私の新しい妹達です！」

と、さりげなく妹を増やした。

「妹云々は置いとくとして、二人は店を手伝ってくれていたんだ」

制服はついでだ、とタクトは冷や汗を頬に伝えながら説明を加える。
するとリゼは感心したように頷いて、

「へえ、なかなか見込みがあるじゃないか。ありがとうな」

「お礼なんていいよ。ね、メグ！」

「うん！ 可愛い制服も着られて楽しいよ」

感謝されたマヤとメグは屈託なく笑うと、素直な感想を述べた。

本人達は初めての接客が新鮮で、制服を着ることで従業員の気分を味わい、遊び感覚で手伝ってくれていたのだろう。

それが一悶着を起こした訳だが。

とはいえ、タクトの冗談が全ての始まりだったことはタクト自身も理解しているため、勝手に制服を着ていることについては特に思うことは無い。

寧ろ、この一件でリゼやココアの普段見ることのできない一面を垣間見る事ができたので感謝しているくらいである。

当の二人が怖いので口には出さないが。

「それに面白い物も見つけたからね」

マヤは無邪気な笑顔で制服のポケットから銃とコンバットナイフを取り出す。

ナイフの切先と銃の黒いボディがキラリと光った。

「リゼエエエ!! 物騒なモノを持ち込むでない!!」

マスターの叫びもごもつともである。

どちらも模造品だと信じたい。

ともあれ、マヤの持つ得物はどちらもリゼのものだ。

すると当然、

「素人に扱えるものじゃない。返せ」

こう来るわけだ。

しかし、タクトとしてはこれを易々と見逃す訳にはいかない。

リゼの手にこれらの脅威が戻った時、彼女は間違いなく嬉々としてタクトを潰しに来るだろう。

すかさずタクトはリゼとマヤの間に割り込んで物申す。

「マヤ。渡さなくてもいい。それは、君のものだ」

「私のだぞ?!」

「マジで!? 貰ってもいいの!?!」

「良くない!」

「今ならほら、カロリンメートも付けよう」

「訪問販売か!」

流石リゼ。今日も良いツツコミだ。

「私チヨコ味がいい！ メグは？」

「じゃあ私メイプルー」

「全種類あるから好きなのを持ってっていいぞ」

「やったー！」

「もうなんかつつこむのも疲れた……」

どうしたのだろう。

やけにリゼが疲れているように見える。

働き詰めで休みが取れていないのだろうか。

「どうしたリゼ。疲れているのか。休める時は休んだ方がいいぞ」

ピクリ、と。

リゼの肩が震えた気がした。

「……」

続いてニコリ、と。

莞爾とした笑顔と共にこちらを振り返るリゼ。

「そ、れ、は……」

ずんずん、と。

タクトに詰め寄ると、

「お前の……」

「ちよ、リゼ——」

むんずと。

タクトの腕を掴み、

「せいだあああああ!!」

「がああああ……!」

一思いにアームロックを掛けた。

タクトの腕は締め上げられ、曲がってはいけない方向に曲がろうとする関節が悲鳴をあげる。

それ以上いけない。

「おお! 本物のCCCだ! すげー!」

マヤが歓声をあげるのが聞こえる。

確かにすげーにはすげーが、これはCCCではなく単なる暴力である。

助けてくれ。

「そ、そうか?」

人の関節をキメながら上ずった声で答えるリゼ。

照れるなら手を放してからにしろ。

「うん！ 憧れちゃうなあ」

憧れてないでリゼを止めてもらいたいのだが。

キリキリと、関節から変な音が響き始めてきた。

どうにかして抜け出さなければ、タクトの腕が限界である。

「ど、どうだ……？ 今日はこのまま店を手伝ってみては」

息も絶え絶えなタクトがそのようにマヤとメグに提案すると、二人は「いいの!？」と目を輝かせる。

「チ、チノもいいか?」

「それはもちろん大丈夫ですけど……大丈夫ですか……?」

大丈夫かそうでないかでいえば大丈夫ではない。血の巡りが悪くなってるのか徐々に腕の感覚が無くなってきている。最早、指先の感覚がまともに機能していない。

ともあれ、チノから許可を得られたことなので、マヤとメグにはこのまま臨時バイトとして店を手伝ってもらおう。

「俺達は……よつと」

「あつー!」

タクトはリゼの力が弱まった一瞬を狙って、くるりと身を翻し、器用にリゼの腕から

逃れた。

解放された腕をだらんと垂らすと、血が戻ってきてじいんと熱くなってくる。

「客として座っていきましょう」

タクトは手近なテーブル席に腰を下ろし、指先まで戻ってきた触覚を確かめるように手を握ったり開いたりする。

どうにか最大の修羅場は乗り越えた。

腕の感覚も戻り、無事にコーヒータイムに戻れそうで一安心である。

「そうだね。私達もお客さんをしていようかな。ね、リゼちゃん」

「そうだな。なあ、タクト？」

ココアとリゼもタクトと同じテーブル席に座った。

無論、タクトの退路を潰すように、タクトの右側にココアが。左側にはリゼが。

両手に花である。

「ふふふ……」

「ふっふっふ……」

「……」

その花はとても冷たく、鋭い棘と毒がついているが。

この後タクトは二人から懇々と説教を喰らうことになる。途中で挙げられた悪行

のほとんどに身に覚えがあったので、タクトには肅々とお叱りを受けるしか選択肢はなかった。

冗談も程々にしろだの、突っ込む身にもなれだの、妹を取るなだの、お前の鞄はどうなってるだの、どうしたら妹に頼られるのかだの、先程のアームロック抜けを教えろだのと、こつてりと絞られた。

後半から説教というよりはお悩み相談のような状態になり、最終的に臨時バイトのマヤとメグも会話に参加し、和気藹々とした雰囲気か店に戻ってきたのだった。

少女達の話を再度注文したコーヒートを片手に聞く最中、ふとカウンターのの方に目をやると、物憂げにこちらを見つめるチノの姿が印象的だった。

###

ラビットハウスのバイト事件から数日、タクトはフルール・ド・ラパンに足を運んでいた。

太陽は既に最も高い位置を過ぎて若干傾きつつあり、所謂おやつ時間の真っ只中である。

喫茶店の激戦区でもあるこの街はアフタヌーン・ティーの時間になるとあちらこちら

から魅惑的な香りが立ち始めるのだ。

当然、タクトがフルールに着くまでの間もパンの焼ける芳ばしい香りだったり、ハチミツやチョコの甘い香り、嗅ぎなれたコーヒーの香りが辺りを漂っており、タクトの空腹中枢を刺激していた。

この日タクトは昼食を早めに摂ってしまったこともあり、この時間帯の街歩きには少々辛いものがあつた。

「お待ちどうさま」

タクトが空腹感を紛らわそうとメニューを適当に眺めていると、金髪のくせつ毛にロップイヤヤーが良く似合うお嬢様メイドが、タクトの注文をトレイに乗せてやって来た。

ハイビスカスティーとシヤロ特製クッキーが目の前に置かれるので、軽く会釈をしてからティーカーップに手を伸ばす。

爽やかな酸味とフルーティーな味わいが空っぽの胃袋を優しく潤してくれる。

「それにしても珍しいわね。タクトがこっちに来るなんて」

シヤロは不思議そうな顔をして軽くなったトレイを抱き抱えた。

それもそうだろう。

タクトはラビットハウスでコーヒーを飲んでから喫茶店に顔を出すことも多くなつ

たが、そのほとんどがコーヒーを主に取り扱う店である。コーヒー以外の、紅茶や日本茶などといった飲み物を提供する店にはあまり行かない。

別にタクトはこれらの飲み物が嫌いということではなく、寧ろコーヒーを嗜む以前までは抹茶ばかり飲んでいた。それどころか、ある日ふらつと訪れた古物市で茶道具が安売りしているのを見つけ、それら一式を衝動買いした上で暇な時間に自分で抹茶を点てるなど、それなりに茶を嗜んでいたのだ。

最も、数ヶ月もすれば市販でもそれなりに旨い抹茶が飲めることに気づき、茶道具一式は押し入れの奥の方に仕舞われることになったが。

あれらはまだ使えるのだろうか。

「たまには紅茶も悪くないと思ってな」

「そんなこと言つて、どうせうちの制服が目当てなんでしょう」

嘘をつくなどでも言いたそうにタクトをジト目で見るシャロ。

そういった気持ちも全く無かったと言えば嘘になるが、紅茶が飲みたかつたのも事実である。

正直に伝えたのに疑われるのは誠に遺憾である。

「まあ、一番はシャロに会いたかつたんだけどな」

「ええっ!? ……じ、冗談も大概にしなさいよね!!」

怒られてしまった。

タクトとしてはこちらが本題であり、そのためにフルールを訪れたという、嘘偽りなど一切含まれていない言葉だったのだが。

顔を赤くしてこちらを睨みつけるシャロに肩を竦めて、タクトは用意されたクッキーを一つ頬張った。

少ししつとりしていて甘すぎず、紅茶と合わせても相性が抜群な仕上がりがりだ。

「ん。相変わらず美味しいな」

「ほ、褒めても何も出ないわよ」

そう言いつつ、シャロはくせつ毛を指先で弄りながらニヤけるのを隠しきれない様子だ。

見ていてとても心が暖かくなる。

気分としては手料理を褒められて悪態をつきながらも嬉しそうにする孫を見守る祖父だ。

無論、シャロもタクトもそんなに歳の差はないが。

「それで！ 今日はどうしたの？ 何か相談事でもあるの？」

自身の照れを隠すようにしてシャロは強引に話を進めようとする。

タクトとしてはもう少しからかいたいという悪戯心もあつたが、これ以上やると出禁

にされかねないので、ここは大人しく引き下がることにした。

「まあ……相談事という程でもないが、少し気になってな」

タクトは紅茶を一口飲み、一息ついてから話す。

「最近、チノの元気がないように見えるんだ」

「チノちゃんか？」

先日、チノのクラスメイトであるマヤとメグがラビットハウスに立ち寄り、店の手伝いをしていった。

二人とも初めての体験だったらしく、たどたどしい様子はあったものの、一生懸命に仕事をこなそうとする姿はココアとリゼも高く評価していた。

あれからというものの、マヤとメグは時々店を訪れるようになり、リゼ達と楽しげに会話している姿を見かけるようになった。

タクトも何度か彼女達の会話に混ざっているが、なぜかその度に鞆の中身を見せてほしいと頼まれる。特にやましい物を隠し持っているわけでもないので鞆の口を開いてみせるが、皆一同に首を傾げる。別に普通の鞆なのだから何もなくて当たり前だろうとタクトは思う。

それはさておき、この頃からだろうか。チノが仕事中に上の空でコーヒーとアイスココアを淹れ間違えたり、ココアやりぜ、タクトに対する当たりが普段と違ったりするの

は。

具体的にはコーヒーの感想を述べても若干素っ気ないのである。普段であれば自分が淹れたコーヒーが褒められて、照れながらも嬉しそうにするのだが。丁度、先程のシャロのように。

最近は「そうですか」の一言で片付けられてしまうのでタクトは少し寂しかった。

シャロくらいの反応をしてくれればとても満足できるのだが。

タクトが事の顛末を話し終わると、シャロは神妙に頷いて言う。

「嫉妬しているんじゃない？」

「嫉妬？ 俺達にか？」

言われてみれば確かに、心当たりは無くもない。

タクト達がマヤ、メグと話している時、チノはいつも遠目で見ていた。

それはチノが会話に参加したくなかったという訳ではなく、普段から一緒にいる友人達が自分以外と話して楽しそうにしているのがもどかしいのだろう。

心の内にそういった思いを抱えているため、実際に本人達と話す時にどのような顔をしていいのか分からない。そのせいでタクト達に素っ気ない態度を取ってしまうのだろうとタクトは考える。

「それだけじゃなくて、貴方達はその友達を相手にしているから寂しいのよ。きつと」

「かまって欲しかったということか？」

けれどもタクト達はチノを蔑ろにしていた訳ではないはずだ。

いくらマヤとメグが店に来たからといって誰か——チノとの交流を疎かにするなどありえないし、実際にそのようなことはしていない。寧ろ、積極的なコミュニケーションを取ろうと話しかけていたくらいだ。

ココアに至ってはチノの気を引こうと仕事そつちのけでチノとのスキンシップを
CCCを掛けられ
 図っていた。もちろん、その度にリゼに注意を受けていたが。

「複雑なのよ。チノちゃんくらいの女の子は」

「そういうものか」

「そういうものよ」

思春期の少女は色々大変なのだろう。

チノ自身も自分の思いと実際の行動の乖離に悩んでいて、タクト達との接し方にも四苦八苦しているのかもしれない。

タクトとしてはチノが困っているのなら親身になって相談に乗ってやりたいところだが、こればかりは本人の気持ちの問題で、何よりタクト達自身がチノの悩みの対象なのだ。

タクトにできることは黙って見守ってやるくらいだ。

「それならチノが落ち着くまで待つさ」

焦らなくても時間が解決してくれるだろう、とタクトは少しぬるくなった紅茶を口に運んだ。

店の窓ガラス越しに外を見れば、木組みの街は夕焼け色に染まりつつあった。時間が経つのは早いものだ。

ふと、シャロがこちらを物珍しそうに眺めているのに気づく。

「……タクトは変わっているわよね」

「そうか？ そんなに変か？ この服」

別に普通のワイシャツだと思うのだが。

容姿でおかしな所はないとタクト自身は思っている。

タクトの美的感覚が一般的なそれとズレているのなら最早どうしようもないので諦めるしかない。

「そうじゃなくて！」

「じゃあズボンか」

別に普通のテーパーパンツだと思うのだが。

カラーリングもピンクや紫といったショッキングなものではなく、ごく一般的な紺色のズボンだ。

タクトの色彩センスが一般的なそれとズレているのなら最早どうしようもないので諦めるしかない。

「それも違うー！」

「ともすればこの鞆か」

別に普通の手提げ鞆だと思うのだが。

中身も銃火器や薬物などといった危険なものではなく、タオルや畳まれたビニール袋など、入っけていてもおかしくない物ばかりだ。

タクトの収納センスが一般的なそれとズレているせいで見た目より多く入るので非常に重宝している。

「それは……少し気になるけど……違うの!! なんていうか、私達との接し方が……その……遠すぎないけど近くないというか……」

途中でここによごにと言いつい淀むシャロだが、どうやらタクトの、彼女達との距離感が気になっているらしい。

タクトとしては異性にベタベタとくつつかれては彼女達が嫌な思いをするのではないかと思ひ、気を配っているつもりだったのだが、それがかえって変な気を遣わせることになってしまったようだ。

「不快なようだったら申し訳なかった」

「ち、違うの!! 嫌って訳じゃないの! 何回もウサギから助けて貰ってるし……野菜もくれるし……リゼ先輩の写真もくれたし……。むしろ……気にかけてくれるように……嬉しいし……」

タクトが頭を下げて謝ると、シャロは慌てた様子で弁明をする。

尻すぼみに声が小さくなっていき、後半は周囲の客の会話にかき消されて聴き取れなかったが、どうやらシャロはタクトのことを嫌っている訳ではないようだ。

「そうか。それなら良かった」

タクトはてつきり馴れ馴れしいと思われているのではないかと心配していたが、それも杞憂だったらしい。

「タクトは……」

嫌がられてる訳ではなくて安心したタクトが紅茶を一口飲んで一息つくと、シャロは何やら意を決したようにタクトの名を呼んだ。

「……タクトは、いつも私達を見守ってくれてるけど……タ、タクトだって! 何か困ったことがあったら……相談くらいは乗るわよ……? だって——」

一息、

「友達じゃない。私達」

顔を僅かに赤らめながらも、はにかんで笑うシャロに、タクトは一瞬見とれてしまっ

た。

それと同時にタクトは驚いた。

頭蓋を大きく揺さぶられた気分だった。

タクトは高校に入るまで、親友や友達と呼べるような付き合いはなかった。

唯一、自身と親しくしてくれた存在も中学校に上がる前に失せてしまい、中学時代は学校を転々としていたため、友人などできるはずもなく、ただ時を過ごしてきた。

そのため、タクトには友達との距離感の掴み方が分からなかったのだ。

「そうだな」

それでも、ひよんなことから知り合った彼女たちは、一概にタクトのことを友達と呼び、その接し方を教えてくれる。

タクトはくつくつと笑い、やがて落ち着くと、今度はシャロに微笑み返した。

「これからもよろしく頼む。シャロ」

「いい、言われるまでもないわよ」

この日の夕焼けはいつもよりも眩しく、暖かく思えた。

第十九話 穏やかな陽に誘われて

気付いた時にはもう、手遅れだった。

ミルクが注がれた器をひっくり返せば二度と元の姿には戻らないように、時間もまた過去に遡ることはない。一度失ったものは手元に戻って来ないことが世の常である。

それはもちろんタクトだって理解しているし、寧ろそういつた世界の理は受け入れるべきだと常日頃から思っている。

故にその時が来てもタクトは取り乱すことなく、平静な自分を保っていられた。

カーテンの隙間から差し込む陽光が布団にくるまったタクトの目元を照らす。それがあまりにも眩しいものだから、太陽に背を向けるように身じろぎを一つしたところだ。タクトの頭に疑問が浮かんできた。

今は、果たして何時なのだろうか。

タクトは未だぼんやりとしている頭を無理やり起こし、仄暗い部屋の隅に置かれた柵の方へ眼を動かす。

ちくたくと、止まることなく時を刻み続ける置時計の短針は今まさに十の数字を指す

ところだった。

時間で言えば朝というよりは昼前といったところだろうか。

休日であればこのくらいの時間に起きて活動を始めることはそれほど不思議なことではない。平日に学校、あるいは会社に通うために早起きをしている人間でも、いざ休みとなるとタクトのように二度寝を繰り返し、幸せと背徳感を味わいつつ布団のぬくもりに身を任せることもあるだろう。

「……」

欠伸を噛み殺しつつ布団から這い出て立ち上がり、カーテンと窓を開ければ、既に高く上がった太陽の光が差し込み、部屋中に満ちた。

暖かく心地の良い光を全身に浴びつつ伸びを一つすると、眠りかけていた身体に血が巡り一気に目が覚める。

いい天気だ。こんな日は外に出て散歩でもしたい気分である。

しかし、寝巻のまま外出するわけにはいかない。いつも通りの格好に着替えなければならぬのだ。

顔も洗わなければならないし、若干だが腹も減っている。

台所の戸棚に食パンが残っていただろうか。冷蔵庫には牛乳と、ハムも入っていたと記憶している。

軽く何か腹に入れてから出かけよう。

「つ……………」

今一度自分の状態を確認したタクトはもう一度大きく伸びをし、深呼吸をした。街の空気に僅かにだが混ざっているコーヒーの香りがタクトの脳を刺激する。

そういえば、今日は散歩よりも優先するべきことがあった。街中をのんびりと歩き回るのはまた今度にするべきだ。

とはいえ、何も急いで出る必要はない。ゆっくり朝食を摂ろう。

差し当たっては、台所に向かって食事の用意をしなければ。

吸い込んだ空気を吐き出し、自分に喝を入れるようにして独り言を吐く。

「さて、学校に行くか」

今日は平日である。休みでもなければ午後授業でもない。

これはただの——

寝坊である。

##

既に遅刻は確定している。少し急いだところで状況が好転することはない。寧ろ、下手に走ったことで街の硬い石畳の上で転び、顔面スライディングでも決めようものなら大惨事は免れないだろう。

それならば一層のこと、じつくりと準備を済ませ、平日の昼の街並みを見ながら、ふらふらと歩いて学校を目指せば良い。一時間の遅れが二時間になったところで何の問題があるだろうか。

そういう訳で、太陽に照らされ熱気を放つこの街を、タクトは鞆を肩にぶら下げ歩いていった。

既に通勤、あるいは通学ラッシュの時間を過ぎていたためか人通りはそれほど多くない。特に制服を着ているような同年代の人物は、当然だが全く見かけない。

買い物に向かうのだろうか、バッグを片手に街を歩く婦人がちらりとこちらを一瞥し、そのままスーパーのある方向へとすれ違っていく。

周りの建物を見てみればベランダに干された洗濯物が風になびき、扉にかけられたOPENと書かれた看板がゆらゆらと揺れている様子がうかがえた。

街は平和そのものである。

これだけ静かな街並みを見ていると、なぜ自分は遅刻してまで学校に向かつて歩いているのか、別に今日ぐらいサボってしまっても構わないのではないのか、といった邪な

思考が生まれてきてしまう。

しかし、考えてみれば最近のタクトは律儀に登校時間を守って学校に通っている。その証拠に、遅刻をするのは学年が変わってからは今日が初めてである。

去年までは進級に支障が出ない程度に遅刻やサボりを繰り返していたのだが、新学期が始まり、ココアや千夜と共に学校に通うようになってから、意識的に学校を休むということはなくなった。

別に、彼女たちと約束をしているわけではない。ただ、新学期から数週間程、登校時間が被ることがあった。最初は度重なる偶然に三人で驚きあっていたものだが、その後も何度か登校を重ねるうちに、自然と彼女たちと通学するのが当たり前になっていたのだ。

学校への近道にもなっている公園のベンチに腰かけ、携帯の着信履歴を確認してみれば、八時くらいに二人からの電話があったと分かる。

加えて、メールボックスには最新のメールが以下のような文面で届いていた。

——件名：タクト君生きてる!?

タクト君大丈夫？ モフモフ成分不足で倒れてない？ ダメだよ！ ちゃんとティップイーをモフモフしないと！

朝も会えなかったし、電話も出ないから千夜ちゃんも心配してるよ！ 学校には来てるんだよね？ お昼一緒に食べようよ！ 今日はいいい天気だから中庭で食べればピクニックみたいだよ！ きつと気持ちいいと思うんだけど、どうかな？

あ、もしかしてお休み!? 具合が悪いなら私がお見舞いに行くよ。タクト君のお家分らないけど……。とにかく！ お姉ちゃんに任せなさい!!

P S

もしサボりだったらお姉ちゃん許さないからね!!!

あちらこちらに絵文字が鑊ちりばめられており、メールを作成している時の差出人の表情を鮮明に思い浮かべることができる。

仮にここで、サボる案も出ていたなどと返信をすれば帰り道、あるいは次にラビットハウスに訪れた際にお小言を頂くことになるのだろう。そもそも、寝坊して遅刻を確かなものにしている地点で少なくとも話のタネには困らないはずだ。

とは言え、それは彼女たちが本心からタクトを心配してくれているからこそその叱咤であることはタクトも理解している。本気の言葉だからこそありがたいと思えるし、同時に申し訳なさを覚えてしまう。

本来ならばさせる必要のなかった心配に対しての謝罪と、寝坊をしたので散歩をして

いるという旨のメッセージを端末に打ち込み、最後に昼食の約束を添えて画面上の送信ボタンを押す。

送信完了の文字が画面に表示されたのを確認してから端末を懐に仕舞ったところで、タクトは何者かの視線を受けていることに気が付いた。

監視、というよりは観察されているかのような感覚だ。

集中して視線の元を探ってみると、タクトが座っているベンチの後方から何やら音がするようだ。

該当する場所には草むらがあるはずだが、がさがさと草同士が擦れる音が聞こえてくる。

何事かと体を捻ってそちらに目を向けてみれば、手帳とペンを構えてこちらを凝視している女性がいた。

屈むようにして草むらと同化する様子は不審人物以外の何者でもなかった。

「ふむ、ふむ……昼間の公園で黄昏れる男性……孤独にも不撓不屈の精神で耐え、ついに不登校を克服するために歩みを進める青春ストーリー……いい話を書けそうです」

何やら納得したように頷きながらメモ帳に筆を走らせているようだった。

念のため弁明しておくかとタクトは孤独でもなければ不登校でもない。

初対面でこの言われようも珍しい。確かに、タクト自身は過去に何度か孤独を味わっ

た記憶はあるものの、面と向かってぼっちだの引きこもりだのと言われたことはない。いつから覗いていた云々、自分をどう見ていたのか云々と色々聞きたいこともあるが、一周回って目の前の女性に興味が湧いてきた。

「あの」

「……あら？」

タクトが彼女に声をかけてみると豆鉄砲を食った鳩のような表情が返ってきた。

「き、気付かれてしまいましたか……。どうしましょう……。？」

どうしましょうはこちらのセリフである。

顔を紅潮させ、伏し目気味にちらちらとこちらを窺うようにされてはタクトとしても反応に困る。

とは言え、何も話さずに気まずい雰囲気身を投じている訳にもいかない。

状況を打開するべくベンチの片側を空け、鞆から缶コーヒを二本取り出して、タクトは女性に微笑みかけた。

「とりあえず、自己紹介でもどうでしょう？」

#####

話を聞いてみれば女性は青山ブルーマウンテンというペンネームで小説を執筆しているらしい。

青山と言えば、最近老若男女を問わず莫大な人気を博している小説「うさぎになったバリスタ」の著者も青山という名だったはずだ。

タクトは小説こそ読んではいないが、その評判はココアや千夜を通じて聞き及んでいる。場面ごとに的確な言葉を選び抜き、あたかも実際に体験してきたかのような描写で、巧みに読者を引き込む青山の文章は幅広く受け入れられ、映画化の話も進んでいるという噂だ。

彼女が展開する独特な世界観が、映画でどのように表現されるのか気になる、というのは千夜の言である。

「タクトさん、と言うんですね。良い名前です」

タクトから見た青山の印象はマイペースでおっとりとしているというものだ。

ふんわりとした髪型も相まって物静かな雰囲気的女性で、缶コーヒーを傾ける姿を見ても文芸家を匂わせる出で立ちだ。

「それで、青山さんは俺に何か御用ですか？」

そんな世間でも有名人という立ち位置にいる小説家が、なぜ一般学生であるタクトの動向を監視していたのだろうか。見たところで面白いものが現れるわけでもあるまい。

「はい。新しく書くお話の参考にといい、観察させていただきました」

タクトの疑惑の視線に対してニコニコとしながら応える青山。

彼女の人柄からして、この言葉に嘘偽りはないだろう。そもそも、ここで嘘をついたところで何の意味もないし、別にタクトも跡をつけられていたことに対してあれこれ言及する気はない。

しかし、新作のモデルとして選ばれるとは少々恥ずかしいものがある。

なぜ彼女はタクトを観察対象として尾行していたのだろうか。

「実はネタを探して今朝から街を散歩していたのですが、その道すがらに制服姿のタクトさんを見かけまして……。今日は平日で、時間も既に授業が始まっているはず……。豊作の予感がしてつい……」

なるほど。確かに、平日の昼間に学ランを着て歩いていれば少なからず自立っていたことだろう。もし自分以外に同様の格好をした人物を見かけたらタクトは親近感に近い感情を抱いていたことだろう。

「何か収穫はありましたか？」

「はい。とても素晴らしいイメージが湧いてきました。ありがとうございます」

その湧いたイメージというのが不登校だったり引きこもりだったり、何かしらの問題を抱えた人物ということだろうか。

ぺこりと頭を下げる青山の前に、タクトは微妙な心境になった。

「……お役に立てたのなら何よりです」

おそらく自分は苦笑いを隠しきれてないのだろう、とタクトは思った。

心なしか口に含んだ缶コーヒーも苦く感じた。ブラックだから当然なのだろうか。

そんなタクトの隣で青山は、さも満足といった表情でコーヒーを啜る。

「美味しいコーヒーですね」

「すぐそのスーパードで買った、百円くらいのコーヒーですよ」

別に見栄を張りたい訳ではないので正直に話す。

生活費をバイト代で賄っている学生の身で高級なコーヒーを常飲することは難しい。

そこでタクトがいつも鞆に忍ばせているのは某有名ブランドの缶コーヒーだ。

大衆に何十年と愛され続ける商品なので、間違いなく美味しいのは確かなのだが、白

銅の硬貨一枚で手に入るコーヒーに感動されても、それはそれで反応に困る。

「だからこそ、です。いつも飲むものでも、違う環境と一緒に飲めば味わいも変わってき

ます」

身近にあるものだからこそ、普段と違えばその差を顕著に感じることができるとい

うことだろうか。

日本には古くから花や雪を見ながら酒を嗜む風習がある。同じ酒でも、周りの風景や

共に呑む人、酒を注ぐ器などが異なれば感じ方も変わってくる。尤も、その味の違いを感じる事ができるのは、？むんが酒を愛しているからであって、実際に味が変わっているわけではない訳だが。

青山の例えも似たようなニュアンスが込められているのだろう。

「……コーヒー、お好きなんですね」

このような返しができるのは彼女が詩人である以前に、生粋のコーヒー好きだからというのに他ならない。

「昔、ある喫茶店で頂いたコーヒーの味に惹かれて、それから……」

「なるほど。では、その喫茶店のマスターには感謝しないといけませんね」

「はい。私が物書きとしていられるのも、偏にマスターのおかげです……」

物憂げな表情を浮かべ、缶の側面を撫でる青山の横姿は絵になる。仮にタクトが画家であれば、この光景を作品として残すことだろう。

今の彼女は世間が認める文豪である。最近では小説の映画化の話もあり、打合せ等でさぞ忙しい日々を送っていることだろう。お気に入りの喫茶店に赴き、恩人と挨拶を交わす時間もそう多くは取れない。

あるいは彼女自身の葛藤もあるだろう。映画化という大きな区切りを迎えてからマスターに会いに行く決めているのか。

どちらにせよ、世話になった人物に会いたくても会えないというのは辛い。それはタクトも良く知る辛さであり、故に青山の心境は痛いほどにわかる。

「また、その喫茶店に行けたら良いですね」

「……はい。その時にマスターに良い報告ができるように、頑張らないといけません」
願わくば、彼女とその恩人の再会が素晴らしいものになるように、とタクトは密かに思う。

気付けば、公園の石畳の道に設置された時計の針は、もう間もなく十二時を指そうと
していた。

そろそろ学校に行かなければ、昼食の時間になってしまう。ココア達と約束をした手前、遅れるわけにはいかない。

僅かに残った缶コーヒーを飲み干し、鞆を肩にかけ、立ち上がった。

「もう、昼ですね。俺はそろそろ行くこうと思います」

「そうですね。私も彷徨ってきます」

そう言つて青山も同様に、手帳をシオルダーバッグに仕舞うとベンチから離れた。

そして、こちらを振り向き、軽く一礼をした。

「今日はありがとうございました。コーヒー、美味しかったです。また、機会があればお会いしましょう」

「ええ。また近いうちに。今度は喫茶店で会えたら良いですね」
「その時は私がごちそうします。それでは」

不思議な人だ。

公園を立ち去る青山の後姿を眺めながら、タクトはそう思った。

掴みどころがないという印象の人物だったが、だからこそ一世を風靡する小説家が勤まるのだろう。

彼女とはまた近いうちに合うことになりそうだ。

さて、こちらにも急いで登校しよう。今から向かえば約束の時間には間に合うはずだ。

タクトは公園のゴミ箱に缶を捨て、足早に学校に向かった。

###

「もー、タクト君ったら、お寝坊さんなんだから」

木陰のベンチでサンドウィッチを頬張るココアの表情は、ぶんぶん、という擬音が合いそうだった。

タクト達の通う学校の中庭は、公園ほどではないが緑が豊かでくつろげる空間である。天気が良い日にここで昼食を摂れば軽いピクニック気分が味わえるのだ。

この日もそういった目的で集まったであろう生徒達がちらほらと見える。

青山と公園で別れた後、少し急いだ甲斐あつてタクトが学校についたのは十二時を少し過ぎたころだった。

時間的には昼前の授業が間もなく終わるタイミングで、構内は早く授業が終わった教室もあるのか若干にぎわっていた。とは言え、もちろん依然として多くの教室で授業が続いていたため、静けさの方が勝っていたが。

タクトはこれ幸いと、普段なら数分と経たず売り切れてしまうフレンチトーストを買いに購買に足を運び、目当てのパンを手に入れたのだ。

その後、中庭に足を運び、ココアと千夜と合流し、現在はお説教を受けている訳だ。

「朝はちゃんと起きなきゃだめだよ?」

予定より四時間遅れて登校したタクトだが、そのあたりの分別くらいはつく。

時間に縛られる現代社会において、朝の時間は貴重なものだ。早起きは三文の徳という言葉がある通り、朝の時間をいかに利用するかで一日の充足度は変わってくるというのは理解している。

「いいか、ココア。睡眠欲というのは人間の三大欲求に含まれることが多い欲求なんだ。これを満たそうとすることは人間を人間たらしめることの裏返しで、ごく自然なことなんだ」

「タクト君が寝たかったただけだよね!」 それっぽく言っても遅刻の理由にはならないよ!

理解はしているが、人間の本能がそれを許さないのだ。

朝の時間が限られていると言っても、布団が放つ心地よい魔力には対抗できない。自身の体温で程よく温まった空間は目覚めたばかりの脳を再び夢の世界へと誘い、目を閉じようものなら逃れられない二度寝の快楽に堕ちることになる。

一度眠ってしまったえば自力で起きるのは不可能に近いのだから、寝坊してしまうのも仕方あるまい。

「でもわかるわー。二度寝って普通に寝るのよりも気持ちいいものね」

千夜の言うように、二度寝というものは通常の睡眠より遥かに心地が良い。

罪悪感と引き換えに得られる満足感ほまさに禁断の果実の如く。気を付けなければそれが癖になってしまい、貴重な休日の半分を失いかねない。実際に、タクトは何度か日曜日の午後に布団にくるまりながら頭を抱えたことがあるのだから、馬鹿にできない。

「ああ。だが、それを享受してはならない……。したら最後だ。深い、深い闇の中に引きずり込まれるぞ……」

「二度寝って怖いよね……」

その通り。二度寝は怖いものだ。

被害に遭つてからでは遅い。その怖さを知つておくことが大切だ。

タクトのありがたい忠告を受けたココアは、むすつとして口を開く。

「全く、タクト君はしようがないタクト君なんだから……。今度から私が起こしてあげるよ」

これはまた、突拍子もない提案である。

あまりにも急な話に、タクトは思わずフレンチトーストを落としそうになった。

千夜の方に目を向けてみれば面白いものを見つけた、と言わんばかりにニコニコしながらこちらを観察している。

「そうすれば絶対遅刻しないし、一緒に学校行けるよ！」

確かに、誰かに起こして貰えれば遅刻は防げるし、それがココア達なら登校時間を合わせることも可能となるだろう。

しかし、これには二つの問題がある。

タクトは危うく大地に還りそうになったフレンチトーストを齧り、その問題点についてココアに聞いてみた。

「……一応聞か、どうやって起こすつもりなんだ？」

「え？ タクト君のお家に突撃するのはダメ？」

「俺の家からラビットハウスまでは結構距離があるぞ」

そもそもラビットハウスから見た時、学校とタクトの家は方向が全然違う。

往復するだけでも時間がかかることだろう。

「じ、じゃあ電話で起こすよー」

家に直接行けないのなら文明の利器を使う。当然の発想だろう。

携帯電話なら、着信音もあるので目覚ましにはちょうど良いし、ココアがタクトを起こすという目的も達成できる。

タクトが端末の充電を忘れたり、マナーモード状態にしておかなければ非常に有用な手段である。

しかし、問題はそこではない。もっと根本的な部分だ。

「確かに、それなら大丈夫そうだが……」

「でしょ？」

ところで、タクトは以前、ラビットハウスにてチノからある相談を受けていた。

丁度その時はリゼもココアも店に居なかったため、相談の内容を知っているのはタクトとチノとティッピーだけだ。

別に、二人には聞かせられないようなデリケートな悩みというのではなく、聞けばとても微笑ましい、姉妹の仲睦まじさが伝わってくる、暖かい困りごとなのだが。

——最近、ココアさんが朝起きてくれなくて困ります。休みの日は少しくらいならいいのですが、学校がある日も同じようだと心配です。いつもは私が起こしているのですが、このままではココアさんが自分で起きなくなってしまうです。一緒に学校に行くつて言つてたのに……全く、ココアさんはしょうがないココアさんです。別に妹だから気にしているとかそういう訳じゃ……ち、違います！ 笑わないでください!! からかわないでください!!

余談だが、この日のチノのココアとタクトに対する当たりには若干の棘があつた。

タクトが自業自得なのはその通りなのだが、ココアは完全にとぼちりである。正直申し訳ないと思つている。

反省はしている。もちろん、このことを本人に伝える気はないが。

さて、ココアのモーニングコールの問題点だ。

「ココアは起きられるのか?」

「……お、お姉ちゃんに任せなさい!」

当然だが、誰かを起こすのなら自分はその人より早く起きなければならぬ。

誰かに起こされているということは、自分も朝の準備で忙しいはずなので、とてもで

はないが他の人を起こすという余裕はないだろう。

とは言え、目を泳がせながらも必死に腕まくりをするココアを無下にする訳にもいかない。

自分の朝の時間を使ってまで、彼女がタクトを起こそうとしているのは、一緒に登校したいと思ってくれているからだ。

そんな彼女の想いに応えられないほど落ちぶれる気はない。

「次からは起きられるように努力するさ。だから、そこまで心配しなくてもいい」「むー……」

というよりも、これはそもそもタクト自身の問題なので自分で解決しなければならぬ。

確かに、主人公が幼馴染の少女に起こされるといふシチュエーションは、漫画やアニメなどといったフィクションの世界ではよく見られる。世の中の男性の中にはこういった状況を羨み、妬み、渴望する者も少なからず存在するだろう。無論、タクトもその一人だ。クラスでも多くの視線を集める美少女が、毎朝家を訪ね、寝ている自分に優しく声をかけ、起こしてくれる。そんな人生を送ることができればどれほど幸せか。考えたことがない訳ではない。しかし、現実はその優しくないのがこの世界だ。どれだけ願おうとも転生も召喚もされない。今の生活を受け入れなければならないのだ。

そんな中で、先ほどのココアの提案だ。正直に言ってしまったえば、相当に魅力的な話だった。

明るく元気な性格の彼女が毎朝起こしてくれれば、気持ちよく一日を迎えることができるだろう。

だからと言つて、自分の不甲斐なさで友人に迷惑をかける訳にもいかない。

地元を離れて一人暮らしをしている手前、友人に生活の世話を任せるといふのは情けないことこの上ない。

それも同年代の少女にモーニングコールを頼まなければ起きることができないといふのは、タクトの沽券に関わる。

しかし、考えてみれば、タクトを友人と認めてくれる少女達は皆、顔だちも整つており、文句なしの美少女だ。千夜は和服が良く似合い、甘兎庵の看板娘としても器量の良さが窺える。リゼは物事をそつなくこなす器用さと、面倒見の良さから後輩達からの信頼も厚いと聞く。シャロは立ち振る舞いに気品があり、何事も真面目に、一生懸命に取り組む姿勢が見て取れる。チノは中学生ながらしっかり者で、祖父の喫茶店を継ごうと日々努力をしているが、時たま年相応の無邪気さを見せる。

もしかしなくても、今の生活はとても恵まれているのではないだろうか。とてもじゃないが、魔王を倒すために異世界に旅立つ気は起きない。

今のタクトの使命は目の前でむくれるココアを宥めることだ。

「まあまあ。また、一緒に学校行けるから。ほら、飴ちゃんをあげよう」

鞆の中からフルーツキャンデーが三粒入った小瓶を取り出して見せる。

散歩の途中で買った、少しお洒落な飴ちゃんだ。

瓶の蓋にはウサギの装飾が施されており、見た目もかわいらしい。

小瓶を受け取ったココアがジト目をこちらに向けてくる。

「……なんか子ども扱いしてない？」

気のせいだろう。

していたとして精々妹扱いといったところだろうか。もちろん、そのような気は一切

ないが。

「千夜もいるか？」

「いいの？　ありがとう」

「せめてなんか言って!!」

予め数個用意していたので、千夜にも小瓶を差し出すと、彼女は素直に受け取ってくれた。

変に勘ぐらず、彼女のようにすんなりと受け入れてほしいものである。

隣で抗議の声を飛ばしてくるココアを横目に、タクトはもう一つ小瓶を取り出し、中

の飴玉を一つ口に放り込んだ。

マスカット味だ。

優しい甘さと、爽やかな風味が癖になりそうだ。